東北大学

平成27年度

教養教育院セミナー報告

教養教育特別セミナー

地殻変動期の教養・教養教育

— 新入生とともに考える —

総長特命教授合同講義

愛と生命（いのち）の教養教育

— 恋の予感から子育てまで —

平成28年5月

東北大学教養教育院
高度教養教育・学生支援機構
Institute of Liberal Arts and Sciences, Tohoku University

巻　頭　言

教養教育院に所属する総長特命教授が中心となって企画立案し開催した2015年度の「特別セミナー」と「合同講義」の報告書を、ここにお届けする。

第5回目となる今年度の「特別セミナー」は、昨年4月13日（月）に開催された。共通テーマは「地殻変動期の教養・教養教育―新入生とともに考える―」である。辻篤子朝日新聞記者、工学研究科安藤晃教授、工藤昭彦総長特命教授よる話題提供の後、出席した学生も参加してのパネルディスカッションが行われた。ここ数年は里見総長に開会の挨拶をお願いしていたが、今回は予定が合わず残念だった。一方、第7回目となる今年度の「総長特命教授合同講義」は、昨年7月28日（火）に開催された。共通テーマは「愛と生命（いのち）の教養教育―恋の予感から子育てまで―」であり、医工学研究科田中真美教授、高度教養教育･学生支援機構羽田貴史教授と山口隆美総長特命教授の講義の後、出席した学生も加えての討論が行われた。この合同講義には、正規の受講生のみならず案内等で知った一般学生も参加し、総数およそ120名と盛況であった。なお、特別セミナーは、学務審議会の先生方の協力を得て開催されており、学務審議会との共催となっている。

二つのイベントは、セミナーと講義という、厳密にはカテゴリが異なる授業形態であるが、構成は同じようなものとなっている。まず、教員側がテーマについて考えていることを話題提供（講義）し、学生に問題を投げかける。そしてパネルディスカッション（討論）では、学生側が主役となり、投げかけられた問題に対して反応し、応答する。それを受け、再び教員側も反応し、応答する。この過程を経ることで、テーマに対する理解が「深化」し「進化」する。この議論の過程は、本冊子によりそのまま味わうことができる。ぜひ、教員と学生との真摯な姿勢での議論を追体験していただきたい。

また、本冊子には、参加した学生が会場内で記した質問や意見と、教員側によるそれらへの回答も合わせて収録した。学生による質問や意見は多岐にわたり、また、本質を突く鋭いものも多数あった。これらにもぜひ目を通していただければ幸いである。

なお、2010年度から始まった総長特命教授合同講義と2011年度から始まった特別セミナーの内容も、すでに冊子として公表している。これらも合わせて手に取っていただければ幸いである。

2016年2月16日

東北大学高度教養教育・学生支援機構長、教養教育院長　　花輪 公雄

目　次

巻頭言（高度教養教育・学生支援機構長、教養教育院長　花輪 公雄）…… i

第Ⅰ部　教養教育特別セミナー「地殻変動期の教養・教養教育―新入生とともに考える―」

1.1. 教養教育特別セミナーの記録 …… 2

●司会（教養教育院総長特命教授　野家 啓一）…… 2

●開会挨拶（高度教養教育・学生支援機構長、教養教育院長　花輪 公雄）…… 2

●セミナー

・話題提供 1「生きる力を身につける～教養教育ってなんだろう？～」（安藤　晃）…… 5

・話題提供 2「想像する力を育む教養教育」（辻　篤子）……12

・話題提供 3「私が取組んだ教養教育」（工藤 昭彦）……18

●パネルディスカッション（森田 康夫、吉野　博、話題提供者、参加者）……25

●閉会挨拶（高度教養教育・学生支援機構副機構長　羽田 貴史）……34

1.2. 特別セミナーに対する学生の評価 ……36

第Ⅱ部　総長特命教授合同講義「愛と生命（いのち）の教養教育―恋の予感から子育てまで―」

2.1. 総長特命教授合同講義事前配付資料 ……41

2.2. 総長特命教授合同講義の記録

●司会（教養教育院総長特命教授　座小田 豊）……46

●はじめに（高度教養教育・学生支援機構長、教養教育院長　花輪 公雄）……46

●講義

・「日々精一杯」（田中 真美）……49

・「学校で学ばなかったこと、子育てから教えられたこと」（羽田 貴史）……54

・「愛と生命：生物学および社会的帰結」（山口 隆美）……59

●討論（森田 康夫、工藤 昭彦、野家 啓一、吉野　博、講義者、参加者）……66

●おわりに（教養教育院総長特命教授　森田 康夫）……76

2.3. 合同講義　受講生の質問・意見と教員からのコメント ……78

2.4. 合同講義に対する学生の評価 ……81

あとがき……84

資　料

特別セミナー　アンケートの主なコメント一覧 ……85

合同講義　受講生の質問・意見と教員からのコメント一覧 ……92

第Ⅰ部　教養教育特別セミナー

地殻変動期の教養・教養教育

―新入生とともに考える―

平成 27 年 4 月 13 日

TOHOKU UNIVERSITY

学務審議会・教養教育院共催

東北大学教養教育特別セミナー

地殻変動期の教養・教養教育

―新入生とともに考える―

日時 平成27年 4月13日(月) 13:30～15:30 [受付開始 12:30]

場所 東北大学百周年記念会館 川内萩ホール

● 開会挨拶

花輪 公雄　理事、高度教養教育・学生支援機構長、教養教育院長

● 話題提供

「生きる力を身につける ―教養教育ってなんだろう？―」
安藤　晃　高度教養教育・学生支援機構副機構長、工学研究科教授

「想像する力を育む教養教育」
辻　篤子　朝日新聞記者、元論説委員

「私が取組んだ教養教育」
工藤 昭彦　教養教育院総長特命教授

● パネリスト

花輪 公雄 [海洋物理学]
辻　篤子 [科学ジャーナリスト]
安藤　晃 [プラズマ理工学]
工藤 昭彦 [農業経済学]
森田 康夫 [数学・数学教育]
吉野　博 [建築環境工学]

● 閉会挨拶

羽田 貴史　高度教養教育・学生支援機構副機構長 [教育学]

● 司会

野家 啓一　教養教育院総長特命教授 [哲学]

問い合わせ　東北大学教務課全学教育企画係　TEL:022-795-7578　E-mail:kyom-k@bureau.tohoku.ac.jp

東北大学教養教育特別セミナー

地殻変動期の教養・教養教育

―新入生とともに考える―

東北大学は、高度な専門性と分野を超えた鳥瞰力を駆使して、新しい価値を創出する若者を世に送り出すため、教養教育の充実を核とする教育改革に取り組んでいます。

この特別セミナーでは、パネリストの話題提供を踏まえ、新入生の皆さんとともに教養教育への向き合い方、社会からの教養教育への期待、教養教育とは何か、などについてディスカッションをしたいと考えています。ジャーナリストとして広い世界で活躍する社会人の方から、教養や教養教育について聞くことができる絶好の機会です。

過去に参加した新入生からは、討論が刺激になった、今までの考え方が変わった、などの感想や意見が数多く寄せられました。皆さんの積極的な参加と討論を期待しています。

東北大学教養教育特別セミナー

地殻変動期の教養・教養教育

―新入生とともに考える―

◆ 次　第

１．開会挨拶　　理事、高度教養教育・学生支援機構長、教養教育院長　**花輪　公雄**

２．セミナー

話題提供１「生きる力を身につける～教養教育ってなんだろう？～」

高度教養教育・学生支援機構副機構長、工学研究科教授　**安藤　晃**

話題提供２「想像する力を育む教養教育」

朝日新聞記者、元論説委員　**辻　篤子**

話題提供３「私が取組んだ教養教育」

教養教育院総長特命教授　**工藤　昭彦**

――― 休　憩 ―――

パネルディスカッション

【パネリスト】

話題提供者　**安藤　晃**[プラズマ理工学]、**辻　篤子**[科学ジャーナリスト]、**工藤 昭彦**[農業経済学]

教養教育院長　**花輪 公雄**[海洋物理学]

教養教育院総長特命教授　**森田 康夫**[数学・数学教育]、**吉野　博**[建築環境工学]

会場の皆さん

３．閉会挨拶　　高度教養教育・学生支援機構副機構長　**羽田　貴史**[教育学]

○　司　会　　教養教育院総長特命教授　**野家　啓一**[哲学]

※今後の教育に役立てるため、終了後、アンケートへのご協力をお願いします。記入後、出口付近のボックスに入れてからご退場ください。

■問い合わせ
東北大学　教務課　全学教育企画係
TEL：022-795-7578
Email：kyom-k@bureau.tohoku.ac.jp

■ご意見等
東北大学　教養教育院
TEL：022-795-4723
Email：info@las.tohoku.ac.jp
http://www.las.tohoku.ac.jp

1.1 教養教育特別セミナーの記録

司会（野家）：皆さんこんにちは。ただ今から、教養教育特別セミナーを開始します。今日はたくさんお集まりいただいて、ありがとうございました。これから､2時間ほど講演とパネルディスカッションにお付き合いください。私は今回の司会を務めます、総長特命教授の野家と申します。よろしくお願いします。今回は、皆さんのお手元に資料があると思いますが､「地殻変動期の教養・教養教育－新入生とともに考える－」という副題がついていますけれども、皆さん東北大学にご入学おめでとうございます。これから１年半から２年間、ここの川内のキャンパスで全学教育と東北大学では呼んでいますが、基礎的な事柄を色々と学んでいただくことになります。皆さんの中には早く専門の勉強がしたいと思われている方もいらっしゃると思いますけれども、やはり木が大きく育つには、ちゃんと地面に根をしっかり張らなくてはなりません。そのための土台作りというか、基盤作りが教養教育だと考えてください。今日は、三人の先生方に教養教育の意義、あるいは学び方についてお話をいただき、そのあと、後半は皆さん方と一緒に質疑応答の形で教養、あるいは教養教育について考えていきたいと思いますので、どうぞ積極的に発言をお願いしたいと思います。それでは最初に、開会の挨拶を花輪公雄先生にお願いいたします。花輪先生は東北大学の教育担当理事で、現在高度教養教育･学生支援機構の機構長、ならびに教養教育院の院長をお務めでございます。それでは、花輪先生よろしくお願いします。

開会挨拶

理事､高度教養教育･学生支援機構長､教養教育院長　**花輪 公雄**

花輪:皆さんこんにちは。ご紹介いただきました、花輪と申します［スライド1］。教育・学生支援・教育国際交流担当の理事を務めておりまして、昨年の４月に高度教養教育・学生支援機構という新しい教育組織、いくつかあった教育組織を整備、統合したんですけれども、それの機構長も務めております。その機構の中に、教養教育院という院があります。その院長も務めております。今日の教養教育特別セミナーの開催に当たりまして、一言ご挨拶を申し上げます。

まず、教養教育院とは何かということなんですが［スライド2］、本学は教養教育を力を入れてやりましょうということで、今から７年前にできた組織であります。書いてありますように2008年４月からこの組織を作って、教養教育の充実に努めております。現在、今司会をなさっておられる野家先生も含めて６名の総長特命教授の先生がおられます。いずれの先生方も現役時代、教育あるいは研究に実績を残された先生で、教養教育に非常に熱心に取り組まれている先生方です。その他、現役の教員として４名の方が教養教育特任教員ということで、手伝っていただいております。教養教育院の先生方は、授業科目ももちろん持っております｡皆さんシラバスの中でご覧になると、どなたがどういう講義を持っているかが分かると思いますけれども、その他に今日は教養教育特別セミナーですが、それから少し後、７月あるいは10月ぐらいになりますが、合同講義も開催しております。右側の『2015年読書の年輪－研究と講義への案内－』ですが、この冊子を皆さんすで

にお持ちだと思います。総長特命教授の先生方が、お１人６冊ずつこれはという本を紹介しております。どうぞ皆さん、いずれもが名著といわれる本でありますので、ぜひ手に取って読んでいただければというふうに思います。

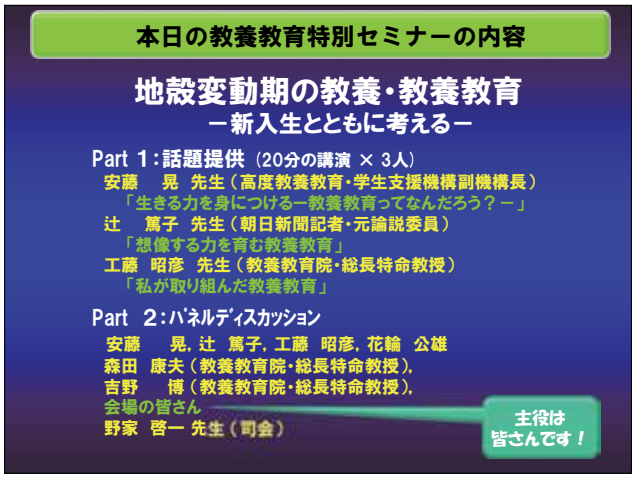
さて、今日の教養教育特別セミナーですけれども［スライド3]、野家先生のほうからもご紹介ありましたけれども二部構成になっていまして、最初は３人の先生方からそれぞれ、今手元にありますような講演題名で講演をいただきます。お一方20分ずつ。その後、パネルディスカッションということで、壇上に３名の先生方の他に私、森田先生、それから吉野先生。森田先生も吉野先生も総長特命教授ですけれども上がります。そして、会場にいる皆さん、実は皆さん方が主役だと私たちは思っているんですけれども、皆さんと教養、あるいは教養教育についてのディスカッションをしたいというふうに思いますので、積極的に参加してください。今回で５回目ですが、１回目からどういうことをやっているのかということでご紹介させていただきます[スライド4]。第１回、そこに書いてありますように、2011年に行われましたけれども、「教養とは？－東北大学生として考えてほしいこと－」から始まりまして、過去の４回、こういう題名でそこに書かれてある先生方が話題提供をして、パネルディスカッションをしております。今日多分２時間フルに教養、あるいは教養教育について色々考えたり議論したりするわけですけれども、過去に遡ってこの時どういう議論をしたのかなと、もしも興味が湧かれましたら、これは全て教養教育院のウェブサイトで見ることができます。前のスライドにそのURLアドレスを書いておきましたので、ぜひ訪問してください。

最後のスライドですけれども［スライド5]、教養とは、教養教育とは、専門知、あるいは専門教育ですね、それと教養、あるいは教養教育の関係というのはどんな関係なんだろう。先ほど、野家先生の方から大きな木に育つためには、豊かな土壌が必要だから、その土壌を作るのが本学では全学教育と呼んでいる１年から２年の川内キャンパスにおいての全学教育なんですよと。その全学教育、イコール教養教育ではありませんけれども、全学教育のかなりの部分が教養教育に当たります。そこの関係を考えてみてください。それで、現在社会、大きく変わりつつありますが、その時にふさわしい教養、あるいは教養教育とはなんだろうかと、繰り返しですけれども、これが今日のテーマです。皆さん一人一人が、自分の問題として考えてくださることを期待しております。考えるということは、非常に苦しいことでもあるんですけれども、一方で楽しいことでもあると私は思います。そういう意味で、これからの２時間、大いに皆さん楽しんでくださるようにお願いします。これで、私の挨拶を終わります。

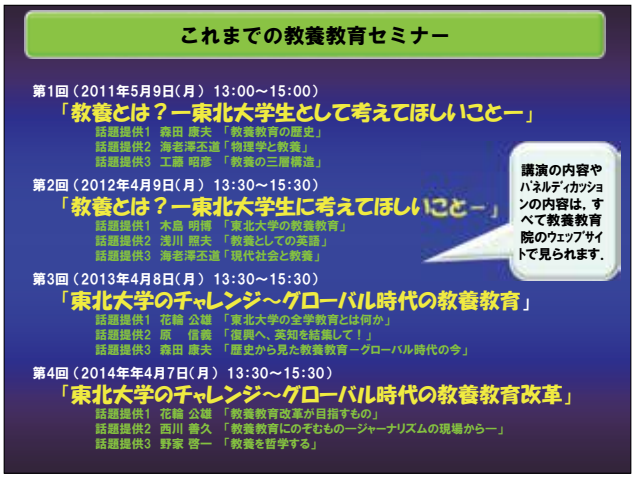
（拍手）

[スライド 1]

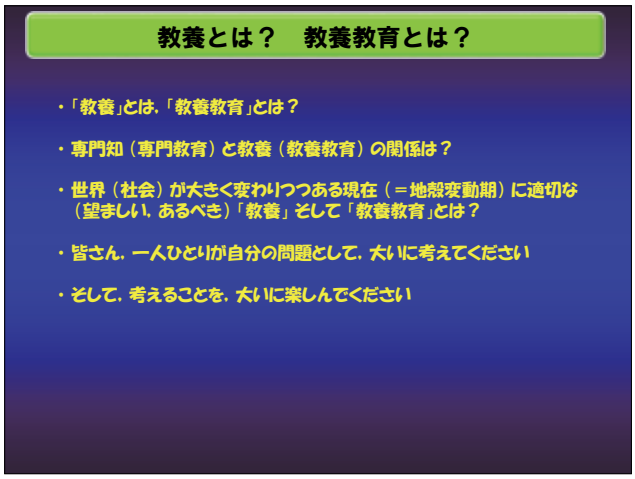
[スライド 2]



[スライド 3]



[スライド 4]



[スライド 5]

司会（野家）：花輪先生、どうもありがとうございました。それではこれから３人の先生方に順次ご講演をお願いします。先ほど花輪先生から、お一人20分という話がありましたが、できましたら15分をめどにして、最大限20分ということでお願いできればありがたいと思っています。後半の方のパネルディスカッションの時間を十分に取りたいと思っていますので、よろしくお願いします。それでは、トップバッターとして、高度教養教育・学生支援機構の副機構長で工学研究科の教授でもあります安藤晃先生に、「生きる力を身につける～教養教育ってなんだろう？～」というタイトルでお話をいただきます。それでは、安藤先生よろしくお願いします。

セミナー　話題提供１「生きる力を身につける～教養教育ってなんだろう？～」

安藤　晃

安藤：ご紹介ありがとうございます。ただいまご紹介いただきました、高度教養教育・学生支援機構の副機構長を担当しております、安藤です［スライド1］。所属は工学研究科で、多分今日は工学部の学生さんもたくさん来られていると思います。このセミナーに引き続いて、工学部新入生向けのセミナーを行いますが、まず今日は教養教育について皆さんと一緒に考えていきたいということで、少しお時間をいただきました。

題目として、「生きる力を身につける～教養ってなんだろう？～」という題目にさせていただきました。まずこの「生きる力を身につける」という話をしたいと思います［スライド2］。この4月に、皆さんは大学に入学されましたが、高校でどういう教育を受けてきたかといいますと、ゆとり教育とか詰め込み教育という言葉は聞いたことがあると思いますが、今は「生きる力を育む教育」というのを実践しています。これは、平成25年に高校の新学習指導要領が変更されましたが、その前からこの考え方でカリキュラムが組まれています。この「生きる力を育てる」というのは、知・徳・体のバランスの取れた「生きる力」を育むということになっていますが、知識や技能の習得とともに、思考力・判断力・表現力などの育成を重視した教育です。そして、その能力を育むために、知識・技能を活用する能力と、読解力の強化、また生涯にわたる学習習慣の習得といったところに力点をおいてカリキュラムが構成されています。そして、アウトプットとして、タフな人材の育成、様々な不安に負けない、チャレンジする心を持った人材、そして体力、いわゆる健全な精神は健全な肉体に宿るではないですけれども、体力もしっかり作りましょうと。そういった教育を受けて、この大学に入学されてきたと思っています。

さて、工学部の学生さんはすでに少し聞いておられるかと思いますけれども、50年後の日本と世界ということで、今私たちが直面している現状について、紹介させていただきたいと思います。急速な人口減少と少子高齢化による生産年齢人口の減少というのは、皆さんどこかで聞いたことがあるかと思います。今ここに18歳の方を中心にして入学生がいますが、皆さん方、同世代の人口というか、同級生が何人ぐらいいるかってご存知ですか。大体今、男女ともに約60万人ずつ。ですから、1年間18歳人口で120万人です。これは平均寿命70歳、80歳としてもいいですけれども、単純に掛け算すると約9,000万人。そうすると日本の人口は、当然ですけれども今の皆さんのこの同世代の人口を掛け算したその長方形型を考えると、当然1億人を切るというのは計算できると思います。まさしく2050年、皆さんが約50歳ぐらいになった時に、日本の人口は1億人を切っ

て、なおかつ 65 歳以上の人口が約 40％を占めることになります。2100 年には 5,000 万人を切るという予想が立てられています。一方で、これを支える財政は、人口が少なくなるから予算は少なくなっていいと思われるかもしれませんが、いわゆる医療費を含む社会保障費がどんどん増えていき、想定される国家予算は 200 兆円を超えると予想されます。なおかつ 70％が社会保障費に費やされる。それを賄うために予算の 50％の借金を毎年繰り返すという、こういった見込みがなされています。一方で世界を見ますと、世界人口がどんどん増えていき、今 74 億人ぐらいだと思いますけれども、私が小学校の時は 36 億人というふうに記憶していますが、この数十年に世界人口は 2 倍になって、勢いよく増えてきている状況です。そして今後も人口増加はもっと続く。30 年後には 100 億人を越えて、なおかつこのうちの約 3 割がいわゆる富裕層になる。皆さん方がいわゆるお金持ちかなと思われるような所得状況になる。一方、日本の場合はどうなるかというと、現在の GDP を維持するのに汲々としている状態を考えると、今は世界第 3 位の GDP の大国ですけれども、世界的な地位がどんどん落ちてくる。さらにエネルギー事情は、予断を許さない状況が今後もますます続きますので、日本のエネルギー政策、そして産業を支える基盤としてのエネルギー施策をきちっと考えなくてはいけない。CO_2 対策も、今は声が小さくなっていますが、当然温暖化対策等も進めなければいけないという状況が生まれています。そういった中で、今、皆さんは何をなすべきかということを真剣に問われている。そういう時代になっています。

さて、これがバックボーンですが、じゃあ皆さんはいったい今、何を持って大学に進んできたんでしょうか［スライド 3］。これは弁慶の七つ道具で、色々な道具を彼は背中に背負っていますけれども、皆さんの背中には、一体何を今背負っているのか。それをちょっと数えてみてくれませんか。僕は数学が得意だとか、あるいはスポーツが得意だとか、色々なことがあるかと思いますけれども、そういった道具立てがあなたのこれからのキャリアをどれだけ支えてくれるだろうかということを考えてみてください。こういった能力を身に付けるというのが、これから君たちが直面している課題のひとつだというふうに考えています。

では何が必要でしょうか［スライド 4］。まず当然勉強できる力でしょう。色々なことを学んでいかなければいけない。そのためには好奇心、情報収集力とか、論理的な推敲力、こういったものが当然必要とされます。一方で、そんなことよりも生活する力が大事だよという人がいると思います。その生活する力という意味ではお金を稼ぐ力や、あるいは食べていくための料理をする力とか。今は女性に料理を任せるような時代ではなくて、皆さん特に男性が多いかと思いますが、料理できないと結婚相手に恵まれないかもしれませんので、心してよく努力してみてください。それから相手を見つける力。危機管理、それから判断する力。危ないことがたくさんあります。大学の入学式の時もお話があったかと思いますが、色々な宗教団体が君たちを狙っているという話があったと思います。そしてもう一つ、仲間を作る力。仲間というのは、ほっといて勝手にできる人と、そうじゃない人がいます。勝手にできる人というのは、別に自分が意識しないだけで、それなりに周りに影響力を与えている人です。こういった仲間を作る力というのはすごく大事ですが、これもやはり努力が必要です。この 3 つの力は、研究する力や教養、そしてリーダーシップを身につけること、生活する力は教養に対応するかなと思います

が、それぞれに対応するでしょう。でもそれだけではなくて、プラスでRisk Takerという考え方をぜひとってほしいと思っています。この「「しょうがない」というコンセプトで思考停止し、挑戦をしない」というのをバツで書いていますけれども、この３つの勉強する力、生活する力、仲間を作る力だけがあっても、成功しないということがよくあります。特に最近日本が世界の中で力をなくしている理由のひとつとして、よくこのRisk Takerをしない、すぐ「しょうがないね」というふうに考えてしまうということが挙げられるという話があります。「しょうがない」という言葉をちょうど表す英語がないということでも分かるかもしれませんが、実はこの「しょうがない」というコンセプトというのは、欧米人にはなかなか理解できないようです。例えば上司が言うからしょうがないね、あるいは、ルールがこうなっているからしょうがないねという言い方をします。ですが、今その「しょうがない」という考え方をぜひ破っていってほしいと思っています。

それから、高校までは先生が言うことをきちっと守ること、学校のルールに従うことは大事でした。もちろん大学や社会でもルールに従うのは大事ですけれども、世の中に出てくると、このルールをどんどん変えていくということがあります。例えばひとつの例ですけれども、私は大学の時に競技スキー部をやっていまして、複合競技というのをやっていました。複合競技というのはスキーの中で王者と言われていて、そこの優勝者はスキー界のトップなんですけれども、ある時ファーイーストの小さな島国のオギワラという小さな日本人が、世界選手権で優勝するんですよね。それがオリンピック団体で日本チームが優勝するということになった段階で、欧米の彼らが何を考えるかというと、これはルールが悪い。ルールを変えてしまえ。彼はどうもジャンプが得意だから、ジャンプの点数を少なくするようにルールを変更するんです。その結果、勝てなくなる。同じようなことは、ジャンプ競技なんかでもあります。どうも日本の日の丸飛行隊はよく飛ぶから困る。じゃあルールを変えてしまえ。彼らは体が小さいから、体が小さい人間が大きな板を使うのはけしからんと。われわれ大きい体で重いから、あまり飛ばないから大きな板を使おうということで、よくわけの分からない論理なんですけれどね。体が大きいから、助走路のスピードはたくさん出るんですけれども、そういうルール作りもふくめて、自分に有利な社会を作ってしまう。そういった、さまざまな目的に対してルール変更も含めてどういうふうにアプローチをするか、色々とやり方を考えるわけです。じゃあ私たちはこのまま黙っていていいのでしょうか。そのまま「しょうがないね」という考え方で過ごしていいのかということになるわけです。

先ほど一番最初にありましたように、これから少子化がどんどん進んで借金だらけで、僕たちはどうしようもない時代に生まれてきたんじゃないかと、もしかして皆さんは思われるかもしれませんが。実はこれは、チャンスのひとつかもしれません［スライド5］。絶望的な状況から、実は新しい社会は生まれだすということは、これまでにも何度も日本人は経験しています。ひとつは明治維新、また第二次世界大戦の焼け野原から復興した私たちの親、祖父母の時代も身近な例としてあるように、全く新しい価値観がこれから求められている時代です。それを切り開いていくのは、皆さんであり、それをやるべき立場になっていることを自覚してください。その時大事になるのは、どういう国を作っていくかという気概、どういう生き方をしていくかという、そういう考え方です。

大学という学問の府、東北大学というところに今皆さんが籍を置いたわけですが、今何をここで身に付けなければいけないかということを是非考えてください。「時に及んでまさに努力すべし、青年の志を空しうするなかれ」と、これは21歳の吉田松陰、最近大河ドラマで話題になっていますが、これが東北に旅行した時に言った言葉です。こういった時に大事になるのが教養教育の重要性で、批判的精神、行動的批判を形作るということが、今まさに君たちに求められているところです。

今、皆さんが大学になって何をしたいかと聞くと、必ず研究をしたいと言います。実は、研究をするには必要な能力がありまして［スライド6］、ここに8つの能力を書いています。実はこの中で、本当に専門知識が必要なのはこの課題解決力。つまり、何か課題があった時に、それをどうやって解決するかというところに専門知識が必要で、ほかの能力というのは一般的に教養教育の中で形作られるというふうに考えています。変革期（地殻変動期）の大学教育というふうに今回のテーマがございますが［スライド7］、いわゆる知識修得型から課題探究型へ、課題そのものを探究して解決するプロセスで学ぶ。これこそが研究第一主義を標榜する東北大学の教育のやり方で、その第一歩として皆さんが基礎ゼミ、展開ゼミ等を通して、色々なことを学んでほしいと思っています。米国では60％の人が、生まれた時には存在していない企業に就職するといわれています。また、一生懸命専門知識を身に付けても、実はもう10年後には古臭い知識になっていたりします。その時に本当に役に立つ知識は何かということを考えて、ぜひ身に付けて行ってほしいと思います。リーダーとなった時に魅力のある人間となること、また、常に世界とつながっている意識をぜひ持ってほしいと思います。

大学生活を始めるに当たって、注意として4点ございます［スライド8］。正しいネット利用法を知る。これはすごく大事です。皆さんネットのない社会は分からないかもしれませんが、正しくインターネットを利用し世界とつながっていく方法をきちんと身に付けてください。自分勝手な情報発信は、やけどのもとです。また、大学時代には、ぜひ自分の作品を作る。またわくわくする発見をしてほしい。そして、生きている学問に触れてほしいと思います。私の大学の教養時代も、今でも覚えていますが日本史の邪馬台国論争で有名な、上田正昭先生という方の授業を取りました。私は理科系なんですけれども、今でも覚えていますが、上田先生はたしか畿内説を唱えていたんですけれども、その当時は九州説が主流でしたが、毎週、邪馬台国がなぜ近畿地区になければならなかったかということ滔々と繰り返すんですね。最初は何かよくわかりませんでしたけれども、非常に論証として面白い。非常に生きている学問だなというふうに感じました。このような教養教育を提供するプログラムが全学教育として、そして初年次転換教育プログラム等、東北大学にはそろっています［スライド9］。基礎ゼミ、またキャリア教育、そして国際共修ゼミ等に積極的に参加してほしいと思います。

また、最後の方になりますが、英語と初修語に関して簡単に触れさせていただきます［スライド10］。英語力の強化。これは英語は皆さんは入試科目だと思っているかもしれませんが、それだけではなくて、これから必ず身に付けなければならない素養のひとつです。ぜひ、大学の授業だけでは不足ですので、自学自習に励んでください。特に理科系ですけれども、技術英語の習得に心掛けてください。必ず英語で何か論文等を書くということが、皆さんを待ち受けています。また、ディ

スカッションできる英語力は必要です。これは、私はよく言うんですけれども、学部の時にどのぐらいの英語力を身に付ければいいんですかという話になった時に、ひとりで国際会議の登録をして、飛行機に乗って、発表して、質問も受けて、そしてその会場の誰か外国人の友人と一緒に、お昼ご飯を食べて帰って来いと。それができたら一人前だというふうによく言います。一番最後の、昼飯を食べてくるというのは非常に難しいタスクなんですけれども、これができればもうあなたは学部生として、十分な英語力があるというふうに思います。それから初修語を学ぶことです。もうすでに授業があったかもしれません。この初修語は、自分の意志で初めて学ぶ言葉です。日本語は、皆さん生まれた時に何となく、いつの間にか使いだしていると思います。また英語も何となくABCから勉強し始めて、そして身に付けてきた言葉だと思いますが、初修語に関しては自分が選ぶ、そしてそれをどうやって身に付ければいいかということを学びながら勉強できる言語です。言葉は文化。これは先ほど「しょうがない」というのに対応する単語が英語にないというような話と同じように、考え方と言語というのは密接に結びついています。できればbilingualではなくて、trilingual、multilingualを目指してほしいというふうに思っています。このような教養教育を支えるために［スライド11］、高度教養教育・学生支援機構というのがございます。ここにいろいろな業務センター群がありまして、これらに所属する先生方が、高大接続からキャリア支援まで、一体として皆さん方を支える教育の在り方やカリキュラムを考えて、それを開発しています。ぜひ、これから大学生活を始めるにあたって、いろいろなものにチャレンジしていってほしいと思います。ちょっと長くなりましたが、私の話をこれで終わらせていただきます。ありがとうございました。

（拍手）

司会（野家）：安藤先生、ありがとうございました。地殻変動期ということで、これから激変する世界状況の中で何を学ぶべきかということを非常に具体的に教えていただいたと思います。もし質問があれば、後でパネルディスカッションのところで、皆さんの方から質問を出していただければと思います。

Tohoku University

平成27年度　東北大学　教養教育特別セミナー
地殻変動期の教養・教養教育
ー新入生とともに考えるー

生きる力を身につける
～教養ってなんだろう？～

安藤　晃

高度教養教育・学生支援機構　副機構長
工学部　電気情報物理工学科　教授

東北大学

[スライド 1]

Tohoku University

「生きる力」を育てる

「ゆとり」か「詰め込み」か、ではなく「生きる力」をはぐくむ教育

- 「生きる力」を育てる。（高校新学習指導要領H25～）
  ・・・知・徳・体のバランスのとれた「生きる力」を育む。
  知識や技能の習得とともに思考力・判断力・表現力などの育成を重視
  - ●思考力・判断力・表現力
  - ●知識・技能を活用する能力
  - ●読解力の強化、生涯にわたる学習習慣の修得
  - ●「タフ」な人材の育成
    様々な不安に負けない、チャレンジ心、体力作り

2

[スライド 2]

Tohoku University

道具立て

君の背中には、何を背負っている？

弁慶は
熊手、
薙鎌（ないがま）、
鉄の棒、
木槌、
鋸（のこぎり）、
鉞（まさかり）、
刺股
あと、
大刀、刀も

歌川芳藤　作

君の7つ道具は何？
数学
物理
化学
英語
・・・

道具をもっと増やそう！

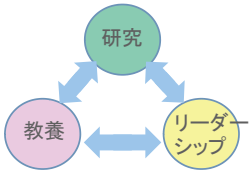
3

[スライド 3]

Tohoku University

何が必要か？

- 勉強できる力
  好奇心、情報収集・発信、考え理解する力、論理的な推敲力、・・・
- 仲間を作る力
  一人で出来ることは限られている
- 生活する力
  お金を稼ぐ、料理する、相手を見つける、危機管理、判断する力、・・・



＋ Risk Takerとなる

~~「しょうがない」のコンセプトで思考を停止し、挑戦をしない~~

4

[スライド 4]

Tohoku University

何を学ぶか？

絶望的な状況から新しい世界が生まれる。

- 明治維新後
- 第二次世界大戦後

→ 全く新しい価値観が求められた。
大事なのは、どう生き抜くか、どういう国を作って行くかという*気概*

大学という学問の府、東北大学という学び場でなにを学ぶか？

「時に及んでまさに努力すべし、青年の志を空しうするなかれ。」
吉田松陰（東北遊日記より、時に21歳）

教養教育の重要性
批判的精神、行動規範を形作る

教養教育とは、決して大学1，2年次の学習だけではない

5

[スライド 5]

Tohoku University

研究力の育成と教養教育

専門研究を進めるために必要な能力

- 研究背景への理解力
- 情報収集能力
- 課題解決力
- 整理・解析力
- プレゼンテーション能力
- コミュニケーション能力
- 文書構成力
- 総合力

← 専門知識が必要なのはここだけ

研究力強化にとっても教養教育は重要

6

[スライド 6]

変革期（地殻変動期）の大学教育

知の継承
（知識収得型）
研究の成果を教師の授業により学ぶ

知の創造
（課題探求型）
課題そのものを探求して解決するプロセスで学ぶ

研究第一主義

基礎ゼミ、展開ゼミ
創造工学研修(工学部)など

- 米国では60%が生まれたときにない企業に就職する。
- 10年後には、いまの専門知識は古い知識になり役立たない。(身につけるべき教養とは？)
- リーダーとなったときに、魅力ある人間となるには？
- 常に世界とつながってる意識を持つ(TGL, SGU)

Tohoku University　7

[スライド 7]

大学生活をはじめるにあたって

- 正しいネット利用法を知る
  - 新しいネット情報社会との関わり方
  - 情報検索：図書館からネットへ
  - 世界へ拡がる窓口　（使い方に注意。特にSNS）
- 自分の作品集を作る
  - 大学時代に何を築くか。
  - 自分にしか出来ないものを作るという強い動機付け
- わくわくする発見
  - 新しい世界に触れる、創造する喜び（研究第一主義）
- 生きている学問にふれる
  - 今まさに議論されている現場に身をおく

Tohoku University　8

[スライド 8]

多様な教養教育プログラム

- 全学教育科目
  - ●基幹科目（人間論、社会論、自然論）
  - ●展開科目（人文科学、社会科学、自然科学、総合科学）
  - ●共通科目（外国語、情報科目、保健体育、留学生向け）
- 初年次転換教育プログラム
  - ●基礎ゼミ（1セメ）、展開ゼミ（2セメ）
  - ●能動的学習への「学びの転換」
- キャリア教育プログラム
  - ●学士・大学院課程を一貫するキャリア教育
  - ●ライフキャリア・デザイン、社会人基礎力養成、リーダーシップ実践プログラムなど
- 国際理解・学際融合教育プログラム
  - ●国際共修ゼミ、多様な留学プログラム（SAPからCOLABS、研究型留学へ）、語学学習環境の整備
  - ●自然科学総合実験、リテラシー教育、倫理教育など

Tohoku University　9

[スライド 9]

英語と初修語

- 英語力の強化
  - 英語は入試科目だけではない。
  - 大学の授業だけでは不十分！自学自習が必須。

- 技術英語の修得
  - Academic Writing (Structure Building)の重要性
  - 日本語での論理構成力、文章力の育成

- Discussionできる英語力
  - 発表はOK。でも質問はわからない。ではダメ。
  - 語学力を補足する多彩な知識。
  - 一緒にお昼を食べてくる。
- 初修語を大事に
  - 自分の意志で、初めての言葉を学ぶ。
  - 言葉は文化。Trilingual, Multilingual を目指せ。

Tohoku University　10

[スライド 10]

高度教養教育・学生支援機構（IEHE）

○高大接続からｷｬﾘｱ支援まで，専門教育とﾘﾝｸした一貫教育
○強力な新カリキュラム・新ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑの開発と実践、各部局との協働連携強化

調査研究開発部門
（教員所属組織）
（3部門９室　1院）
- 高等教育開発部門
  - 入試開発室
  - 高等教育開発室
  - 国際化教育開発室
  - キャリア開発室
- 教育内容開発部門
  - 人間総合科学教育開発室
  - 自然科学教育開発室
  - 言語・文化教育開発室
- 学生支援開発部門
  - 臨床教育開発室
  - 臨床医学開発室
- 教養教育院

⇔

業務センター群
（教育実践組織）
（11センター）
- 教育評価分析ｾﾝﾀｰ
- 大学教育支援ｾﾝﾀｰ
- 入試ｾﾝﾀｰ
- 言語・文化教育ｾﾝﾀｰ
- ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙﾗｰﾆﾝｸﾞｾﾝﾀｰ
- 学際融合教育推進ｾﾝﾀｰ
- 学習支援ｾﾝﾀｰ
- ｷｬﾘｱ支援ｾﾝﾀｰ
- 学生相談・特別支援ｾﾝﾀｰ
- 保健管理ｾﾝﾀｰ
- 課外・ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ活動支援ｾﾝﾀｰ

Tohoku University　11

[スライド 11]

司会（野家）：それでは引き続きまして、「想像する力を育む教養教育」ということで、朝日新聞記者の辻篤子先生にお願いいたします。辻先生は、わざわざこの教養教育特別セミナーのために、東京からお越しいただいていますし、科学ジャーナリストとして非常に先駆的なお仕事をなさっておられる方ですので、とりわけ女子学生の方にはひとつのロールモデルになるような、お仕事をされている方と言っていいと思います。多分最初の方に自己紹介があると思いますので、皆さんも自分たちの目指すべき目標として辻さんのお話を聞いていただければと思います。それでは辻先生、よろしくお願いします。

セミナー　話題提供 2
「想像する力を育む教養教育」

辻　篤子

辻：野家先生、身に余るご紹介どうもありがとうございました。私は朝日新聞の記者の辻と申します［スライド 1］。大変立派な先生方の間に混ざって、一体何者が入っているんだと疑問に思われる方もおられるかと思って、自己紹介を簡単にさせていただきます［スライド 2］。私は朝日新聞で、科学を中心に新聞、あるいはアエラという雑誌等で記事を書く、そういう仕事をして参りました。アメリカにも 3 年ぐらいいて、特派員としてアメリカの科学について報道するというようなこともして参りました。私は記者としての職業柄、東北大学も含めて全国の大学にお邪魔することが多いのですが、記者として大学を訪ね歩いて思ったことがあります。それは、大学というところは、いかに知的な刺激に満ち溢れ、面白い研究がそここにあるところか、ということです。そんなの当たり前といわれそうですが、私は卒業して記者になってから実感として感じたわけですね。あまり真面目な学生ではなかった私としては、もう少し別の 4 年を過ごすこともできたのではないか、と思ったんですけれども、後の祭り。皆さんにはぜひ、この大学という場をとことん活用していただきたいというふうに思っています。これはちょっとおまけで［スライド 3］科学記者になってよかったことのひとつです。自分で星を見つけたわけではないんですけれども、小惑星の命名権をいただいて、8414 番に Atsuko という名前を付けました。この中にもしアツコさんという方や、ご家族にアツコさんという方がいらしたら、星があるよということをぜひ教えてあげていただいて、Atsuko という星を共有したいと思っています。

今日私は、「想像する力」をキーワードとして掲げました［スライド 4］。まずこの想像という言葉ですが、英語で言えば Imagination、辞書を引けば、「頭の中に思い描くこと」、それから「既知の事柄をもとにして推し量ったり、現実にはあり得ないことを頭の中だけで思ったりすること」とあります。「頭の中だけで」のだけはちょっと余計かなという気もしますが、これが想像です。なぜ想像が大事なのか。地殻変動期がテーマになっているからというわけでもないんですが、このふたつの震災を比較した表を見てください［スライド 5］。この阪神・淡路大震災は、今から 20 年前ですから、ほとんどの皆さんが生まれる前です。当時としては、戦後最大の災害というふうに言われていました。このように比較した表は、よくご覧になっていると思いますが、ひとつあまり見かけないことを私は入れています。お気付きでしょうか。曜日が入っているんです。なぜ曜日を入れたかというと、曜日というのは自然のサイクルとは全く関係のない、人間社会のサイクルです。しかしそのサイクルのどこで起きるかによって、災害の様相ががらりと変わることがある。そういう意味で、曜日というのを入れました。この

ふたつの災害はそれぞれ非常に大きな被害が出ましたが、起きた時が逆だったらと考えたことがある方はいらっしゃるでしょうか。私はそれを考えた時にちょっと愕然としました。阪神・淡路大震災は、建物が壊れたり、鉄道や道路の橋脚が壊れたり、あるいは神社、仏閣、市役所、病院などの建物が壊れたりということによる被害が大きかった災害でした。ただ、午前 6 時前だったので、新幹線も走っていませんでした。もし、この右側の金曜日の午後 3 時前という時間に起きていたらどうだったか。新幹線はもう何編成も走っているでしょうし、壊れた道路の上、下には車もたくさん走っていたと思います。逆には自宅で寝ていた神戸大学の学生が大勢下敷きになって亡くなったのですが、彼らは金曜日の午後 3 時前だったら、おそらく大学にいたでしょうから、自宅で亡くなるということはなかったかと思います。起きる時間帯が変わると、被害の様相は、全く違っていたはずだと思います。一方、この東日本大震災も、1 月 17 日火曜日、この日は 16 日が振替休日だったので、連休明けの冬の早朝でしたが、そういう時にこの大地震、津波が来ていたらどうだったでしょう。今回小学校でまとまって避難して助かった、釜石の奇跡と呼ばれるようなこともありましたけれども、早朝だとまとまって避難するという状況はおそらくなかったでしょう。まだ暗い中で、1 人ひとりがどんな判断をして、どう行動しただろうか。そういうことを考えると、ひょっとするともっと大きな被害が出ていたかもしれない、ということも思います。つまり、災害が起きた時間が逆だったら、それぞれもっと大きな災害になったかもしれないということです。ですので、こういう災害を考える時には、起きたことだけ、目に見えることだけではなくて、見えないことまで見ないといけない、想像しなければいけないということだと思います。御嶽山もそうですね。去年の噴火は大災害になりましたけれども、これも秋の紅葉シーズンの週末、快晴の、しかもお昼ちょっと前という時間に起きました。これがもし、数時間前後にずれただけで、あるいは数日前や数日後、平日だったり、あるいは真冬だったりすれば、おそらくあれだけの被害は出なかったのではないでしょうか。そういう意味では本当に最悪のタイミングに噴火が起きたということが言えるかと思います。

このように、想像力を働かせることが非常に大事ということで［スライド 7］、これは私が担当した朝日新聞の社説ですけれども、結びの言葉で「想像力をめぐらせたい」といっています。次の災害が全く同じ形で起こることはまずない。おそらく違う形で起きるだろうということで、どんな場合に、どんなふうに起きたらどうなるか、自分はどう行動するのか、そういった想像力をふだんから働かせておくことが鍵であるということを書いたものです。

ここまで、想像力を災害について絡んでお話してきたわけですけれども、想像する力が必要なのはむろん災害に限らず、私たちの毎日の暮らし、それから周りで起きていること、そうした森羅万象について、時間、空間を越えてどんなつながりがあるんだろうかということに想像を巡らせる、それが求められていると思います。そういった思いをめぐらすところから始まって、人間らしい共感を持ち、その先自分に何ができるかということを考える、そして実行していく、ということにつながっていくんだろうというふうに思います。そこで［スライド 8］、皆さんが想像力を巡らせることが求められている世界ですが、昨日までの世界、これは皆さんが突破なさって来た東北大学の入試に象徴される世界で、必ず正解がある。ひと

つの正解がある。その問題を決められた時間内に一人で、インターネット、辞書などの助けもなく、答えを出す。皆さんはそれを立派に突破されてきたわけですけれども、これから皆さんを待っている実社会は、これとは全く違う世界で、問題も、先ほどのお話にもありましたように、自分で見つけなければいけない。必ずしも与えられるわけではない。そして、必ずしも正解があるわけでもない。答えがひとつとも限らない。それを、時間はいくらかかってもいい、徹夜してもいい、また人と協力してもいい、むしろ協力した方がよい、ということで解く。自分とは専門や個性が違う、時には文化も違う人たちと協力して、使えるものは何でも使って、それでも答えを出さなければいけない。そういう難問が、これからの実社会には待っています。大学生活はむろん、昨日までの答えのある世界の連続という部分もありますけれども、皆さんが社会に出る、あるいは研究生活に入る。そういった時に待っている世界の準備を始める。それが、今日からの大学生活なんだというふうに思います。こういう新しい世界で必要なもの、鍵を握るのが、想像力、思いを巡らせる力だというふうに思います。では、この想像力を育むには何が必要なのでしょう［スライド 9］。想像力、あるいは思いを巡らすというのは、人間の全人的な活動ですので、これをやればいいという話ではない。見えないことを見るんですから、皆さんが持っているあらゆる知識、それからこれまでの経験や感性、いわば一人ひとりの存在をかけて、思いを巡らさなければなりません。そういった中で、これから身に付けるべき重要な手掛かりが教養だというふうに思います。皆さんのこれまでの経験でも、例えば何かを知った、ある体験をしたことで、世界の見え方が変わってきた、どんな小さなことでもちょっと世界が違って見えてきた、ということがあるのではないでしょうか。アンテナを張り巡らせるというイメージかなと思います。アンテナがあれば、色々な出来事、身のまわりで起きているさまざまなことが引っかかってきて、それがさらに大きく膨らんで、皆さんの世界を作っていく、頭の中の世界を作っていくということだと思います。

ここで、新渡戸稲造という盛岡生まれの、東北から出て世界に羽ばたいた日本を代表する教養人、知識人、そして教育者でもあった人物の言葉を紹介したいと思います。2004 年まで 5,000 円札の顔でもあったので、皆さんの子供の頃のお年玉の顔だったかもしれません。新渡戸稲造の言った教育の目的という中に、大切なのは「something of everything」だという言葉があります。全てのことについて何らかのことを知る。彼自身は教養という言葉は使っていませんが、全人教育が大事だということを強調していて、中身を見れば教養教育だなという気がします。この言葉をひっくり返すと、「everything of something」。何か一つのことを徹底的に知る。これは専門教育だと思います。彼はダジャレで、センモンセンスよりコンモンセンスという言い方もしていますが、コンモンセンス、common sense ですね、その重要性を説いていました。おそらく「everything of something」の方は、東北大学で学んでいたら、否が応でもというか、必然的に身に付いていくと思いますが、「something of everything」の方は、ひとりひとりの意識や目的意識が重要になってくるのかなという気がします。新渡戸稲造は、センモンセンスよりコンモンセンスと言ったんですが、私は、センモンセンスもコンモンセンスもと言いたい。つまり、これらが縦糸と横糸のようになって、これからの皆さんを形作っていくのだと思っています。新渡戸稲造のことをもう少し紹

介すると［スライド 10］、まず札幌農学校へ、そして当時唯一の帝国大学だった東京大学に進み、英文学を志した。そこで、学ぶ目的は何か、と問われた時に、先ほどの吉田松陰と同じ年頃だったかと思いますが、「我、太平洋の架け橋とならん」という有名な言葉で答えたわけです。しかし、そういう彼にとって東京大学の教育はあまり面白くないということで、アメリカに渡りました。アメリカで過ごすうち、日本文化に関する「武士道」という本を英語で出版し、これが世界的に有名になりました。1920 年に、歴史で学ばれたと思いますが、第一次世界大戦の教訓を生かして国際連盟、つまり今の国際連合の前身ができたときに、その初代次長に選ばれます。そして 6 年ほど、次長として世界を飛び回って活躍しました。今風にいうなら、真の国際人、真のグローバル人材だった、と思います。こういった先輩にならって、皆さんにも大いに雄飛していただきたい、と思います。

私は最初に、記者の目で大学を見たら、違ったふうに見えたと申しました。皆さんには、私のように、外に出てから、なるほど、大学ってこういうところだったんだ、もっといろいろなことを見ておけばよかったな、という後悔はしてもらいたくないので、大学というところを、色々な視点で見てほしい。そのための視座を与えるものもおそらく教養教育だというふうに思います。それによって、大学教育、大学という場所が、皆さんにとってより一層意味のある場所になるのではないかと思っています。そして［スライド 11］、思いを巡らせた先に、同じソウゾウという言葉ですけれども、創造 Creation、何か新しいものを生み出すということができるものだと思っています。というわけで、皆さんのこれからの活躍を大いに期待して、私からの話題提供とさせていただきます。どうも、ご清聴ありがとうございました。

（拍手）

司会（野家）：辻先生、大変示唆に富むお話をありがとうございました。東日本大震災から、新渡戸稲造まで。イマジネーションというキーワードを軸にして、これから皆さんが、どんなことをどういうふうに学んだらいいかということについて、たくさんのヒントをいただいたと思います。多分、辻先生には色々なことを聞きたいという皆さんがいらっしゃると思いますが、あとでパネルディスカッションの時間を取っておりますので、その時に質問をお願いできればと思います。

想像する力を育む教養教育

朝日新聞
辻　篤子

1

[スライド 1]

自己紹介

1976年　教養学科科学史科学哲学分科卒業
79年　朝日新聞社入社、甲府支局員
81年　東京本社科学部
84年　科学朝日編集部
86年　科学部
88年　アエラ発行室（～95年）
89年　MITナイト科学ジャーナリズムフェロー（～90年）
95年　ぱそ編集長（～96年）
97年　アメリカ総局（～00年）
2000年　科学部（～02年）
04年　オックスフォード大学ロイターフェロー
04年　論説委員（～13年1月）
10年　書評委員（～11年）
13年　オピニオン編集部

2

[スライド 2]

2001年3月21日

3

[スライド 3]

想像とは

- Imagination
- 頭の中に思い描くこと
- 既知の事柄をもとにして推し量ったり、
  現実にはあり得ないことを頭の中だけで思ったりすること

4

[スライド 4]

	阪神・淡路大震災	東日本大震災
発生	1995年1月17日（火） 午前5時46分	2011年3月11日（金） 午後2時46分
地震規模	M7．3	M9．0
最大震度	震度7	震度7
死者・行方不明者	6405人	18475人 （2015年3月11日現在）
被害額	9．6兆円 （国土庁推計）	16．9兆円 （内閣府推計）
津波		最大遡上高　40．1m

5

[スライド 5]

想像力を働かせるということ

- 阪神・淡路大震災と東日本大震災
  起きた日時が逆だったら？
- 御嶽山の噴火　（死者56人、不明6人）
  2014年9月27日（土）　快晴
  午前11時52分
  もし、この日、この時間でなかったら？
- 目に見えること、起きたことだけでなく
  見えないことを見る

6

[スライド 6]

[スライド 7]

皆さんを待つ世界

昨日まで	今日から
・与えられ、かつ、 ・必ず正解のある問題を ・決められた時間内に ・１人で ・何も使わずに ・答えを出す	・自分で見つけ、 ・必ずしも正解があるとは限らない問題を ・時間はいくらでも使って ・協力しながら ・使えるものはすべて使って ・答えを出す ↓ 鍵を握る想像力

8

[スライド 8]

想像力を育むには

- 見えないことを見るためには、あらゆる知識、経験、感性を総動員する必要
- 重要な手がかりとしての教養
- 教養が、経験を深め、意味を与える

- 新渡戸稲造が説いた教育の目的
  Something of everything （教養教育）
  Everything of something に閉じこもるな
  センモンセンスよりコンモンセンス

9

[スライド 9]

新渡戸稲造（1862～1933）

- 盛岡出身
- 札幌農学校（後に東北帝大農学校、北海道帝大）2期生
  「少年よ、大志を抱け」のクラーク博士はすでに退職
- 東大で英文学を学ぶ目的として
  「我、太平洋の**架け橋とならん**」
- **1884年、米ジョンズ・ホプキンス大学留学**
- **1900年、「武士道」を英語で出版**
  （日本語訳の出版は08年）
- **第一高等学校校長、東京女子大初代学長など歴任**
- **1920年　創設された国際連盟の次長就任**

10

[スライド 10]

想像から創造へ

11

[スライド 11]

司会（野家）：それでは最後になりますが、教養教育院の工藤昭彦先生に、「私が取組んだ教養教育」というタイトルで、お話をいただきます。工藤先生は農業経済学の専門家で、長く農学部長を務めておられ、現在は教養教育院で私の同僚ということになりますが、よろしくお願いいたします。

セミナー　話題提供３「私が取組んだ教養教育」

工藤 昭彦

工藤：ご紹介いただきました工藤です［スライド1］。農学部を定年になって、今年で６年目です。教養教育院で５年間、教養教育らしきものに取り組んできました。どんなことをやってきたのかというお話をしてみたいと思います。最初に申し上げますけれども、教養とか教養教育って５年やってもまだわかりません。あとで皆さんから、こういうこともやってほしい、これは教養教育なの、などご意見をいただければと思います。

最初は、私が考える教養についてです［スライド2］。教養は三層構造ではないか。知る教養、使う教養、見抜く教養。この三点セットだろうと考えてきました。知識力、応用力、それから洞察力ですね。何の役に立つかと言うと、「自立の思想的拠点」、これは吉本隆明という我々の学生の頃の詩人であり、思想家でもあった人が書いた本のタイトルです。中身はよく分かりませんでした。ただ、何となくこのキーワードだけは頭の片隅に残っていて、ふと思い出しました。安易に世間に流されるなということかな。彼は３年ぐらい前に亡くなりましたが、最後までそういう姿勢を貫いていました。人間の力、人間力を磨け、そういう人間力をベースにして色々なものを発信しろ、人と迎合したり、世の中と迎合したり、そういうことをするんじゃないよと。

教養の三層構造は、三段階ではない［スライド3］。知る教養、これは基盤ですから一定レベルの知識、あるいは技術を習得する。皆さんも受験勉強でやってきたと思います。使う教養は、転換教養。知識力の応用力への転換、応用力の進化による知識力の備蓄。使えば使うほど色々なことを知りたくなる。色々なことを知るほどに、使い方も上手になる。そういう相互交渉。そういう技を若いうちに習得してほしいと思います。最後は［スライド4］見抜く教養。これは実践教養ですね。本質を見抜く技、これは習得できない。見抜く技を鍛錬する。私なんかも未だに鍛錬している。見抜く力というのは難しい。でも、地殻変動期ですから、これからどうなるか見抜いていかなければならない。

どうすればいいか。私が考えるのは相対化。対象化、客観化と言ってもいいかも知れません。絶対化し、それに溺れることはまずい。相対化して、見たり考えたりすることが必要だろう。それと演繹的手法。一つの事象から他の事象を論理的に描き出していく。そういう力ですね。その上で本質へいかに接近するか。こういう鍛錬を重ねることで見抜く教養が身についてくるのではないか。

辺境の視点と最後に書いておきました。私は農学部で農業経済学をやっていました。いまもアジアだとかアフリカの農業、農村について調べたりしています。そうすると、メジャーな世界からは見えないものが、農業、農村といったマイナーな世界からは、よく見えることがある。例えば仙台でも震災でまるっきりいままでの姿形が変わった。ゼロになった。白いキャンバスになった。そういう地点に立って、これからのことを考えると、よく見えることもある。こうした辺境の視点というのはメジャーな世界の問題を相対化、可視化するのに有効ではないか。メジャーな世界にはまっていると見えづらいことがたくさんある。私は最

先端の研究をやったことがない。工学部の学生が多いと思いますが、最先端の世界に挑戦しても、同じことが言えるかもしれない。

どういう講義をやってきたのか［スライド 5］。いくつかキーワードを並べています。左側に「覚える授業」、「説明型授業」、「現状認識力」、「単線型対応力」、「試験による点数評価」。こういったことも大事だが、私が重視したいと思ったのは右側に書いてある「考える授業」、「参加型授業」、「歴史的思考力」、「複線型適応力」、「レポート等による総合評価」などです。覚える授業から、一歩進んで考える授業をやってみたい。説明はしますが、聞いている人にも参加してほしい。ただ、参加型授業は受講生が多いと難しい。現状を認識するだけではなしに、歴史的な思考力を磨いて欲しい。単線型対応力。いいね、悪いね、これしよう、あれしようということではなくて、複線型適応力。世の中の事象は、単純に起きているというケースは非常に少ない。それを見抜くには複線的思考力。レポートによる総合評価。試験をやらないと受講生が増える。ところが、レポートの回数が多くなったせいか最近は受講生が減っています。こんなことを試行錯誤的にやってきました。おもしろいことがいっぱいありましたね。

それで、つぎは基礎ゼミ［スライド 6］、東北大学の特徴的な授業科目である基礎ゼミですね。これは大変面白い。私はふたつの基礎ゼミを担当しています。留意点はさっきの繰り返しになりますが、書いてある通りです。どういうやり方をするかというと［スライド 7］、大体こういうテーマで、こういうことをやるぞというスケジュール表を作る。担当班－ 20 名前後ですから－ 4 人 1 班で編成をして、役割分担を決める。誰が報告をするのか、誰が討論点を提示するのか、誰がゼミの記録をするのか。こういう役割分担を決めて、討論結果を記録に残す。報告、討論点の提示はパワーポイントで、と皆さんにお願いしたら、ほとんどの人ができる。5 年前にこれを始めた時に、いまの学生は中学校からパワポをやっているという。なるほど我々の頃とは時代は違う。改めてそう思いました。

［スライド 8］ゼミテーマの概要説明、今日と同じ 15 分程度でやってもらう。討論点を班員が検討して絞り込む。これがうまくできると討論は活性化する。司会進行は最初私がちょっとだけやりますが、すぐ学生にバトンタッチする。こういうことは私以上に上手な学生さんが多い。こんな感じで［スライド 9］役割分担を決める。

来週の月曜日から基礎ゼミが始まるので、皆さんにお願いすることになると思います。これは 4 班ごとの写真です［スライド 10］。互いに学部も違うので、最初は顔見知りの関係ではなかった。基礎ゼミをやっている間に、情報交流や勉強会をやった。最後に報告集を出す。その報告集に写真を載せた。最後の方になるとだいぶ打ち解けた感じになる。これは［スライド 11］直売所を視察研修した時のスナップ写真です。参加した学生さんが勝手に撮って、先生これも載せましょうよと言われて載せた。なかなかいい写真です。現地視察をやった場合は、必ず感想のレポートを書いて現場にお返しします。これは JA 仙台のかなり大きな直売所です。昨年のレポートは、組合長が一生懸命読んでくれたという。

大講義室の授業［スライド 12］。これはなかなか難しい。大講義室でやっている授業は、基幹科目の資本主義と農業とか、あとふたつぐらいある。留意点は記載の通りです。［スライド 13］私が書いた本をテキストにしてやっています。世界恐慌、ファシズム体制、農業問題というタイトルからして、戦後の話ではない。戦間期の話。こうい

う授業をやってこなかった学生さんにとっては、書いてあることが全くわからない。ですから分かりやすいチャートにまとめて説明します［スライド 14］。それでもなかなか難しい。それでビデオも見せる［スライド 15］。ビデオを見ると、実感が湧いたというレポートが返ってきます。全部当時の映像。こういう映像が本当にあるのという質問を受けたこともありました。

それとこれは［スライド 16］、手書きのレポート。地方改良運動、挙国一致内閣、石原莞爾、農山漁村経済更生運動などなど。今年はこれに国会で話題になった八紘一宇を加えようと思っています。こういうキーワードを自分で書いてもらうことにしています。

現代との対比で［スライド 17］ということで、こんな記事も紹介しています。いま、国の借金がすごく多い。これは朝日新聞に載った岡崎さんという人が書いた記事ですけれども、公債「楽観論」は 80 年前の轍。戦時体制下だっていまよりは少なかった。楽観的に考えて、戦争に突入し、そのツケを戦後支払った。いま起きていることと対比しながら考えてみたらどうだろう。この他にも新聞記事は活用させていただいています。

ビデオを見た感想文を書いてもらう［スライド 18］。中身は今日紹介できませんが、記載したようなキーワードで小見出しを付けて、皆さんの書いた内容を紹介しています。参加型授業を大講義室でやるのは難しいですが、こういうことをやると同じ講義を聞いて、こんなことを考えたり書いたりする人がいるということで、「驚いた」、「すごく勉強になった」という意見がたくさん寄せられます。ですから、まとめるのは大変ですが、TA に協力してもらいながら、こういうことを継続してやってきた。

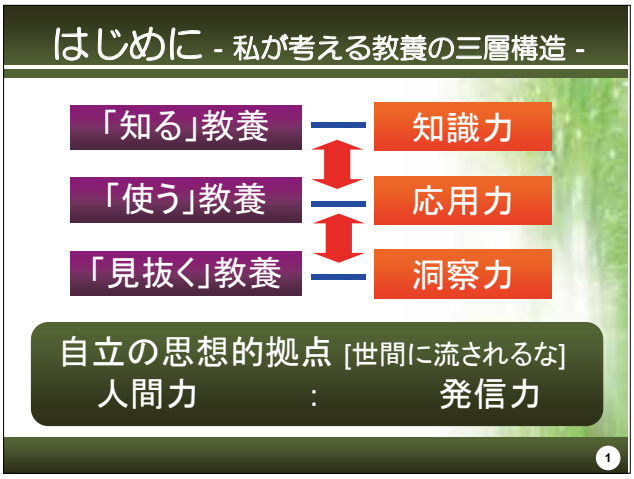
これは［スライド 19］いまシャッター通りが増えている。戦前の農山漁村経済更生運動の経験を踏まえながら、シャッター通りをどうすればいいのというレポートを書いてもらった。「資本主義に馴染まないものをむしろ大切に」、「自立を封じ込める暴力的構造の解除」といった多様な内容で書いてくれた。「昔は権力が跋扈していたけれども、いまは地方の自立を封じ込める金の力が跋扈している。やっぱりそういう問題を考えなくてはならない。」こんなレポートに接すると、どうして 1 年生でこういうことを書けるんだろうと思う時がしばしばあります。

こんな講義をやりながら、最初に述べた三層構造を［スライド 20］、どこまで学んでいただけたのか。あまり自信がありませんが、多分あと 2 年くらいやれると思いますので、少し改良、改善を加えながら教養教育に挑戦してみたいと思っています。以上です。ありがとうございました。

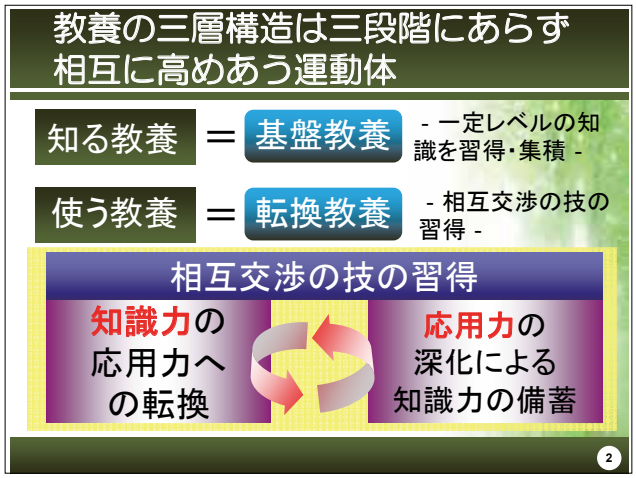
（拍手）

司会（野家）：工藤先生どうもありがとうございました。吉本隆明の話から始まって、具体的な基礎ゼミの実践事例等を紹介していただきましたので、新入生の皆さんにはこれから始まる授業の予告編にもなっていたかと思います。これも質問については、またあとでパネルディスカッションの時にお願いしたいと思います。それでは、ただいまから 10 分間、トイレのための休憩を取ります。その間にちょっと舞台の上を設えまして、改めてパネルディスカッションの時間を 3 時半頃まで取りたいと思いますので、よろしくお願いします。それでは、休憩に入ります。

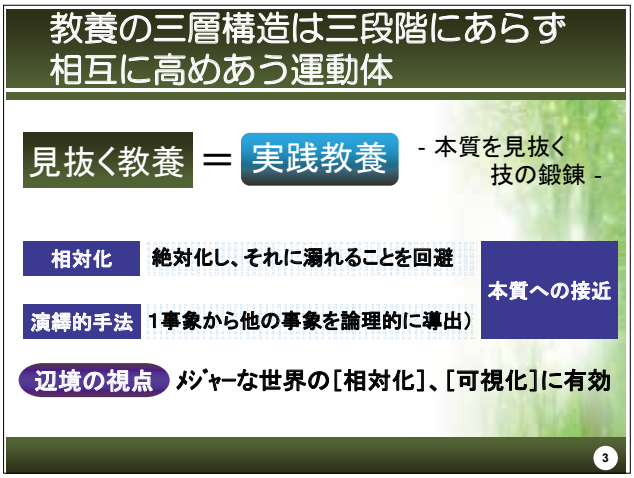
[スライド 1]



[スライド 2]

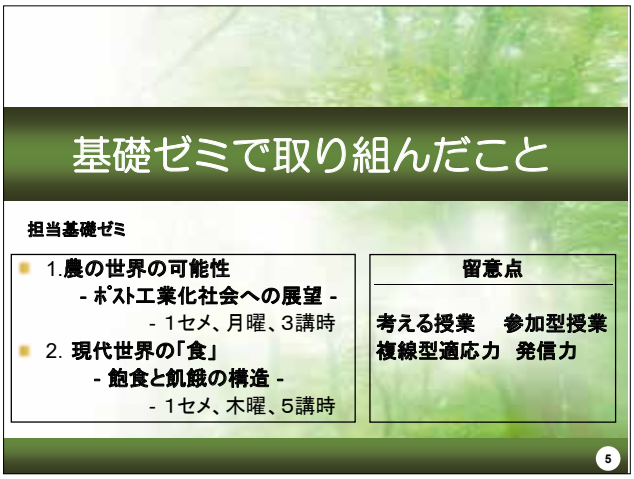


[スライド 3]



[スライド 4]

[スライド 5]



[スライド 6]

基礎ゼミの進め方Ⅰ

オリエンテーション

- **年間スケジュール・関連資料の配布**
- **ゼミ担当班の編成**[5名1班、4班編成]
- **担当班の役割分担**[概要報告者1名、討論点提示者3名、ゼミ記録係1名]
- **討論**[担当班が提示した討論点について、参加者全員で質疑応答]
- **報告、討論点の提示はパワーポイントで**[パソコン持参、不可能な場合はこちらで準備。討論点は資料配布もOK。]

6

[スライド 7]

基礎ゼミの進め方Ⅱ

概要報告　ゼミテーマの概要説明　15分

論点開示　班員各自の討論点の紹介　1人5分程度

相互討論
- 参加者全員による質疑応答（60分程度）
- 単純な質問には概要説明者、論点開示者が説明
- 重要な論点については参加者全員で討論
- 議題が煮詰まらない論点は今後の検討課題に。

司会進行
- 教師が進行役
- 必要に応じて班員にバトンタッチ
- 記録係を決め、毎回①ゼミのテーマ ②概要報告（資料） ③論点（資料） ④主な討論内容を盛り込んだ基礎ゼミ記録集を作成する。

7

[スライド 8]

[基礎ゼミ] 現代世界の「食」 - 飽食と飢餓の構造 -

班	担当		氏名	フリガナ	学籍番号	学部
	第1回目発表	第2回目発表				
	第3回（5/8）穀物価格	第7回（6/5）アフリカ開発	USB持参			
1	討論点提示	概要報告者	中山 ○○	ナカヤマ ○○	B4JB○○○○	法学部
	ゼミ記録	討論点提示	梅津 ○○	ウメツ ○○	B4EB○○○○	経済学部
	討論点提示	ゼミ記録	鴨居 ○○	カモイ ○○	B4SB○○○○	理学部
	ゼミ記録	討論点提示	岩淵 ○○	イワブチ ○○	B4TB○○○○	工学部
	討論点提示	ゼミ記録	坂上 ○○	サカウエ ○○	B4AB○○○○	農学部
	概要報告者	討論点提示	藤井 ○○	フジイ ○○	B4AB○○○○	農学部
	第5回（5/22）食料自給率	第9回（6/19）飽食と飢餓	USB持参			
2	討論点提示	ゼミ記録	荒居 ○○	アライ ○○	B4JB○○○○	法学部
	討論点提示	討論点提示	木内 ○○	キナイ ○○	B4EB○○○○	経済学部
	討論点提示	概要報告者	二見 ○○	フタミ ○○	B4SB○○○○	理学部
	ゼミ記録係	討論点提示	川沼 ○○	カワヌマ ○○	B4AB○○○○	農学部
	ゼミ記録係	討論点提示	高橋 ○○	タカハシ ○○	B4AB○○○○	農学部
	討論点提示	ゼミ記録	和田 ○○	ワダ ○○	B4AB○○○○	農学部

↓ 以下3・4班

8

[スライド 9]

[基礎ゼミ] 現代世界の「食」 - 飽食と飢餓の構造 -

基礎ゼミ報告集

現代世界の「食」
- 飽食と飢餓の構造 -

9

[スライド 10]

[基礎ゼミ] 現代世界の「食」 - 飽食と飢餓の構造 -

視察研修「農産物直売所」

10

[スライド 11]

大講義室授業で取り組んだこと

担当授業

基幹科目：経済と社会
- 資本主義と農業

総合科目：時代の文脈から見た食と農
展開科目：環境と経済 社会の調和

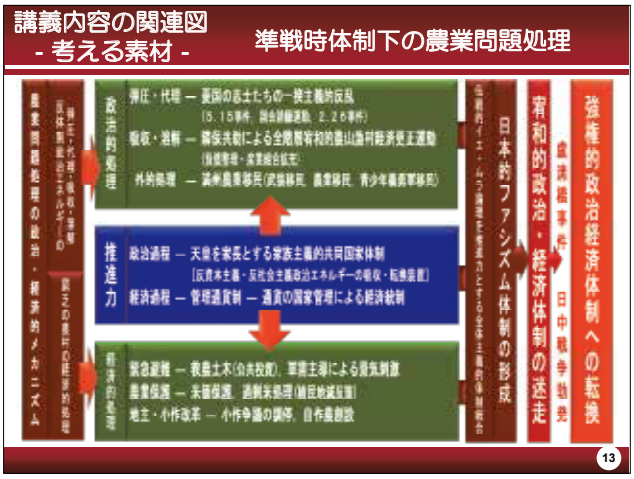
留意点

考える授業　参加型授業
複線型適応力　発信力

11

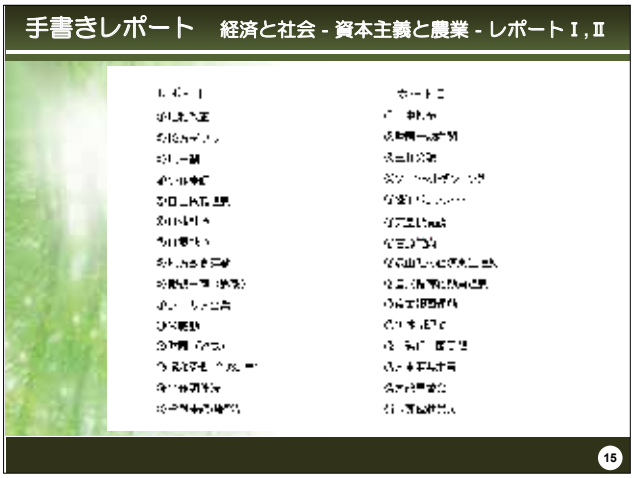
[スライド 12]

[スライド 13]



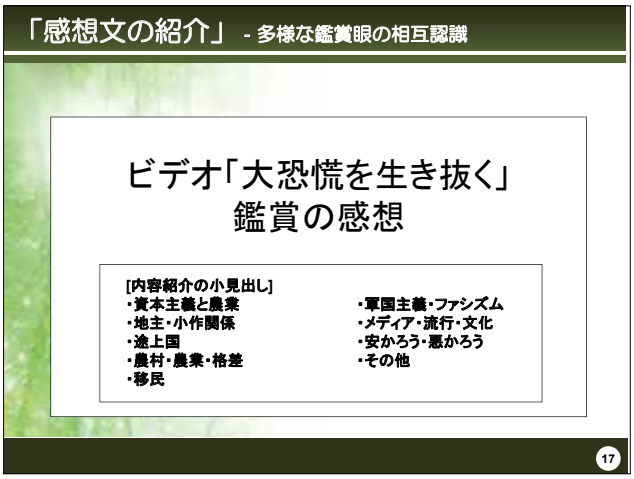
[スライド 14]

[スライド 15]

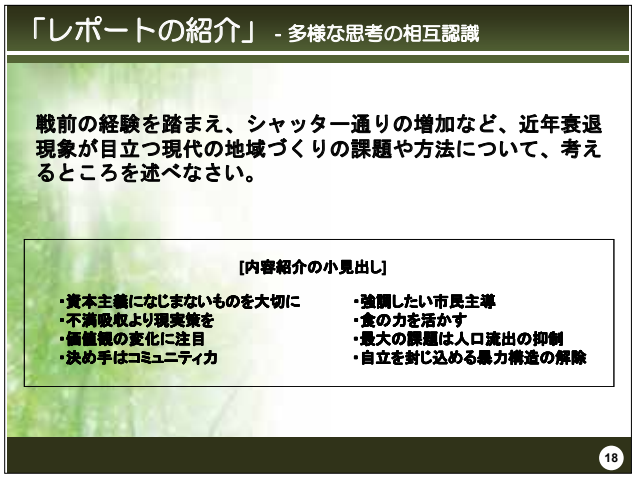


[スライド 16]

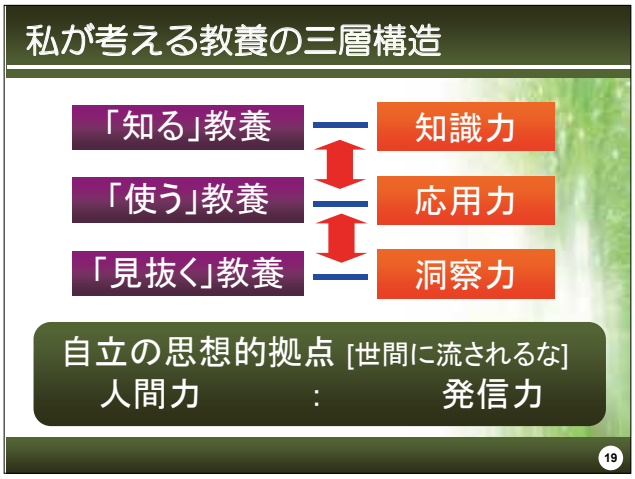
[スライド 17]



[スライド 18]



[スライド 19]



[スライド 20]

パネルディスカッション「地殻変動期の教養・教養教育―新入生とともに考える―」

司会（野家）：お待たせしました。それでは、教養教育特別セミナーの後半の部、パネルディスカッションに入りたいと思います。壇上には、先ほどお話いただいた花輪先生、花輪先生は海洋物理学のご専門です。それから辻先生、科学ジャーナリストの方です。それから安藤先生、プラズマ理工学が専門です。それから工藤先生、農業経済学がご専門です。それと、そちらにおふたり森田先生と吉野先生には教養教育院の総長特命教授という形で加わっていただきます。森田先生は数学、ならびに数学教育のご専門。それから吉野先生は建築学ですが、建築環境工学という分野がご専門です。それから、客席の方にですが、この4月から新たに総長特命教授として、教養教育院に加わっていただきました山口先生、医工学の専門家です。それから座小田先生､哲学の専門家です。これから皆さん、色々な質問が出ると思うので、壇上のパネリストだけでは足りない時には、山口先生、座小田先生にもお手伝いをいただくということにしたいと思います。今日、安藤先生、辻先生、それから工藤先生3人の話題提供ということで、教養および教養教育についてお話をいただきましたが、もちろんそのお話の内容について、もう少しここを詳しく聞きたいとか、あるいは自分の持っていた教養のイメージとは違っているので、どうなっているのとかですね、どんなことでも結構ですし､あるいは今日のお話とは無関係に、ぜひこんなことを聞いてみたいということでも構いませんので、3時半ぐらいまで、40分ほど時間がありますので、特に新入生の皆さんからの積極的な発言をお願いしたいと思います。それでは、どなたからでも結構ですので、手を挙げて自分の所属学部とお名前をまず聞かせてください。その上で、壇上のどの先生に対する質問かを言っていただけるとありがたいと思います。特定しがたいという場合には、こちらの方でどなたか先生を選んでお答えいただくことにしたいと思います。それでは、2階席の方もそちらにもマイクを回しますので、どうぞ遠慮なく手を挙げてください。どなたかいらっしゃいませんか。はい。

学生A：こんにちは。農学部1年のAです。教養教育に関して質問があります。高校時代に私たちは文理選択をして大学に進学するわけですが、文理選択は教養の幅を狭めてしまうと思うのですが、皆さんはどうお考えですか。

司会（野家）：はい、ありがとうございます。高校の段階で文理選択を皆さんしてきたわけですけれども、それはむしろ教養という観点からはそれに反するのではないかと。これは大変いい質問だと思いますが、どうしましょう。どなたかこれに対するお答え。じゃあ花輪先生から。

花輪：私の答えは、やはり文理選択はあまりよろしくはないのではないかと。できれば、そういうことをしないような教育が望ましいのではないかと。とは言いましても、大学もすごい責任があって、文系、理系に対して各々文系であれば社会2科目、理系であれば理科2科目受験しなさいと。そういうことを助長するようなこともやっているのも事実です。そこは今後の我々、東北大学はいつからとは言えませんけれども、乗り越えていくべきところかなというふうに思います。個人的には文理選択というのはあまり望ましくないというふうに考えます。

司会（野家）：それから、辻さんは東京大学の教養学部で、科学史・科学哲学といういわば文系と理系のハイブリッドのような学科を出られているので、何かその辺の体験をもとにしてアドバイス

があればお願いします。

辻：私も、文理選択を早くするということは、非常に問題が大きいし、その点では大学の責任もあるのではないかと思います。私が大学に入ったのはもうずいぶん前のことですが、国立大学は理系でも、入試に社会２科目がありました。やはり大学入試にもっと色々な科目があれば、高校生も勉強するのではないかと思います。それと、私自身、高校３年の文理選択の際に迷い、結局、将来の選択の幅を狭めないために理系を選んだのですが、そんなときに教養学科という文理にまたがったような学科があることを知り、そういう選択肢もあるなと心強く思った経験があります。できるだけいろいろなことを知ってから進路を決めた方がいいと思いますが、文理選択は進路を狭めることにもなります。アメリカの大学ではリベラルアーツ教育が重視されていて、全てを勉強してから、例えばメディカルスクールのような専門に進むというような仕組みになっています。日本でもリベラルアーツ教育の重要性がいわれたりしていますが、そのあたりはこれからの課題かなというふうにも思っています。

司会（野家）：ありがとうございました。他に何かこの、文理選択について。じゃあ森田先生。

森田：私は数学を教えていますが、数学に関しては文理選択がかなり問題を起こしています。それは何かというと、経済では、学問としてすごく数学を使います。それから、文系の中で社会学とか心理学なんかも統計をかなり使います。そういったことに現在の文理選択が合っていないということがあります。つまり現在文系に行かれている方の中には、数学が嫌いだから文系を選んだという人がかなり多い。でも、文系に行っても、大学に入ってからも社会に出てからも、数学的能力が求められることがある。そういう点で矛盾があると、考えています。

司会（野家）：ありがとうございました。それでは、他に質問ある方、どなたからでも結構ですが、手を挙げてください。どんなことでも結構ですので、遠慮なく。皆さん、大学に入ったばかりで、まだちょっと右も左も分からない状態かもしれませんが、これから学んでいくべきこととか、あるいは課外活動のことでも構いませんので、何か聞きたいことがあったらどうぞ。２階席の方でも構いません。手を挙げてください。はい。

学生Ｂ：失礼します。工学部のＢと申します。今回のセミナーの題名について質問です。「地殻変動期」というのが最初に目に入るワードなんですけれども、なぜこのような題名にしたのかをお伺いしたいのですが。「地殻変動」という言葉で、僕も含め、一瞬地震とかそういうことを話すのかなと思ってしまった部分があって。このセミナーを多くの新入生に聞いてほしいと考えるならば、その題名の意図を、先ほどの話題提供でも色々お話があって、何となくはわかるんですけれども、そのあたりを詳しくお話をいただければと思います。お願いします。

司会（野家）：ありがとうございました。これも当然の質問というか、いい質問だと思いますが、どうしましょう。工藤先生辺りからお答えいただきましょうか。

工藤：地震も、たくさん起きるし、噴火も起きる。地殻変動期であることは間違いないだろう。ただ、社会も相当大きく動いている。従って、地球全体が自然界も、世界の仕組みも大きく動いているので、まとめて地殻変動期ということでいいのではないか。文系の本でも、地殻変動という言葉はいま普通に使われています。皆さんに誤解を与えたかもしれませんが、我々としてはそれでいいだろうということで、決めました。以上です。

司会（野家）：先ほど安藤先生のお話の中ではこれからの世界の激動期ということを地殻変動に重ね合わせて、お話いただいたと思いますが、何かもしコメントがございましたら。

安藤：先ほど私の話の中で触れさせていただきましたけれども、世の中が大きく変わるというのは、今に始まったことではなくて常にそういう立場に置かれます。私たちが実際に大学の時にも、同じように学生紛争があって、それからそれが落ち着いてその次にこれからどうなるんだという、そういった時代でした。今はまた、違う意味で大きく世の中が動こうとしているのは、実際に感じられていると思います。日々いろいろなニュースが飛び込んでくる中で、今までは自分の生活の中の家庭とか、それから高校の間を通うところで起こってくる出来事だけを考えていればよかったかもしれませんが、これからは色々な話題やニュースが自分にどう関わってくるのかということを、ぜひ意識して聞いていてほしいなと思います。例えば皆さんスマホを持っておられると思いますが、私たちが大学の時にはそんなものはありませんでした。電話ぐらいですね。それで、ポケベルもありませんでした。計算機もプログラミング電卓というのがやっと出始めたぐらいの時です。そういった時に、世の中どう変わるかなんて予想しろったってなかなか無理で。その後バブルがあって、このまま日本は世界一の大きな大国になるに違いないと思っていた時期もあります。でも、どんどん世の中変革していった中で、じゃあ自分がその時々にどう生きていけばいいかというのを、やはり常に考えておいてほしいなと。そのいわゆる行動規範になるのが教養で、それを今身に付けなければいけないよという話をさせていただきました。地殻変動期。常に地殻変動しているんですが、そういうことで受け止めていただければなと思います。

司会（野家）：ありがとうございました。今のお答えでいいでしょうか。

学生 B：はい、ありがとうございました。

司会（野家）：それでは他に質問がありましたら、どうぞ手を挙げてください。2 階の前の席の方、どうぞ。

学生 C：高いところから失礼します。工学部の C といいます。出身校が U 高校というむさくるしい男子校から参りました。男子校と女子校という区分が多くの高校であると思うんですが、それは何か広い意味でコミュニケーション能力を欠如させてしまうのではないかと、個人的に思っているんですが、いかが思われますでしょうか。ご意見を聞かせてください。

司会（野家）：はい、ありがとうございました。男女別学というのはコミュニケーション能力を欠如させてしまうんではないかと。私は仙台一高の出身で、僕が出たのは男子校だったのですが、今では男女共学になっていて、それでコミュニケーション能力が果たして発達したかどうかは知りませんけれども。辻さんはその辺のこと、男女別学か共学かという。

辻：そうですね、多分男子校だからコミュニケーション能力が欠如するということはないんじゃないかと思います。特に男子校だから、女子校だからということで、コミュニケーション能力の差を感じたことはあまりありませんし。大学に入ってから男性女性問わず色々な個性の人とどんどんコミュニケーションをとるように努めればいいと思います。その意味では、どこの国立大学もまだまだ女子学生が少ないんですけれども、外の世界はいってみれば共学の世界です。先ほど実社会の第一歩が大学だということを申し上げたように、大学にもっと女子学生が増えて、ごくごく普通に色々な話ができて、一緒に働くという環境ができ

ればいいなというふうに思っています。

司会(野家)：はい。他に先生方で、この男女別学、共学についてもしご意見があったら。はいどうぞ。

安藤：私も男子校出身で、中高と男子校だったんですが、君と同じように大学に入った時に理学部入ったんですけれども、クラスに女の子が１人しかいなくて、なかなかお話ができなくて、すごい疎外感を味わった大学生活を送っておりました。君の気持ちはよくわかります。そういう中で育つとどうなるかというと、女性に対して何かあらぬ妄想がもろもろ出てきて、思わず学生結婚しました。先ほど辻先生がおっしゃられたみたいに、女性がもっと増えるというのはやはり大事で、ここに工学部の学生さんが多分多いと思うのですが、工学部は女性の割合は多分10％ぐらいです。色々なサークル活動とか、ほかの活動を続けていく中で、やっぱりお互いに特性を知るというんですかね。お互いに観察して交流するといいと思いますよ。

司会（野家）：ありがとうございました。大変適切なアドバイスをいただいたと思います。

学生Ｃ：皆様方に、僕の対女性コミュニケーションが低いという誤解を与えてしまったことをこちら側から反省させていただきたいと思います。

司会（野家）：よろしいでしょうか。他に、今のような質問でもなんでも結構ですので、どうぞ手を挙げてください。はい、こちらの真ん中の席の方ですね。

学生Ｄ：工学部のＤといいます。今、世間全般で持続的に発展な社会を目指すというのがあると思うんですが、確かに今の社会、昔から色々発展してきて、少なくとも日本はとても便利で質の高い生活になってきたと思います。これからの人類の認識として、「持続的に発展が可能である」と考えるのはいいことなんでしょうか。そもそもこの「持続的に発展していく」ということは可能なんでしょうか。「いつか、終わりは来る」ということは考えなくていいんでしょうか。これを目指すのは当然、人類としていいとは思うんですけれども、可能であると考えていることが、何か危うくないだろうかという気がします。これについて、ちょっと理系の方々に聞きたいと思いました。

司会（野家）：はい、ありがとうございました。大変いい質問だと思います。その持続可能な発展、サスティナブル・ディベロップメント。僕もサスティナブルというのと、ディベロップメントが両立するのかという疑問を抱いたことがありまして、これについては吉野先生あたりからお答えいただければいいかと思いますが。

吉野：吉野と申します。私は先ほど紹介いただきましたけれども、建築分野の中で建築環境工学ということを専門に教えております。我々の分野でも、今の議論、持続的発展をどうすれば良いかについてはしばしば行われています。持続的発展の定義の中には、後世の人たち、子供や孫たちが今の我々が享受している、色々な意味での豊かさが少しでもマイナスにならないように後世に残していくということが重要であるとされています。発展というのはなかなか難しいわけですが、分かりやすい例としては世界には様々な国があって、まだまだ発展がこれから必要で、貧困が常にそばにあるという国が多くあります。そのような国々がこれからどのようにして生活レベルをあげていくかいうことが発展の中に含まれていると思います。そのために必要なのはエネルギーです。一方で、エネルギーを使うということによって、CO_2の発生があって地球温暖化が進んでくる。そうすると様々な問題、日本で言えば夏はすごく暑くなってきているとか、あるいは風が非常に強い台風が来るとか、雨が降るとか、そういった問題が出てきているわけです。したがって、化石燃料を

できるだけ使わないで、再生可能なエネルギーをうまく利用することによって、エネルギーを確保し生活レベルをあげていくということが求められていると思います。そこのところで、色々な知恵が必要なわけです。世界の国々の全ての人たちが、生活レベルを上げていくということが発展だと思います。その時に、いかに持続性を保ちつつということで、化石エネルギーの限界をいかにクリアするかといったところが大きな課題だと考えております。

司会（野家）：ありがとうございました。今、地球温暖化ということが出てきましたので、やっぱり花輪先生にも一言お願いできればと思います。

花輪：はい。例え話をさせていただきたいのですが、沸騰しているお湯の中に、ガラスのコップを入れるとどうなりますかね、というと、コップは壊れますね。ところが、最初に水の中からコップを入れて、沸騰するまで温度を上げてやると、これは壊れないですよね。なぜって言ったら、なぜでしょう。というと、私はお湯の中にコップを今入れるような状態に、現在の地球がなっているんではないかという気がいたします。どんどん人類が化石燃料を消費して、大気中の温室効果ガスを増やして、濃度を高めて、その結果として地球の表層部がどんどん温まっていますけれども、それの温まり方が激しすぎるんですね。そういう意味で、他の植物も含めた環境が、その急激な温度上昇に平衡に達しないままにどんどん上がるものですから、環境が破壊されるということで、熱いお湯の中にコップを入れるようなことを今、私たちはしているんではないかなという気がします。そういう意味で、我々もっとゆっくり歩まなければいけないんではないかなという気がするんですね。では元に戻って、じゃあサスティナブル・ディベロップメントというのは何かと言ったら、私は我々人類が本当に幸福って言いますか、私たちが楽になる生活がディベロップメントでは決してなくて、私たちが本当に精神的な意味でも豊かに、それから世界中にはまだまだ医療を必要としている等々、食料を必要としている等々があります。そういうことも含めて、我々人類が幸せに生きることがディベロップメントで、そういう価値判断のもとで、サスティナブル・ディベロップメントを達成していくのかなと。決して、一番最初の喩えに戻りますと、そういうところで急いではいけないと思いますよね。死に急ぐ人類というふうに、いつも私使わせていただくんですが、何となく今の社会というのは、世界というのは、死に向かって急いで走っているような気がするんですね。もっともっとゆっくり歩いて、価値観として幸福度を求めるようなディベロップメントにしなければいけないんじゃないかなと個人的には思っています。

司会（野家）：ありがとうございました。他の先生方、何かもしこの問題についてご発言ありましたら。はい、森田先生。

森田：安藤先生の話の時にもあったと思いますが、地球上では今人口が爆発しています。すごく増えています。地球上で生きていくことができる人類の総数というのは、やはり限られていると思います。その限度に私たちはかなり近づいている気がします。まだ、今の段階では、どこがリミットかわかりませんが、あと50年、100年もたったら地球上でどれだけの人が生きていけるかという、そういうことを考えなくてはいけない時代になるかと思っています。それから、地球に生きている人は、均一な環境で住んでいるわけではなくて、先進国の人と発展途上国の人がいます。その人たちをどうするかということも、考えなくてはいけないかと思います。大雑把に言うと、やはり

人類は均一に近づくべきだと思っています。つまり、発展途上国の人は生活レベルを上げなくてはいけない。必要ならば、先進国の人たちは多少その辺のところで我慢しなければいけない。そんなことを考えなくてはいけない時代入っていると、私は思っています。

司会（野家）：はい、ありがとうございました。このサスティナビリティという問題は、これから皆さんが文系、理系等問わず、本当に真剣に向き合わなくてはならない大きな課題だろうと思います。今のお答えでいいですか。ああ、どうぞ。

工藤：持続的な発展ということが話題になっていますが、私がやっている専門分野の農業とか、あるいは途上国、さっきちらっと言ったアフリカですね。アフリカは人口が増えているんですが、飢餓人口も増えています。ですから持続的な発展ではなくて、持続的に衰退していく、そういう部門とか領域、あるいは地域があるということなんです。ですから、持続的な衰退ということに視点を置いて考えた場合には、いかに持続性を確保するか。そこが最大の問題になるんです。持続的発展というのは、環境だとか、あるいは成長にとって、問題になるようなものとどう折り合いをつけるかという話になると思うんですが、辺境の視点から言えばそういうことだけではない。

持続的な発展は、私は多分ないだろうという気がしています。人口が多すぎるという話との関連で言えば、救命ボート理論で行くのか、それとも宇宙船地球号で行くのかという問題がある。特定の人々が救命ボートに乗っていい暮らし、いい環境を享受するのか。それとも宇宙船地球号で、地球全体としてそういう折り合いをつけていくのか。なかなか難しい問題だと思います。これから4年、大学院も含めて9年以上あるわけですから、頑張って研究していただきたいと思います。

司会（野家）：ありがとうございました。この問題は科学ジャーナリストとして辻さんも一言あるんじゃないかと思いますが。お願いします。

辻：やはり、新しい時代の価値観、私たちは何のために生きていくのか、何が幸せなのかという、そういうそれこそ哲学が求められているというふうに思います。経済発展が、私は専門ではありませんけれども、いつまでも続くわけはない。まさにこういう場合には哲学が重要です。そういう意味では教養と言いますか、そこでみんなが知恵を絞っていくということが大事だと思います。大学で先生方も皆さんも一緒になって考えていただきたい、そう外の世界からは期待していますので、頑張ってください。

司会（野家）：ありがとうございました。段々時間が無くなっていくので、会場の方から質問をぜひたくさんいただきたいと思いますが、他に質問がありましたらお願いします。こちらから手があがっています。

学生E：工学部のEと申します。さきほどの文系理系の話に戻ってしまうかもしれないんですが、先生方は、今日これから僕たちが受ける教養教育が、どういうものかというのを考える機会を与えるためにいらっしゃったと思うんですけれども、大学に行かずに高校あるいは中学卒業で社会に出ている人も多いと思うんです。大学に来てから教養教育をするのでは遅いのではないかと僕は思うんですけれども、皆さんはどうお考えでしょうか。

司会（野家）：はい、ありがとうございます。これも重要な問題。大学で教養教育をやるのはもうすでに遅いんではないかと。すでに中学高校の段階で必要ではないかというふうな質問でしたが、どなたでも結構ですが、お答えいただけますか。はい、安藤先生。

安藤：色々な考え方があると思うんですけれど

も、皆さん方は多分、高校中学で課題研究や、あるいは調べ学習等で、例えばさっき持続可能社会という課題に対してどう考えるかとか、色々なことを学習したと思うんですね。学習したというのは、自分と色々な友達とでディスカッションしながら考えていったと思います。その時の自分の考え方や価値判断の尺度というのは、その時に持っている知識レベルで判断し、あるいはそのときの家庭環境や様々な環境の影響を受けて、色々考える、そういうことをしてきたと思うんです。今、この大学という場所で、18歳から20歳の、これから大人になっていく時期に、自分たちが考えるというと、そのベースがまた違ってきている。この時期に、これまでと違った環境で、また新たにこういった問題について考えるということは大事で、それを繰り返すのが教養教育の根幹のひとつだと思っています。確かにもっと早くから教養教育を、というのはあります。それは、家庭学習であり、いわゆるしつけ教育のところから始まっています。なので、もっと早くから始めた方がいいんではないですかという話があったと思うんですが、実は、君のこれまで受けてきた教育の中ですでにされていて、今、新たに教養教育といっていますけれども、何も特別なことはなくて、自分がこれからどうやって生きていくかという、繰り返しになっちゃいますが、それをどう真剣に考えるかというところに位置付けられているんじゃないかというふうに思います。それは、文系理系という、いわゆる自分の専門領域に関わらず、先ほどその地球温暖化とか、それから持続可能社会の取り組み方というところで、自分のスタンスをどこに立って考えるのか。経済の方で立つか、あるいは農学で立つか、工学で立つか。色々なスタンスがあると思うんですね。そのスタンスをどこに作るかというところが、一番大事なところで、それをきちっと決めて取り組んでほしいなというふうには思います。簡単ですがコメントします。

司会（野家）：はい、ありがとうございました。他の先生方、何か今の問題について。工藤先生。

工藤：文系理系の話がまた出ましたけれども、私は理系の学生、文系の学生、両方を教養教育で教えています。さっきちょっと紹介した、資本主義と農業は面倒な講義で5年間で一番優れたレポートを書いてくれた人は工学部の学生さんでした。いまでもよく覚えています。力を入れたレポートでした。そういうレポートを読んでいると、ああ文系理系ってあまり関係ないなと私は考えています。

司会（野家）：よろしいでしょうか。教養教育について一番重要な点かと思いますが、今おっしゃったように、もちろん大学で初めて教養教育を受けるわけではなくて、これまで中学高校でも知らないうちに教養というものは皆さんの心や体に染みついていると思いますし、また大学で教養教育というのは終わるわけではなくて、多分これから一生教養を学ぶということは続いていくんだろうと思いますので、あまり大学の2年間に限定して考えない方がいいだろうと私は考えておりますけれども。よろしいでしょうか、今のご質問。

学生E：はい、大丈夫です。ありがとうございました。

司会（野家）：他にありましたらどうぞ。段々時間がなくなっていきます。どうぞ。

学生F：工学部のFといいます。原稿を見ないでしゃべるのが苦手なので携帯電話を見ながらでお許しください。自分は工学部に、核融合の実現をやりたくて入ったんですけれども、そのきっかけがIPCCのクライメートゲート事件というのを知ってでした。先ほども地球温暖化についての話が出たんですが、世界的にはCO_2は地球温暖化

の原因ではないというのが通常知られていて、ドイツ等でもCO_2の削減に関する法律が否決になったりしています。その問題について日本ではあまり大々的に報道されていないし、ちょっとグレーになっている部分があるという日本の報道の特性について。また大学側が地球温暖化についてちゃんとした情報や、常識だけれども実際とは違うという部分をもっと教えたり、そういうのを自分でちゃんと調べるよう促したりていない部分について、文系理系の先生方問わずに何か問題意識のようなものがあれば、お教えいただけないかと思いました。

司会（野家）：はい、ありがとう。これはもうIPCCのパネルに加わっておられた花輪先生、それから報道の姿勢については辻さんから、一言ずつコメントをいただければと思います。

花輪：IPCCの第5次評価報告書。これは2013年9月27日に出ました。それは科学的な証拠に基づいて、現在我々、人類が持っている地球温暖化に対する最高の知見はこうですよというものを、それをまとめるために作ったレポートなんですが、その中では95％以上の確率で、現在地球が温暖化しているのは温室効果気体の大気中の濃度が上昇しているからですと、そういう結論を出しています。これに対して、やはり地球温暖化懐疑論者、地球温暖化が起こっていない、起こっていたとしても温室効果気体ではないというグループが確かにあります。キャンペーンを張っています。しかし、その地球温暖化の仕組みも含めて、色々な事象を考えた場合、もっとも今の地球温暖化を説明できる有力な説は、温室効果気体の大気中濃度の増加であるというところに結論が出ていると思います。日本の中でも、確かに懐疑論者の方おりますけれども、基本的にはIPCCの報告書が一般に認められている。それに基づいて、現在COP21に向かって各国がどのぐらいCO_2を削減しようかということで議論しています。ですから、地球温暖化はCO_2ではないということが証明されたというのは、全く私は認識が違っていると思います。

辻：報道としても、やはりそういう科学的なコンセンサスに基づいて、今の最も妥当な見方は何かということを中心に報じることになります。ただ、一方で異論があるということも報じる必要があるし、それは報道としてはそんなに大きくはないかもしれないけれども、報じられてはいると思います。逆に、欧米等では、懐疑論の報道が大きすぎるという批判もあります。例えば、99対1、95対5だったとしても、報道の量は必ずしもその比率にはならないので、1対1のように見えてしまい、それが逆に世論を惑わすといわれたりします。しかし、メディアとしてはそういう少数意見の報道も重要ですので、科学的な根拠に基づき、コンセンサスの得られた情報を報じることを中心に、少数意見にも目配りする。ちょっと優等生的な答えになってしまいますが、そういうことだと思います。

司会（野家）：よろしいでしょうか。はい。

学生F：ありがとうございます。

司会（野家）：それでは他にあとおひとりかおふたりしか質問を受け付けられないと思いますが、じゃあそこの。はい、手を挙げている方。

学生G：工学部1年Gです。スマートフォンを片手に失礼させていただきます。教養教育と専門教育のバランスについて質問します。教養教育というのは東北大学における全学で、いわゆるゼネラル、一般的な学問だと今この講演を聞いて認識し、教養というものは「持っておいた方がいいもの」と僕は考えました。ゼネラルに対する学問がもちろん、専学、専門分野の学問になると思うん

ですけれども、僕は工学部なので、その専門分野を学んで最終的にはその最前線で技術発展に自ら寄与したいと考えています。その専学もまた、科学技術の発展によってどんどん高度化して、学ぶ量も多くなっていると思います。専学自体も負担が増加している中で、さっきも述べたとおり「持っておいた方がいいもの」と僕が考えている教養教育に傾倒されると、個人によって学べる量の限界、キャパシティにはそれぞれ個人差もあると思うんですが、全学分野に追われて、かえって専学がおろそかになってしまのではないかと。僕だけではないと思うんですが、本来の、専学についての知識を深めて世間に貢献したいという目的が達成されないようなことになってしまうと、それはそれで問題だと思います。そういうわけで、教養学問と専門学問のバランスを、大学あるいは学生自身が考慮することが重要になってくると思うんですが、どうでしょうか。ご回答をお願いいたします。

司会（野家）：はい、ありがとうございます。教養科目とそれから専門科目、教養教育と専門教育のバランスということですが、どなたでも結構です。これは安藤先生になりますかね。

安藤：すみません、工学部からの質問なので答えさせていただきますが、例えば皆さんの中にはスマートフォンの iPhone 使っている人がいますよね。iPhone、スティーブ・ジョブズが作った、というのかアイディアを出して、アップルコンピューターから、いわゆる工業品としてスマホが出てきているわけですけれども、彼は大学で何を勉強したかというと、彼はすぐ大学に入学して、退学しているんですね。でも唯一大学に行ってよかったなと彼が言ったのは、僕はそこで、いわゆる美術、デザイン、それを勉強したんだと。それはすごく良かった。それがアップルコンピューターの色々なきれいなデザイニング、いわゆる文字の美しさとか、そういうものを僕は学んだんだと言っています。これはひとつの例かもしれませんけれども、技術というのは先ほど私の話でも言いましたけれども、どんどん世の中が変わっていくにしたがって、技術は発展していきます。例えば今のスマホの話はまた繰り返しますけれども、この中にある技術って、実は日本の色々な会社が作れる技術ばかり集積したものです。でも世界の市場を席巻できなかった。なぜだろうか。やはりそこに、色々な技術的な発展だけではないものがそこに入っている。つまり、専門性を高めただけで、世界を牛耳れるというような時代ではないということも理解しておいてほしいと思います。もちろんその、先ほどの話の繰り返しばかりですけれども、君たちに大学に入って何がしたいんですかと言った時に、研究がしたいですと。僕は研究をするために大学に来ましたってよく聞きます。どうぞやってくださいって。じゃあどうやって君らは研究すればいいのか分かってるかという話を色々とするんですけれども、それは何か大学にずっと通っているとそのうち研究室に配属してもらって、それで色々なことが教えてくれるんじゃないですかって、そういう待ちの姿勢なんですよね。でもそうじゃなくて、研究したかったら自分でどんどんやってください。その時に何をじゃあ研究すればいいのかというのも自分で見つけてください。やりたければ。もちろん研究室に入れば、ウェルカムして一緒にやっていきますけれども、その中で教えてもらったものをこなすだけでは、本当の技術者、本当のトップリサーチャーにはなれません。やっぱりそこに何らかの自分のポリシーとかいうのを込めてほしいというふうには思います。色々な工業製品はみんなそうです。ソニーがウォークマンを作った時の技術者もそうですし、色々な技術を作ってきたというのが、そこ

に結実されていると思います。ぜひそういうものを学んでいってほしいなと思います。ちょっと長くなりました。

司会（野家）：はい、ありがとうございました。はい、どうぞ。

辻：ちょっと付け加えると、以前にMITで工学教育についてインタビューをしたことがあるんです。工学で有名な大学ですけれども、今は最先端の知識でも、工学は進歩が早いので、10年もすれば陳腐化してしまう可能性が大きい。そういう時代に何を学べばいいのか。やはり10年たっても陳腐化しないもの、つまり、きちんとした基礎を身に付けることだということを言っていました。私もそうだと思います。さらに言えば、一般教養と言われる哲学や歴史など、そうしたものは、10年たっても、20年たっても陳腐化しません。ですから、ここでしっかり学んでおけば、一生の財産になるものだと思いますので、そういう意識でしっかり学ばれるといいのではないかと思います。

司会（野家）：それでは、花輪先生どうぞ。

花輪：もうひとつ、歴史的なことで言いますと、もとは教養部というのが各大学にあったんですね。概ね2年間、まず学生の人はみんな教養部というところに、そういう組織に入って2年間教養教育を受けて、そこを出て、各々の入った学部に正式に行くと。そういうことがずっと続いていました。その時の教養教育はよかったと、そういうつもりではありません。歴史的に制度がそうなっていたということ。これが1990年代に入りまして、もう少し専門教育と教養教育、一般教育の間の垣根を取ろうよと。大綱化というふうな言葉で呼んでいるんですが、どうなったかというと専門教育を低学年までおろしてやっていきましょうということで、教養部がなくなっていったんですね。本学は1993年の3月に教養部をなくしています。それでも、教養教育はある程度は必要だということをいってきているんですが、どんどん世の中が変わってきまして。地殻変動期でもないんですが変わってきまして、大学に求める人材像も変わった時に、今のままで、今のままというのはその専門だけ知っていれば、あとはいいと。とにかく経済発展の中では、大学から出てきた人材は研究のところで頑張ってくれればいいんだと。そういうものから全く変わって、やはり色々なところに目を向けて、よくイノベーションという言葉を使いますけれども、この社会を新しくするためには、どういう能力を持っている人が必要かとした場合というふうなところで考えた場合、単なる専門知だけを持っていても、まるで話にならないと。やはり、幅広く社会を見ることができる、それから色々なものに対して価値を、価値観を持って、何が大切かがわかる。そういう人たちが欲しいんですよ、社会は必要としていますよということで、どんどん今教養教育の充実というのが叫ばれているのです。バランスという考えがありましたけれども、今まだその教養教育の本当にあるべき、何と言いますかね。割合というのはどのくらいか大変難しい問題ですけれども、そこまでは行っていないんではないかというのが共通に持っているコンセンサスで、だからこそ教養教育の充実を大学では叫びましょうと。そういう社会的な情勢になっているだろうと私は理解しています。

閉会挨拶

高度教養教育・学生支援機構副機構長　羽田 貴史

司会（野家）：はい、ありがとうございました。まだ、質問はあると思いますが、残念ながらこのあと工学部のオリエンテーションが控えていますので、このセミナーはこの辺で閉じさせていただきます。最後に高度教養教育・学生支援機構の副

機構長である羽田貴史先生に閉会のご挨拶をお願いいたします。

羽田：羽田でございます。2時間の特別セミナー、皆さんいかがでしたでしょうか。私は大変満足いたしました。2時間というと、大体人間が集中して考えられるひとつの単位ですね。ハリウッドの映画も2時間が大体尺になっています。今日の話は、多分想像力というのがひとつのキーワードではなかったかと思います。安藤先生は10年後の将来、時間軸での未来の自分を想像してというお話。辻先生は、平面ですね。現在経験していないことを、空間を越えて想像する。そして工藤先生は、過去の歴史への想像力を持てというお話でありました。想像力というと、70年ほど前にサルトルという哲学者が大事な論文を発表していますけれども、想像力には二種類ある。今見ていないものをイメージとして持つというものと、もうひとつは現実を否定して、現実を越えるものを想像する力、心象化する力。それがイマジンであると言っています。辻先生もそうおっしゃっていた。実は、今あるものを否定して、今あるものを越えていくものを想像するというのは非常に難しいんですね。一例としてジョン・レノンのイマジンという有名な曲が、皆さんも知っていると思うんですけれども、あそこは色々なイマジンをあげていて、最初は「Imagine there's no heaven」、天国がないことを想像してごらん、「it's easy if you try」、「簡単でしょう」と言います。そうすると今生きているってみんなわかる。次に、「Imagine there's no countries」、国がないって想像してごらんと言うんですね。「it isn't hard to do」、そんなに難しくない。でも実は難しいというふうに言っているんですね。でも、難しいけれど、もし、イマジンできれば、「Living life in peace」、平和に生きることができる。まあ、この場だったら、多分ジョン・レノンは今日の話を聞いて、「想像してごらん。文理選択がなかったら。もっといい勉強できるね。It's not so hard」と言うかもしれないけれども、実は、It's not so easy、本当は難しいかもしれませんね。

それで、想像力ということは、結局は常識を越えていくことなんだけれども、常識を知らないと、常識を越えることもできないというのが、このフロアとのやり取りでの持続的発展をどう考えるか、環境問題をどう考えるかということでわかったんじゃないかなと思うんです。想像力を働かせて、常識を越えるために常識を知る。そのために専門の勉強も教養の勉強もある。両方対になって現実を変える力を、どう君たち学生、あるいは大学が、社会が持っているか。人間はそうやって進歩してきたという点で、今日はその4年間、6年間の学習のスタートです。

どうやったら想像力が育つか、常識を越えられるかというのは、これは僕が言うことではなくて、皆さん方ひとりひとりが大学生活の中で考えていくことだと思いますし、東北大学はそのためには様々な教育のプログラムや学習の機会を提供しております。ぜひ、胸を張って卒業の時にはこれだけの想像力を自分は持てたというふうにして、東北大学の門を出ていけるようにしていただきたいと思います。今日本当に長い間、参加どうもありがとうございました。これで、閉会の挨拶といたします。

（拍手）

司会（野家）：それでは、これで教養教育特別セミナー閉じさせていただきます。ご協力ありがとうございました。それから先生方もどうも、素晴らしい意義深いディスカッションをしていただきましたこと、感謝を申し上げます。それではこれでお開きにします。ありがとうございました。

1.2 特別セミナーに対する学生の評価

このセミナーに対する参加者の感想や意見と、評価のおおよその分布を知るためにアンケートを実施した。調査方法として、参加者に配布する資料の最後のページに質問事項を記したアンケート用紙を添付し、終了後に出口で回収するという方式をとった。今回の参加者は 751 名、そのうちアンケートを提出した者は 355 名、約 47% であった。

アンケート回答者の学部別構成を見ると、工学部のオリエンテーションと時間的に連続していたこともあり、工学部学生が圧倒的に多く、全回答者の約 94%を占めた。その他の学部の学生からの回答がほとんどなかったことが少々残念であった。

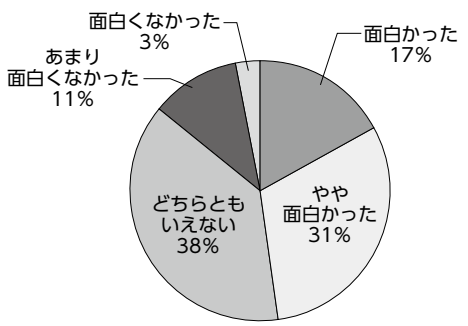
まず、今後の継続の必要性については、約 40%の人が肯定的に回答した。内容についての反応を見ると、「面白かった」が約 48%、「教養教育に興味が増した」についての肯定的回答がともに約 40%であり、「勉学意欲を刺激された」と「やや刺激された」が併せて 47%とほぼ半数に近かったことは、本セミナーが新入生に対して勉学への動機づけの役割を果たしたと見ることができる。また、理解度については肯定的回答が 53%と必ずしも充分とは言えないが、例年よりは高い数値を示している。ただし、今後とも理解度を上げるための工夫と努力は必要であろう。

パネル・ディスカッションについては、同世代の学生からレベルの高い質問や意見が積極的に出されたことに対し、大いに刺激を受けたとの感想が多く、その意味では学生どうしの切磋琢磨の呼び水となった点において、本セミナーはおおむね成功したと言ってよい。

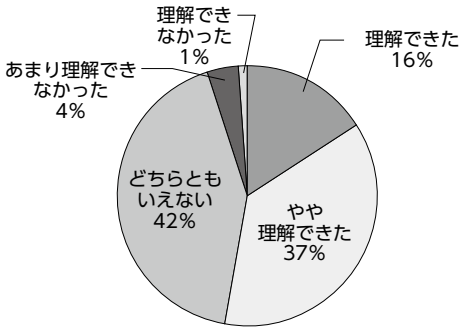
学部別アンケート提出者数と東北大学 1 年生との対比

	アンケート提出者		東北大学 1 年生		対在籍者提出率
	実数（人）	全体比	実数（人）	全体比	
文学部	0	0.0%	216	8.4%	0.0%
教育学部	1	0.3%	74	2.9%	1.4%
法学部	1	0.3%	171	6.7%	0.6%
経済学部	4	1.1%	265	10.3%	1.5%
理学部	2	0.6%	349	13.6%	0.6%
医学部	1	0.3%	286	11.1%	0.3%
歯学部	0	0.0%	56	2.2%	0.0%
薬学部	1	0.3%	87	3.4%	1.1%
工学部	341	96.0%	902	35.1%	37.8%
農学部	1	0.3%	162	6.3%	0.6%
不明	3	0.8%			
合計	355	100.0%	2,568	100.0%	13.8%

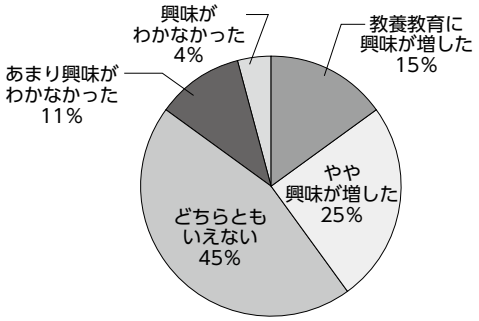
※参加者数は約 751 名



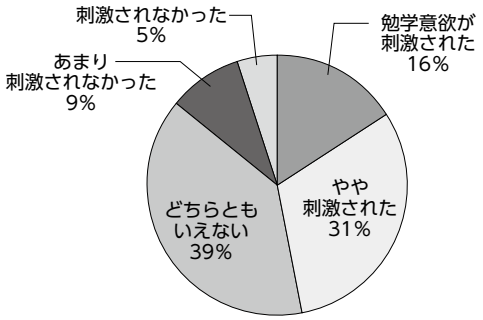
【質問 1】面白さ



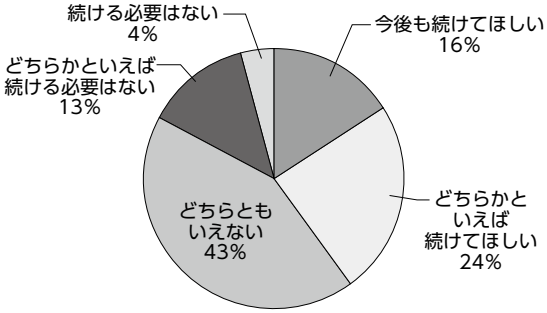
【質問 2】理解度



【質問 3】興味



【質問 4】勉学意欲



【質問 5】継続希望

【質問 6】、【質問 7】、その他（印象に残った点、改善すべき点など）のまとめは巻末資料に掲載。

「地殻変動期の教養・教養教育―新入生とともに考える―」アンケート

このアンケートは、今回の特別セミナーに対する皆さんの率直な感想などをお聞きし、今後の教育に役立てようとするものです。所属学部･回答をご記入のうえ、会場の入口にあるボックスに入れてください。無記名で結構です。

※〔質問１〕～〔質問５〕は各質問の答となる１～５を選んで、１つ○をつけてください。たとえば質問１については、「とても面白かった」は５、「面白くなかった」は１、「どちらとも言えない」は３を、その中間の場合は４あるいは２を選んでください。

※〔質問６〕・〔質問７〕は自由にお書きください。

所属学部	学部		2015 年 4 月 13 日
〔質問 1〕	面白かった	5 ── 4 ── 3 ── 2 ── 1	面白くなかった
〔質問 2〕	理解できた	5 ── 4 ── 3 ── 2 ── 1	理解できなかった
〔質問 3〕	教養教育に興味が増した	5 ── 4 ── 3 ── 2 ── 1	特に興味がわかなかった
〔質問 4〕	勉学意欲が刺激された	5 ── 4 ── 3 ── 2 ── 1	特に刺激されなかった
〔質問 5〕	今後も続けてほしい	5 ── 4 ── 3 ── 2 ── 1	続ける必要はない
〔質問 6〕あなたが今日のセミナー全体を通して最も興味深かったことは何ですか。			
〔質問 7〕あなたは東北大学の教育にどんなことを期待しますか。			
その他、印象に残った点、改善すべき点などがありましたらお書きください。			

■教養教育院　http://www.las.tohoku.ac.jp　Email info@las.tohoku.ac.jp　TEL 022-795-4723

第Ⅱ部　総長特命教授合同講義

愛と生命（いのち）の教養教育

―恋の予感から子育てまで―

平成 27 年 7 月 28 日

平成２７年度　教養教育院 高度教養教育・学生支援機構

総長特命教授合同講義

愛と生命（いのち）の教養教育

―恋の予感から子育てまで―

日時 平成 27 年 7 月 28 日（火）
16:20~18:30（2 時間 10 分）

会場 マルチメディア教育研究棟
M206

教養教育院総長特命教授による公開の合同講義を行います。この講義は、総長特命教授担当の総合科目受講者はもちろん、学生・教職員すべてに開かれています。

今回の講義では、「愛と生命の教養教育―恋の予感から子育てまで―」を共通テーマとし、前半 45 分の講義を行ったあと、受講者とともに討論を行います。

●講義内容　**「愛と生命：生物学および社会的帰結」**　**山口 隆美**〈生体医工学〉
［教養教育院総長特命教授／医工学研究科特任教授］
「学校で学ばなかったこと、子育てから教えられたこと」　**羽田 貴史**〈教育学〉
［高度教養教育・学生支援機構副機構長／キャリア支援センター長／教授］
「日々精一杯」　**田中 真美**〈医療福祉工学・バイオメカトロニクス〉
［医工学研究科／工学研究科教授、男女共同参画推進センター副センター長］

●討論　**講義担当者**、［教養教育院総長特命教授］**森田 康夫**〈数学・数学教育〉　**工藤 昭彦**〈農業経済学〉
吉野 博〈建築環境工学〉　**野家 啓一**〈哲学〉、**会場の皆さん**

●司会者　**座小田 豊**〈哲学〉［教養教育院総長特命教授］

■講義中および当日配付する資料は、教養教育院のホームページにも掲載します。

【お問い合わせ】
東北大学教養教育院（高度教養教育・学生支援機構）　TEL：022-795-4723　Email：info@las.tohoku.ac.jp　http://www.las.tohoku.ac.jp

過去の合同講義
※行事・イベントページ　http://www.las.tohoku.ac.jp/pastevent
第 6 回・第 5 回総長特命教授合同講義の配付資料、第 5 回以前の動画をご覧いただけます。
※刊行物ページ　http://www.las.tohoku.ac.jp/publication
各年度「教養教育院セミナー報告」（平成 22 年度は「合同講義報告書」）で合同講義の様子やまとめをご覧いただけます。

2.1 総長特命教授合同講義　事前配付資料

平成 27 年度教養教育院　総長特命教授合同講義　レジュメ

2015 年 7 月 21 日

総合タイトル

愛と生命（いのち）の教養教育―恋の予感から子育てまで―

日　時：2015 年 7 月 28 日（火）　16：20 ～ 18：30（2 時間 10 分）

場　所：マルチメディア教育研究棟 2 階　M206 教室（マルチメディアホール）

事前配付資料

教養教育院総長特命教授などによる公開の合同講義を行います。この講義は、総長特命教授担当の総合科目受講者はもちろん、学生・教職員すべてに開かれています。

今回の講義では、共通テーマを「愛と生命（いのち）の教養教育―恋の予感から子育てまで―」とし、前半 45 分の講義を行った後、休憩をはさみ、受講者とともに討論を行います。

【講義】

・「愛と生命：生物学および社会的帰結」　山口 隆美（生体医工学）
［教養教育院総長特命教授／医工学研究科特任教授］

・「学校で学ばなかったこと、子育てから教えられたこと」　羽田 貴史（教育学）
［高度教養教育・学生支援機構副機構長／キャリア支援センター長／教授］

・「日々精一杯」　田中 真美（医療福祉工学／バイオメカトロニクス）
［医工学研究科／工学研究科教授、男女共同参画推進センター副センター長］

【討論】

・森田 康夫（数学・数学教育）　・工藤 昭彦（農業経済学）
・野家 啓一（哲学）　・吉野　博（建築環境工学）

【司会】

・座小田 豊（哲学）

◆この資料について◆

この合同講義は受講者の皆さんも参加する 1 つの授業です。後半は皆さんにも発言していただきたいのです。この資料はそのために予め、前半に 3 名の教員が講義する内容の概略を、総合科目受講者の皆さんにお知らせするものです。これを読んで感じたこと、質問したいことを準備しておいて下さい。また、この資料は教養教育院のホームページからダウンロードすることもできます。

当日講義を聴きながら考えた、あるいは予め考えてきた質問やコメントを『質問・コメントシート』に記入して、休憩時間に提出して下さい。その中の幾つかを採り上げて討論の材料とし、残りは教養教育院のホームページの特集コラムでお答えします。

当日配付する資料の中に、今回の資料の最後にあるような質問・コメントシートを複数枚添付しますので、聞きたい相手（複数指定可）ごとに別の紙に書いてください。

【教養教育院ホームページ】http://www.las.tohoku.ac.jp

日々精一杯

田中 真美

今回の授業にあたり何を話すべきか大変悩んだ。「愛と生命の教養教育 いのち ―恋の予感から子育てまで―」、壮大なタイトルである。そして私に声がかかった理由を考え、子育てをしている女性研究者だからかなと思い、引き受けたが、100 人 100 通りあるわけであり、受講者の皆様には私はそのほんの一例だと思っていただければ幸いである。

私は、東北大学工学部に入学・卒業し、修士課程へ進学し、その後助手になった。ドクターの学位取得を目指しながらの教員であった。日々研究の日々であり充実はしていたが、研究者として生きていくという心づもりができたのは、講師になる少し前位だったと記憶している。

講師の時に全学の男女共同参画委員会の工学部の委員として出席した。その委員会で女性教授を見たことが、その後の私に大きく影響している。それまでは、工学部には女性教授はいなく、「「教授」になる」ということを全く意識したことが無かった。その委員会では女性教授達が、委員会を取り仕切っていた。私は、委員会終了後すぐさま研究室に帰り、私のボスに「先生、女性教授がいました！東北大学には女性教授がいるんですね！！」と興奮して報告したことを覚えている。ボスはその興奮に驚きながらも「おお、そうか、君も目指したまえ。」と言ってくれた。と言ってすぐさま何が変わるわけでもないが、常日頃の研究の日々の中に、私の中で女性教授というものが人生の選択肢として見えた初めての時であったと思い出される。

夫とはちょうどこれくらいの時期に学会で出会った。「女性研究者って得だよね。すぐ皆に覚えてもらえるし。」と言われたことが第 1 印象であった。変に気を使われるよりも歯に衣着せぬ感じが、誠実に思えたのかなと思い出される。結婚してすぐ、私がフランスに 10 か月行ってしまい、それについて今でもブツブツ言われる時がある。とはいえ、現在も私が思いのまま生きていることを許容してくれる懐の深さに、常に感謝している。

一人息子がいるが、出産して変わったことは時間が限られているので、無意識のうちに、プライオリティについて考えて行動していることである。学校でできること、家でもできること、今指示しないといけないことなど。無意識のうちのにそれを考え、実施している。また、色々な支援制度を利用しながら研究を行っているが、正直な所思ったほど両立は出来ていないと思うけれども、それで「良し」とすることとしている。私自身が出産後、完全な復帰ができると思っていたが、それは甘かったとすぐ痛感した。少し無理をすると、すぐ子供が病気になるのである。これは息子が赤ん坊の時から小学校になった今でもあり、無理は出来ないのだなと悟った。最初は何もできないとイライラしていたのだが、それが無理なものだと悟ったら、ストンと気が楽になり、そしてできることを精一杯行おうと思うようになった。

以上、常々目の前のことを精一杯クリアしている。ただ、いつも感じるのは、周囲にはとても良い提案やコメントをしていただける方々が多くいる。そして、手前みそながら私はそれを素直に受け入れているように思うし、人の言うことを聞くのは大変ためになっている。また、理解してもらうためには自分の状況も話すことが重要である。「恋の予感から子育てまで」、人として、互いに尊敬しあうことに尽きると感じている。

学校で学ばなかったこと、子育てから教えられたこと

羽田 貴史〈教育学〉 高度教養教育・学生支援機構副機構長／キャリア支援センター長／教授

1. 共稼ぎ・生活のルール・出産

今から30年前、福島大学在職時に、小学校教師の妻と結婚し、家事の公平な分担（当番表の作成）と家計の公平な負担（必要な生活費＋貯金を計算して給料比で負担）を取決めた。家事当番表には、後に、子どもたちも加わった。先輩女性教員の助言「陣痛促進剤を使わず自然分娩を」に従って病院を選び、呼吸法を学びに夫婦で通った。出産時に一晩中腰をさすり続けた私の手のひらは腫れてむくんだ。かいあって、助産婦さんに取り上げられ、「私は誰？どこにいるの？」とでも言いたげに周りを見回して大声で泣く娘が誕生した。

2. 育児・保育園

出産後は、おむつの洗濯（紙おむつは不燃ごみの上、おむつ離れが遅い）、お風呂入れを担当、妻が復職してからは、保育園への送り迎え、夕食準備、お風呂の当番。遊びや自然を大切にする保育園を選び、遠いので引っ越した。毎月保護者懇談会があり、6時半から8時過ぎまでの懇談会は疲れたが、夫婦二人だけで不安に陥りがちな子育ての助けになった。保護者の結びつきも強く、「親父の会」もできて（実質は飲む口実だった）、楽しく過ごした。本読みは、親も楽しく、福音社、ポプラ社のシリーズを購入、毎晩読み聞かせ、「モウイッペン！」とせがまれ、7回読まされたことも。

娘3歳の時に第2子を出産。産室の入り口に私と娘が立ち合い、「お母さん、がんばって！」と声をかける娘の姿があった。息子も0歳児保育で2人の送り迎えが加わり、時間になると教授会だろうが退席して帰った。

3. 転勤と家族

娘が小2、息子が年長になる時、広島大学に転勤する。妻も教員採用試験に合格し、共稼ぎ・子育ては継続するが、大学がある東広島市の保育所は4時20分までしか預からない。6時まで保育する隣の熊野町（筆の生産日本一）にアパートを借りて2年間過ごし、息子が小学校に上がる時に大学の近くへ住まいを移した。息子は学童保育へ。たまたま、最初の保護者会でもめ事の仲裁に入ったことから、指導員に頼まれ、保護者会の会長になり（2年間）、続いて地域子供会の役員（2年間）、地域とのつながりも強くなり、娘が高校生の時はPTAの広報委員を務め、広島大学の最後の年は、町内会長（約250世帯、1000人）となって、ゴミ置き場を荒らすカラス対策に追われた。

家族のつながりは大切、私の実家（北海道・帯広）、妻の実家（福島・小高）への帰省は娘が高校生になるまでは、ほぼ毎年（10回以上）、帰省時にはついでに北海道各地を回り、双方の家族と旅行、年に1度は家族での旅行や温泉旅行は、今も続いている。高校進学は、私立進学校と程よい進学校である県立高を受験させ、県立高に二人とも進学させた。進学のための勉強で高校生活を過ごすのではなく、いろいろな経験をして欲しかった。娘は、飽き足らず2年生の時にAFSに応募して1年間オーストラリアの高校で過ごした。戻ってくると2年生の科目を取っていないので成績が伸びず、京都のR大学の指定校推薦に飛びついて、3年生の秋からは好きな読書三昧の日々。息子はアナウンス部でのんびり過ごし、東京に行きたくて、M大学に進学した（大都市圏の私立大学進学につぎ込んだお金は総額2200万円強。在学が重なった時は500万円の出費になった）。

4. 就活

就活への援助は、親としての最後の仕事。なかなか成果の出ない娘に様子を聞くと、志望先の方向も曖昧で、これではまずいと対象職種の絞り込みや志望企業の研究、プレゼンの準備も付き合い、独立行政法人に就職した。息子にも同様な指導で公務員に就職した。子育ては終了し、大人としての親子の付き合いになる。

5. 総括

子育てを通じ、人として生きる上で大切なことを学ぶ機会であった。手のひらに載るほど小さな赤ん坊が生長して一個の人間となる神秘さ、秘められた生命力への感動、人を人として育てる力が自分にあるという自己の再発見、子どもの人生を通じて自分の人生と親の人生を追体験し、人生の意味を理解すること、さらに、子育ては、職場の人間関係に止まらず、いろいろな人々と知り合い、地域社会を作るきっかけを与えてくれたのである。

では、高校や大学で学んだことは、子育てに役立っただろうか。残念ながら、子育てを終えてみると、日本の学校教育には、人間が人として生きる重要なエッセンスが欠けており、大切なことが装備されていないと言わざるを得ない。大学教育を、自分の人生にどう活用すべきか、どう学ぶべきか、大学教育はどうあるべきか、子育てを終えた親の視点と高等教育研究者の視点で、皆さんに助言したい。

愛と生命：生物学および社会的帰結

山口 隆美（教養教育院総長特命教授・医工学研究科特任教授）

・「恋におちる」ということの生物学

私たちは、地球上のほとんどの生物と同様に、両性生殖する生物である。生物、生命体の本質的特徴を一つだけ挙げるとしたら、それが生殖であることは、すべての生物学者の一致する見解である。生殖なくして生命はない。従って、私たちは生殖可能年齢に達すれば、必ず恋におちる。恋におちることは、何人にも、どんな制度にも止めることができないことは、歴史が証明し、古今の芸術・文学が繰り返し描いてきたところである。

・「愛する」ということ

恋におちることによって、愛が生まれる。上に述べたことに従って、愛することは、生物としての本質に基づき、性的なものである。現実では、社会的・制度的な束縛は多いが、しかし、愛する二人は、必然的に性交渉をする。ヒトでは、他の動物（がどう感じているかは分からないけれども）に比べて、ある意味で必要以上にセックスがもたらす快感・満足感が大きいようである。確かに、愛する人と、性を享受することは素晴らしいし、それは、本質的に人が生きていることの悦びと成長・向上の意欲につながっている。

・愛と性の生物学・医学

性に、必然的に愛が伴わなければならないわけではないが、しかし、愛のないセックスは、その最も本源的なもの―相互の尊重―を欠く。愛するということを一語で定義することはできないが、愛し合う二人は互いを思いやる気持ちと行動を欠かせない。合意と、従って愛に基づかないセックスは空しいし、場合によっては犯罪ですらある。とりわけ、性行為に伴う伝染疾患を知り、あらゆる手段でそれを避けることは愛の基本である。

・子供が出来るということ

セックスは本来的に生殖の手段として、これほどまでの快感が報酬として用意されているのだから、健康な男女が何らの避妊手段をとらないで性交すると、およそ 85% の確率で妊娠する。最も確実に近い避妊手段はピルであるが、これでも 100% ではない。結果的に絶対確実な避妊の方法はない。これは、我々が生物であることの帰結である。

・社会的帰結

しかし、妊娠したら、結婚し、出産することを真剣に考慮することを勧めたい。二人が若年であればあるほど、妊娠・出産に伴う危険は少なく、生まれる子供が健康である確率が高い。なにより、子供をもつことは、いわば、広く人類に責任をもつことにつながり、また、親となること、子育ては重圧であるばかりではなく、何ものに代えがたい素晴らしい経験でもある。我が国では、まだまだ、このようなカップルと家族への支援は十分ではないけれども、今回講演する演者の私たちが子供を授かったときに比べれば、状況は信じられないほど改善されてきた。そもそも、子供が生まれ、育つことは社会の成り立ちの基本であるから、先進国において支援が後退することは考えにくい。社会的な支援の制度を見いだし、利用することを追求すれば、必ず道は開けると信じたい。

平成２７年度　教養教育院　高度教養教育・学生支援機構
総長特命教授　合同講義

愛と生命（いのち）の教養教育
―恋の予感から子育てまで―

2015 年 7 月 28 日(火)16：20～18：30
マルチメディア教育研究棟 M206　(2 時間 10 分)

当日配付資料

●はじめに：　理事、高度教養教育・学生支援機構長、教養教育院長　**花輪 公雄**〈海洋物理学〉

●講義：４５分程度

1. **日々精一杯**
   医工学研究科／工学研究科教授、男女共同参画推進センター副センター長
   田中 真美〈医療福祉工学・バイオメカトロニクス〉
2. **学校で学ばなかったこと、子育てから教えられたこと**
   高度教養教育・学生支援機構副機構長／キャリア支援センター長／教授　**羽田 貴史**〈教育学〉
3. **愛と生命：生物学および社会的帰結**
   教養教育院総長特命教授／医工学研究科特任教授　**山口 隆美**〈生体医工学〉

●休憩：　１５分程度　「質問・コメントシート」作成、回収

●討論：　６０分程度
講義担当者、[教養教育院総長特命教授] **森田 康夫**〈数学・数学教育〉　**工藤 昭彦**〈農業経済学〉　**野家 啓一**〈哲学〉　**吉野 博**〈建築環境工学〉、**会場の皆さん**

●おわりに：　教養教育院総長特命教授　**森田 康夫**〈数学・数学教育〉

●司会：　教養教育院総長特命教授　**座小田 豊**〈哲学〉

※「質問・コメントシート」は A5 サイズのカラー用紙です。休憩時間中に係員が回収にまわります。
　提出いただいたものの中から幾つかを採り上げて本日の討論の材料とし、残りは後日、教養教育院のホームページ上でお答えします。
※今後の合同講義等の改善に役立てるため、講義終了後、アンケートへのご協力をお願いします。
　この資料の最終ページに質問があります。回答は別紙ミニットペーパーに記入してください。
　（下記の科目を履修している学生は、出欠の確認を兼ねますので必ず提出してください。）
※アンケートとは別に、担当教員の指示に従ってレポート等の提出をしてください。
　・総合科目（火 5 講時）「教育と科学技術」（森田 康夫）
　　「時代の文脈から見た『食』と『農』」（工藤 昭彦）

【問い合わせ】東北大学　教養教育院（高度教養教育・学生支援機構）
TEL　022-795-4723　FAX　022-795-7647
Email　info@las.tohoku.ac.jp　http://www.las.tohoku.ac.jp

2.2 総長特命教授合同講義の記録

司会（座小田）：時間になりましたので、ただいまから総長特命教授合同講義を開催したいと思います。これから、時間としては6時半ぐらいまでを見ております。通常の講義だと5時50分で終わるかと思いますが、その時間帯にどうしても出なければならない方は、その際に退席して構いませんけれども、とりあえずは、終わるまで皆さん参加していただければと思います。私は今日の司会進行役を仰せつかりました、総長特命教授の座小田と申します。ご協力どうぞよろしくお願いいたします。全体のスケジュールはこの後ご紹介しますけれども、最初に教養教育院の院長で東北大学理事、花輪公雄先生から開会のご挨拶をいただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

はじめに

理事、高度教養教育・学生支援機構長、教養教育院長　花輪 公雄

花輪：皆さんこんにちは。紹介していただきました、教養教育院長の花輪と申します［スライド1］。大学においては、教育担当の理事をしております。後でご紹介しますけれども、教養教育院の総長特命教授の先生方による合同講義というのが開始されて、今回で7回目ということになります。まず教養教育院をご紹介いたします［スライド2］。本学の教養教育の充実を目指してということで、今から7年前になりますが、2008年に設置された組織です。当初、独立していた組織でしたが、昨年の4月に高度教養教育・学生支援機構という機構ができまして、その中に入りました。現在、教育と研究に実績のある6名の、本学の名誉教授の先生を総長特命教授と呼んでいますけれども、6名の先生と4名の現役の先生からなっております。先生方は色々な授業科目を担当されておりまして、その他にちょっとイベント的な、特別セミナーを4月に開催しています。皆さんも出席されたと思います。それから一昨年まで10月、11月頃やったんですが、昨年から7月に行っていますこの合同講義を開催しています。今ご覧になっているスライドの中に『読書の年輪』というものがありますけれども、皆さん入学手続書類と一緒に送られていて、手に取ってご覧になった方も多いかと思います。今日の合同講義［スライド3］、第7回ですけれども、「愛と生命（いのち）の教養教育―恋の予感から子育てまで―」というタイトルで、初めに3人の先生方から各自15分ぐらいの講演をやっていただきます。田中真美先生、羽田貴史先生、山口隆美先生。それからちょっと休憩を挟みまして、後半パート2ですけれども、総長特命教授であります森田先生、工藤先生、吉野先生、野家先生がさらに参加されまして、パネルディスカッションが行われます。「主役は皆さんです」と書いてありますように、討論では色々な疑問、あるいは意見を、どんどん出してくださるようにお願いいたします。主役は皆さんです。司会は先ほどご紹介ありました、座小田豊先生であります。座小田先生も総長特命教授であります。この機会にということで、私調べてみました［スライド4］。第1回から6回、すでに終わっているんですけれども、例えば第1回は2010年の10月。「『食べる・科学する・行動する』人」という題で行われています。2回目、「教養とは？－東北大学生に考えてほしいこと－」。第3回、これは2011年の秋ですね。2011年3月11日、東日本大震災発

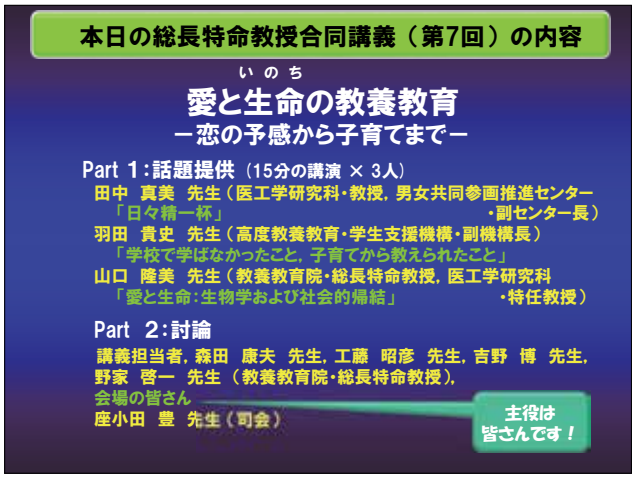
生いたしましたけれども、「震災」という題名でこの合同講義が行われています。第4回、「3.11からの出発～東北大学の教養教育が目指すもの」。それから第5回、「教養はなぜ必要か－就活に役立つ？」。そして昨年「環境と人間」と。こういう題で、合同講義が行われています。この講演の内容、あるいはパネルディスカッションの内容は、全て教養教育院のwebサイトからご覧になることができます。また、下の方に並べておきましたけれども、5冊の冊子、最初の冊子に2回分の合同講義がおさめられていますが、こういう冊子体にもなっています。繰り返しになりますけれども、webサイトから見ることができますので、どうぞ興味があるテーマがありましたら、ご覧になってください。いずれも、毎回のテーマが少しずつ違いますけれども、［スライド6］教養とは何か、あるいは教養教育とは何かということをテーマにして、一貫して流れているのはそういう主題でありますね。専門と教養の関係。今、世の中、世界がどんどん急速に変わりつつあります。そういう中で、我々が身に付けておくべき素養、イコール教養というものはどういうものかというものを考えてみてください、ということです。私は、考えることというのは楽しむことであるとも思っています。もちろん、答えが見つからず苦しい時もあるのですが、物事が整理できたり、あるいはさらに深く考えるべきところが見つかる。これは本当に楽しいことなんじゃないかなというふうに思います。今日のテーマ、すごく私にとっても興味がありますので、私自身今日の合同講義を大いに楽しむことにしたいと考えています。皆さん、有意義な時間になりますよう、大いに考えてください。これで私の挨拶を終わります。

（拍手）

司会（座小田）：花輪先生、どうもありがとうございました。

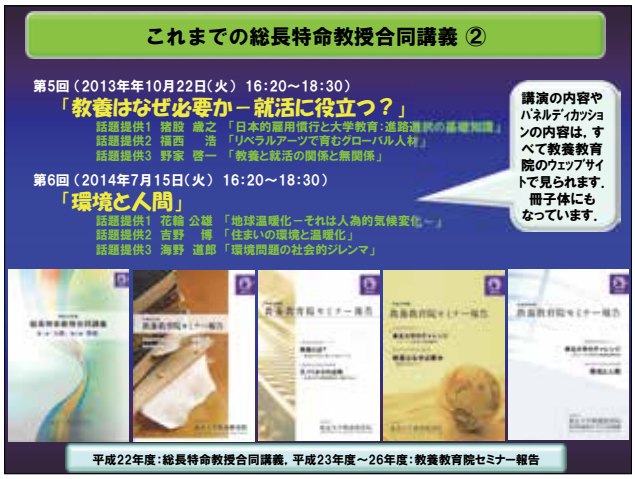
[スライド 1]

[スライド 2]

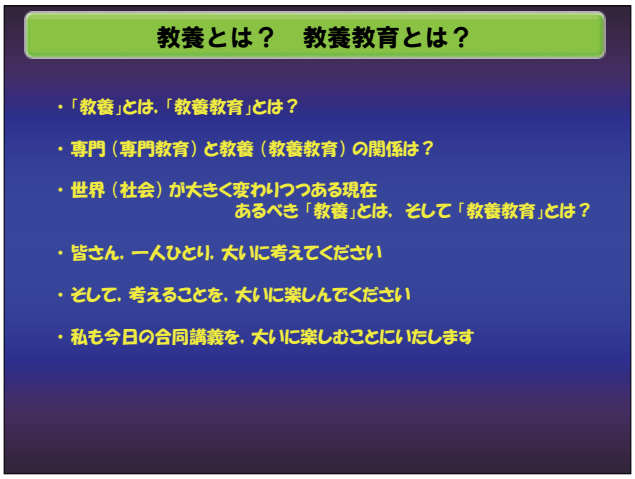


[スライド 3]

[スライド 4]



[スライド 5]



[スライド 6]

司会（座小田）：今日の全体のスケジュールについては、今大まかに花輪先生の方からご紹介いただきましたけれども、私の方からもちょっとコメントシートの使い方等についてご紹介したいと思います。今日、お配りしております資料の後の方に、質問・コメントシートというものが付けられております。これに、これから講義をしてくださる先生方のお話を聞いたその内容に対して、あるいはその内容から外れてもっと広い範囲でも構いませんけれども、質問事項がございましたら、特にどの先生にあてての質問かということをチェックした上で、コメントを書いていただければ、その内容に応じて、こちらの方で仕分けをしまして、先生方に答えていただくというような形を取っていきたいと思います。それをディスカッションの口火として使っていきたいと思っていますので、ぜひ積極的な意見を書いていただければと思います。上の方が講義の内容に関するコメント等の欄ですね。質問・コメント。下の方は講義の内容以外についても、もし何か聞きたい等々というようなことがございましたら、もっと広い話をしてほしいとか、何かそのようなことがございましたら、そちらにも書いていただければ適切に答えることができる先生がいらっしゃるかどうか分かりませんけれども、それなりにこちらの方で配慮して答えができるように運んでいければと思っています。ぜひ、積極的に皆さんの質問、コメントを書いていただければありがたいと思います。それから、先ほど最初の時間に言いましたが、従来ですと5時50分で5コマ目の授業が終わります。ミニットペーパーを提出するということが出欠をとる代わりになっておりますので、その時間に出て行かれる方は、担当の係にペーパーを渡して退室していただければと思います。森田康夫先生、それから工藤昭彦先生の授業、総合科目の授業の合同講義になっていますので、その出欠をとるためのミニットペーパーということですね。ふだん出席されている学生の皆さん方にはお分かりかと思います。それでは、そういうつもりでどうぞよろしくお願いいたします。また、さきほど花輪先生からご紹介していただきましたけれども、合同講義の様子が記録されていますので、教養教育院のwebページ等々からアクセスして読んでいただければありがたいと思います。今日の話もまた、皆さん方の質問事項も含めて、アップされることになりますので、どうぞ積極的なご発言、コメント等をお願いいたします。それでは、今からお3人の先生方に講義をしていただきます。最初に田中真美先生、次に羽田貴史先生、最後に山口先生から講義をしていただきます。それぞれ約15分ずつということで、お話をお伺いしたいと思います。皆さんには、山口先生の資料はパワーポイントのプリントアウトしたものが手元に渡っているかと思いますし、田中先生と羽田先生のものについては、レジュメが渡っていると思いますので、それを参照していただければと思います。

講義「日々精一杯」

田中 真美

司会（座小田）：それではまず最初に、田中真美先生から。パンフレットでは順番が全く逆になっていて申し訳ありません。「日々精一杯」と題しまして、田中真美先生。医工学研究科、それから工学研究科の教授でございます。それではよろしくお願いいたします。

田中：皆さんこんにちは。今回、平成27年度総長特命教授合同講義ということで、すごく難しいテーマで突然の仕事を山口隆美先生から頼まれました。「愛と生命（いのち）の教養教育―恋の予感から子育てまで―」というタイトルで、何をお話ししてい

いかよく分からなかったので、レジュメもちょっと的外れなことが書いてあるかもしれませんが、聞いていただければと思います。今回のタイトルですが、本心は「日々イッパイイッパイ」なのですが、少々体裁を考えまして「日々精一杯」とさせていただきました。今回、レジュメを見ていただくと分かりますが、私のケースを基本としてお話をします。またその中に、東北大学の支援、子育ての支援などがあるので、そちらの話もしようと思います。自己紹介になりますが、私は東北大のOGですね。今教授をしていますが、平成元年に東北大学に入学しまして、工学部に入学しました。機械系で、機械工学科に入っています。そして、マスター修了後、紆余曲折色々あり、助手になりまして、助手をしながらドクターを取得するということになります。また、ドクター取得後から結婚の間にも色々あったのですけれども、その部分について後ほど詳しくお話します。2008年に医工学研究科というものができまして、そこで教授になりました。現在、研究テーマは触覚・触感のメカニズムの解明や、触覚に関わるセンサシステムの開発をしております。今日のお話の「愛と生命（いのち）の教養教育」に関係してくる自己プロフィール的なところですが、小学校3年の息子がいまして、今日話をされる羽田先生も子育てが終わられた段階だと思うのですが、私はまだまだ悪戦苦闘中というような状況でございます。夫は富山大の教授をしており、単身赴任という状況でございます。私の結婚、出産、育児ということについてですが、タイトルにある「恋の予感」についてお話をします。「恋の予感」と言いますか、どうやって今の旦那と出会ったかなとか、どうだったかなと思い出して考えたのですが、私は第2次ベビーブームの時代で生まれているため同じ年代の人が沢山いたからか、出会いは結構多くあったと思います。それで、出会いはあったのですけれども、結婚となると話は別で、とても大変だなという印象です。その話を実は今日、研究室でしてきました。私はこの、「出会いはあるが結婚は難しい」という話をしてくるつもりだと言ったら、研究室の若者たちに出会いがないと言われました。今は出会いが難しいと言われて、ああそうなのかなぁと、ちょっと時代の違いを感じております。私の時は本当に、出会いは何といいますか、あったと感じています。それぞれ皆が積極的に動いていたと感じています。ただ、やはり結婚となると難しいと感じます。それは好き嫌いだけでなく、働き方にも理解のある方を探す必要がありまして、それがなかなか大変だったなと思います。大学の先生なので、どうしても私の生活は研究中心の生活です。それを理解してくれる方を選ぶということが非常に難しいということで、さらに東北大学のこの立派な研究環境で研究を続けたいとなると、自分で何が譲れないか、将来どういうことが重要か等々考える。これを考えたのが、私の場合29歳か30歳ぐらいの時でした。遅いと思われるかもしれませんが、それぐらいのタイミングで私は考えて、結婚は無理かもしれないなと、実は29歳ぐらいで思いました。諦めかけてちょっと寂しいなと思って、研究するしかないのかなと思っていたのですが、諦めかけたところで、肩の力が抜けたのか、相手を見つけられたような感じもあり無事結婚できました。2003年に結婚しましたが、先ほど言いましたように譲れない部分っていうのは東北大で研究をしたいということでして、それを理解してくれる方を、その時に無事結婚できたので、研究にはほぼ影響なく過ごせることになりました。レジュメの方にも書いたのですが、私その後すぐ旦那を置いてフランスに行ってしまったということで、旦那にもお前はひどいと、いまだ

にぶつぶつと言われることがあります。そして、2006年7月28日、出産しました。ということで、実は本日は7月28日でうちの息子の誕生日なんですが…（会場から拍手）ありがとうございます。うちの息子の誕生日でして、それまで実は研究中心の生活で、出産直前まで通常業務で、非常に研究に専念した毎日を送っていました。ところが、山口先生のところでも上手くまとめられていますが、出産すると本当に生活が激変します。今までは本当に研究が好きなので自分の起きている時間のほとんどを、研究に費やせたわけですが、子どもが産まれたことによって、そういうことができなくなってしまったのです。また、この7月28日になぜ産んだかというと、夏休みの時期を狙ってという出産でして。そうすれば、旦那も夏休みという理由で手伝いに来やすいだろうということがありました。また、仙台市に育児ヘルプサービスというものがあり、出産後6ヶ月以内に計10回、仙台市の方で半額出してくれて、ヘルプしてくれるというようなヘルパーさんの派遣サービスがありまして、これを使いました。2ヶ月後には産休明けで大学に戻りました。川内けやき保育園に入ることができて復帰できました。私は平成18年に産んだのですが、平成17年にできたばかりで、開園当初の定員というのもこんな定員でした。今はもうちょっと増えていて、利用者も初年度14名とか、まだできたばかりで人数も少なくて入りやすかった。竹内峯先生は、亡くなられたんですが、理学部の名誉教授で、この保育園の初代理事をされていた方です。川内けやき保育園は非常に良いのですけれども、やはり大きい保育園のメリットもあるだろうと考えて、仙台市の保育園に毎年申し込んでいたのですが、それは叶わずに、ずっとけやき保育園にいるということになりました。そして、研究を続けるにあたって、本当に非常に色々な支援を受けて、使えるものは全部使って研究と何とか両立しようと頑張っているところです。後で詳しくお話ししますが、全学でハードリング支援というものが2006年度から始まったので、ちょうどその支援が始まったタイミングで産めたので、それを利用しました。支援要員、研究支援者、技術職員さんを付けていただくことができました。それからシッター費の補助というものもあって、上限がありますが、それを利用させていただきました。仙台市のサポートのシッターだったり、民間のベビーシッター会社を利用したりしています。病気の時には、星陵地区の病院の中に、病後児保育室があるのですが、それも利用しています。これはいまだに利用していますが、6ヶ月以降ということなので、早く6ヶ月になってくれないかなと心待ちにしていたことを覚えています。実は産んで6ヶ月ぐらいはあまり病気しないというふうに赤ちゃんは言われているのですが、2ヶ月ですぐに預けたので、すぐに病気になったり、また頻繁に熱を出したり、休んだりと大変だった記憶があります。2006年度からずっとハードリング支援などの支援を受けて、その他にも所属している機械系のほうから、私はその時は准教授で研究室を持っていたのですが、特別に助教を配置していただいたりして、何とかまわしていたというような感じです。2013年度に子どもが小学校に入学して、楽になったかなと思ったのですが、ちょっとなかなか大変と感じています。両立についても、私の考えが非常に甘かったという話になるのですが、保育園に預けたらすぐに出産前のように復帰できる、研究がバリバリできると考えていました。しかしそれは非常に甘かった。子どもは泣くし、発熱するし、病気になるし、ということで、放っておいて仕事をすることはできないわけで、研究ができない自分に非常にイライ

ラしていました。しかし、熱を出すのは大体私が忙しくなって体がちょっときつくなりかけているかなと思っているタイミングで、私より彼が先に熱を出すので、ああもうしょうがないのだな、前と同じようなペースで仕事はできないのだなと、だいぶ悟ることができて、そのイライラは減少していきました。ただ、うちの息子本当に非常に元気なので、今は小学校に入っているのですが、学校からちょくちょく連絡が入るんです。誰々君にボールをぶつけて泣かせましたとか、色々と問題事項の連絡があったりで、いつになったら落ち着くのだろう、と、心配になったり不安になることがあります。子育てをしている友達同士でも話をして気を落ちつけようとするのですが、中学校のお子さんがいるような方達にも、そんなの小学校の内は無理、なかなか落ち着かないものよと言われて、まだまだここはやはり私の気持ちも落ち着くまでは、時間がかかるということで、日々精神鍛錬をしているのだなと思っています。そして両立についてと書きましたが、私も本当に研究者を辞めなくてはいけないかなと思ったことがありまして、それは、やはり子供の病気の時ですね。研究をやればやるほど子供は病気になっていくわけですね。そうすると、私は何をやっているんだろうという感じになって、ちょっときついなと思いました。ただやっぱり、国や大学がこういう支援を作っているということが本当に精神的な支えになったということと、頑張っている先輩方の姿というのもあったので、もうちょっと、もうちょっとと、頑張って行こうということで、何とか精一杯今も続けられているというように感じています。大学の支援について簡単にお話をさせていただきますが、東北大学は男女共同参画委員会というものが、結構早く立ち上がったのですけれども、なかなか女性比率とか上がらなくて苦労しながら、現在も色々とやっています。それで、平成13年に東北大学宣言がでて、先ほど出てきました川内けやき保育園というのも、男女共同参画委員会の両立支援ワーキンググループというものから作られています。星の子保育園というのは星陵地区ですが、後でまたちょっとお見せします。こういう男女共同参画委員会の支援や、その他に女性研究者育成支援推進室というのもできまして、杜の都女性研究者ハードリング支援事業、その後に杜の都ジャンプアップ事業というものが行われました。そのハードリング支援事業がどういう事業かということですが、女性科学者が少ない、女性研究者が少ないのはやっぱりハードルが、障壁があるからでしょうということで、ひとつ目の小さいハードルはロールモデルが不足しているということ。ふたつ目はやはり出産、育児のところが大きいハードルになってしまって、退職するということになります。東北大学ではそれらのハードルを乗り越えるため、あるいはハードルを低くしてあげるための事業を行ったということです。1番目が育児介護支援プログラムということで、研究補佐員や技術補佐員などの派遣や、ベビーシッター利用料補助等があります。2番目が環境整備プログラムで、トイレや休憩室などの整備、そして病後児保育室の拡充等も行っています。2番目はロールモデルの不足ということで、次世代支援プログラムとして、サイエンスエンジェル制度というものがあります。先ほどもすでに話しましたが、実験補助者等を長期的に派遣していただく制度や、ベビーシッターの利用料の補助がされるということを私自身利用しました。今日皆さんにお配りされています『TUMUG』というのが、現在の男女共同参画推進センターのニュースレターですが、そちらの方に現在どういう支援がされているかが書いてありまして、そのベースとなるよう

な支援が当時どのように行われていたのかを今話させていただいております。病後児保育室というのは実は皆が使えるところではなかったんですね。それまでは星陵地区の病院の方たちがメインとなって利用していたんですが、このハードリング支援事業があったことによって、学部に関係なく、学生さんも教職員も使えるような場所になったということです。そして、こちらサイエンスエンジェルになりますが、今日は時間の関係で省きます。川内けやき保育園。こんな形で先ほど25人といいましたが、今多分、この人数が正しいか分かりませんが、増築を少し行ったりしていて、定員が増えたりしていると思います。一時保育も、当初は10名としていたんですが、通常の利用をしたい方がどんどん増えてきて、一時保育を小さくして、通常の保育の方が多く入れるようなものに人数を変更しています。こちらが星の子保育園で、星陵地区のものですが、星陵地区のものは看護婦さんとかもいらっしゃるので、24時間体制で預けることができるようになっています。3番目の保育園をどうするかというところが重要になってきます。先ほどハードリングの事業は、実は男性教員にも現在はベビーシッター利用料を出せるようにもなっていて、男性女性を問わず、研究に集中できる時間を確保しようということが行われています。それで利用者についてのデータですが利用状況は、現在このようになっています。全学でも支援している他に、皆さんが所属しているような各部局でも、色々な支援が行われています。私がいる青葉山の工学系では、Association of Leading Women Researchers in Engineering、ALicEというものを作りまして、工学系7部局が連携して、支援を行っております。お話はかなり駆け足になりましたけれども、研究者夫婦がお互いに近くの職場で勤められると非常に良いのですが、なかなか難しいです。そのような状況では、家や職場等、周囲の方たちと互いに状況を理解しあうことが重要と考えます。これは、問題がない時は全く良いのですが、いざ子供が突然病気になった等、通常通りに勤務できないという時のために常々理解してもらっていることが、非常に重要だと思います。また、大学や地域等の支援は非常に重要で、大学ではどのような支援が必要かと、男女共同参画推進センターTUMUGの副センター長としても、常に気にかけながら過ごしていて、色々な方々とも情報共有をしています。それで、私のお話はこれで終わりですけれども、「愛と生命（いのち）の教養教育―恋の予感から子育てまで―」ということで、これまでの話には出ていないのですが、私が一番大事だと思うのは、実は良い人と出会うことと、良い人というのは、つまり自分と一緒に人生に向かっていけるという人を見極める力というのを、大学や社会で身に付けて行っていただけるというのが一番ではないかなと思っております。以上になります。

（拍手）

司会（座小田）：ありがとうございました。現在、子育ての真っ最中ということではございますけれども、率直にこれまでの子育てと研究者の両方の、両立をやってこられたその難しさと言いましょうか、経験の豊富さと言いましょうか、それを率直にご紹介していただきました。最後に結論というようなことをおっしゃいましたけれども、良い相手を見つけるのは大事だ。見極める力はもっと大事だと。これはどの場合でも言えるかと思いますけれども、今この授業を聞いている若い皆さんにとっても、ぜひともそういう点においては、変な人には引っかからないというのは大事なことだなというふうには思いますので、気を付けていただきたいと思います。今の研究者としての心構えみたい

なことも含めて、今後参考にしていただければよろしいでしょう。それでは続きまして、高度教養教育学生支援機構副機構長、それからキャリア支援センター長の羽田貴史先生にお話をお願いいたします。「学校で学ばなかったこと、子育てから教えられたこと」というちょっと教育とは関係なさそうな話ですけれども、よろしくお願いいたします。

講義
「学校で学ばなかったこと、子育てから教えられたこと」

羽田 貴史

羽田：皆さんこんにちは。羽田でございます。田中先生は2006年にお子さん出産されましたけれども、僕の長女は1986年に生まれました。ちょうど20年前ですね。20年たつとだいぶ保育環境が変わったなと思ったのが病後保育です。子どもは本当に保育園にやると病気になります。病気をもらってくるんです。それで鍛えられて、4歳ぐらいになると平気になるけれども、やっぱり親としてはすぐに出したい。出して、朝出すと、3時になったら熱が出て帰ってくるという繰り返しになる。病後保育っていうのは当時なかったんですけれども、ちゃんと制度化されているということに感慨深く思いました。僕は高等教育を研究しています。大学の管理運営や教養教育というのが今の研究テーマなんですけれども、子育てをずっとやってきて、共稼ぎで育て上げたということもあるので、前の職場で10年ぐらい前ですけれども、幼児教育の大学院で授業をしたことがあります。2時間ぐらいかな。私の子育てについて話をして家に帰ったら、女房が、お父さんはいつも自分が子育てしているっていばる、自慢する、私もちゃんとしているのよ、ちゃんとそこを言ってくれたのというふうなクレームがつきまして、今回こういう話をするということを決めた時には、レジュメを女房に見せまして、女房もこれならOKと検閲済みです。2時間やったものを15分でサマライズします。

結婚と家庭運営のルール

今から36年前、福島大学に日本教育史のポストで就職しました。研究が一段落ついたので、嫁さんでも見つけようかと探して、一番いいのを見つけた。田中先生の助言を先駆けて実践しました。妻は小学校教師でございます。結婚してすぐ親父が急性心不全で亡くなり、この時はすごく辛かったんですけれども、女房がいたんで、すごく救われました。家族というのは喜びを倍にし、苦しみを半減するというのは本当だと思うんですね。

小学校教師と大学教員、どっちが忙しいかと言ったら、絶対小学校教師です。共稼ぎを長く続けようと思ったので、家事の公平な分担、ルールを作りました。朝ご飯、晩ご飯、布団敷きまで全部一週間の分担表を作って、僕と女房で分担し、子どもが生まれるとそこに入れてなんてことをやりました。それから、家計の公平な分担も結婚した時のルールです。毎年4月に、我が家に必要な経費を全部計算して、それを給料比で分担するというのを34年間ずっと続けておりまして、公平にやろうというのが我が家のモットーでした。

妊娠と出産

従って、子どもを産む時も公平、平等と思いました。妊娠をした時から大変でした。小学校教師は切迫流産で流産するのが本当に多いんです。体育の指導で跳び箱をして、妊娠したのに気付かずに、腹痛になって、病院に行ってみたら妊娠していました、流産したという人もいます。女房も切迫流産になったんで、僕が1ヶ月以上車で送り迎えをしました。アクセルやブレーキ踏むのがよくないんですね。おなかにくるんで。その時、先輩の女性大学教員に言われました。当時は陣痛促進剤を使って無理矢理出産するのが多かったんです

よ。すごく産後の状態が悪いので、自然分娩の方がいいというので、そういう方針の病院に行きました。呼吸法とマッサージで痛みを和らげるんです。十月十日（とつきとおか）たって陣痛が来て、病院に行って痛い痛いと言うから、僕が背中をなでるんです。段々間隔が10分から7分､5分､3分、2分、1分になって出産するんだけれども、出産したのは朝の6時ぐらいかな。8時間ぐらい背中をさすり続けて、手が腫れました。だからもし、自然分娩をやる時、男性の方は絶対手袋を持って行くといい、これは絶対おすすめ。病院でも教えてくれなかった。手袋必要っていうことを。それから育休を取りました。産前産後の8週間の休みだと、母体に負担が大きいし、子育てをしっかりしたいというのもあり、女房は1年間育休を取りました。

育児書に頼らない

当時はスポック博士と松田道雄の育児書が標準的でしたので、両方買いました。そうすると、授乳は規則的って書かれている。決まった時間に飲ませるって。スポック博士のアメリカ流はそうなっている。ところが、そうすると眠る時に、赤ちゃんっておっぱい飲んで満足して寝たい。だけど時間が違うから飲ませない。そうすると泣きながら指吸いをして寝ちゃう。8ヶ月ぐらいで保育園に入れました。保育園も自然を大切にする保育園を探し、遠いので転居して保育園に通えるようにしました。私は内地研究に当たり、2週間おきに東京と福島を行ったり来たりしながらしていたんですけれども、その時の保母さん、4人お子さんを育てた保母さんが言いました。そんなのね、規則的なんていらないと。飲みたい時に飲ませてやればいいと。いつかはおっぱい離れますからと言われ、ものすごく気が楽になりました。それでもう、保育書って読まなくなった。読まなくても十分保育できる。

おむつは、布にしました。当時、紙おむつは不燃物で環境汚染になる。それから吸水性が良すぎる。赤ちゃんのおむつが取れるっていうのは、ぬれて気持ちが悪いから、その前におしっこに行くっていうのを覚えるんです。吸水性が良すぎると、おむつ離れが良くないというふうに聞いていたので、布おむつで毎日洗濯が僕の役割だった。だから、おむつが取れた時には本当に手の荒れがなくなって嬉しかったですね。そのせいか、ふたりとも、おむつからトレーニングパンツに切り替えて、全く1回も失敗しなかったですね。

親同士で語り合う

そこの保育所は保護者と保育者とが一緒に子育てをするという方針で、毎月夜6時過ぎから懇談会があり、毎月参加してすごい勉強になりました。子育ての知識は不十分だった。子ども二人ともアトピー性皮膚炎になってしまいました。アトピーってギリシャ語で原因が分からないっていう意味だったと確か思いましたけれども、当時は高タンパク質を取るとアトピーになるって、僕は知らなかった。なので、完全食品といわれる卵を食べさせすぎたんで、長女はアトピーになってしまった。下の子は食べさせなかったんですけれども、ちょっとそこら辺は知識が足りなかった。1989年には息子が産まれて、この時は、娘と僕も一緒に産室に入って応援をしました。

広島大学へ転勤

娘が小学校2年生になる時に広島大学に異動しました。妻も幸い広島県の小学校教員に受かったので、共稼ぎを継続することになりました。1994年の時です。広島大学の近くに家を購入したんですが、妻の配置先が遠いので、買った家をそのままに、熊野町にアパートを借りて住みました。ただ、東広島市は、保育園が16時40分までで、これでは子育てができないという事情もありまし

た。熊野町の生活は2年間だけでしたが、すごく楽しかった。時間があればもっと話したいんです。

息子が小学校に上がる時に東広島市に転居して、学童保育に通わせました。学童保育に最初行ったら、何か保護者が先生とけんかしているんですね。僕もおせっかいなもんだから、まあそんなこと言わないでと間に入ってなだめたら、1週間ぐらいたって、先生から呼び出しがかかりました。何かなと思って指定された集会所に行ったら、ふたり指導員の方が、実は私たち、保護者にずっといじめられていますという話でした。僕は女房が小学校の教員なので、教師が本当にひどいならともかく、基本的には一緒にやらないと良くならないので守る立場に立ったのですが、指導員の方から見ると、守ってくれる人が来たというので、僕に保護者会の会長になって欲しいというお願いでした。まあいいでしょうと2年間引き受けました。僕が会長になったら、クレームは一切なくなりました。当時は、子どもが増えている時期で、学童保育も広がるが、児童も増えるので小学校の校舎から出なければならず、柔道場を借り、さらにプレハブを作ることになりました。東広島市に学童保育施設が増えましたが、まだ学童保育の在り方も定まらないしお金もない。そこで、学童保育の会ができて、一緒に連携しながら学童保育のあり方を考えましょうということで、僕も参加して市役所とだいぶ交渉して、学童保育の建物に注文を付けたりとかいうこともやりました。

地域の中で子どもは育つ　地域を担うことも大切

大学では教育と研究に忙しく、管理運営でも広島大学の国立大学法人化の委員もやったりしましたけれど、家庭だけでなく地域の中で子どもは育つものですから、地域の仕事も引き受けました。地域子ども会の役員も2年、長女が高等学校に行ったらPTA役員を頼まれて、広報担当をやりました。東北大学に転勤する前の年は、町内会長もやるはめになりました。250世帯の町内会長って結構大変ですよ。1,000人いますからね。

東北大学への転勤

東北大学に単身赴任で転身して、息子が大学進学です。大学に行くとね、本当に年間250万円かかります。ふたりとも私立大学に進学したので、ふたりで2,200万です。僕も女房も金がなかったから国立大学に行ったんですけれども。一昨年に息子が就職して、親としてはそれこそ出産から就職まで全部面倒を見た。それで、女房も仕事を辞めて、共稼ぎが終わって、こちらに家を購入して合流しました。現在、僕の母が帯広に住み94歳、女房の両親が80歳で南相馬市に住んでいます。

人生における子育ての意味

子育ての時期って、自分自身も中年なり老年になっていく。それから、自分の親が年取って死んでいくという時期なんですね。子育ての時期は、親を看取る時期でもある。両方の世代の間に立って人生を考える、すごく大事な時期だと思います。また、家族って、一緒にいるだけじゃ家族じゃない。共稼ぎの場合、保育園にやるわけですから、何のために子育てをしているのかと思った時もあります。親としては仕事の面からは、保育園で長い時間保育して暮れ面倒を見てくれるとありがたい。しかし、うっかりすると僕らは一生懸命お金を稼いで、保育料を払っているだけになりかねない。これでは親と言えるのか。それで、家族の時間を大切にしようと、家族旅行を我が家のイベントにしました。福島大学に勤務していた時から、女房の実家の小高町（現南相馬市の南部、原発から15キロ圏内で現在は避難解除準備区域、両親は東広島市に4年間半避難。現在も実家は人が住めない）にはしょっちゅう帰省して、夏には、秋田の竿灯まつり、青森のねぷたまつりにも親戚一

同で家族旅行。私の実家の帯広にも帰省し、せっかく北海道まで行くのだから、札幌、摩周湖、厚岸、霧多布、根室、網走、知床、旭川、小樽にも足を延ばしました。それから広島大学に移動してからは、ハウステンボス、道後温泉、米子温泉、江の島、箱根などです。長女の小学校卒業記念ではシンガポール、高校卒業では台湾旅行も楽しかった。

人生における子育ての意味

子育ての楽しいことはたくさんあります。ひとつは、出産した時は、本当に赤ちゃんは手のひらに乗るぐらいですね。両手に乗るくらい。これが、だんだん成長しておむつが取れて、歩いて言葉をしゃべり、本を読み生意気なことを言い、走り回って怪我をしたりしながら、成長していくという、これはかなり生き物を育てれば、みんなそうなんですけれども、生命の持つ不思議さですよね。人間は生きている、生命力を持っているということを言葉じゃなくてわが子を通して実感できる。そして、そういう人間を育てるのは僕自身の力、女房の力、社会の力。人間を育てるのは人間だけだという、自分の持っている可能性というか、能力を確信できる。これが大きい。

それから、子どもは小さい時に、色々とむずかったり、色々なことを言ってきますね。自分自身が3歳、4歳の時がありますから、自分の小さい時を思い出して、その時僕は確かにこんなことをぐずっていたんだなと。その時言葉がまだないから、自分自身は分からないんだよね。大人になって、自分の子どもがぐずっていたりを見ていると、自分自身の昔の再発見です。大人の目でもういっぺん、自分ってこうだったんだなと見える。

さらに、親の気持ちって子どもの時は分からないけれども、親になってみれば、あの時親父はこう思っていたんだなとかいうことが分かる。自分自身の人生があるわけですから、言ってしまえば子育てて人生を三度味わうということになる。これはなかなか簡単に15分で説明できない色々な深いものがあるというふうに私は思っています。

子どもを通して地域社会につながる

それから子どもを通して社会に関われたことも大事なことでした。保育園では保護者の会を毎月いっぺんやっていまして、色々なお話をしましたが、親父の会もできました。酒飲んでいるだけなんですけれども、その中で人との付き合いが広がる。これは昔同僚と話したことがあるんですけれども、子どもがいなかったら僕たちって大学で仕事ばっかりして社会につながらないねと。確かに、子どもがいることで、小中高、保育園を含めて色々な地域の人とつながるんですね。よく大学教員は世間知らずと言われるけれども、僕に言わせるといや、大学教員以外にも、世間知らずの人はたくさんいる。自分の業界、企業のことは知っているけれども世間を知らない。これは大学教員に限らない。子どもを媒介にして、地域社会につながりを持てるという点では、とても大きな意味があります。

子育てに大切な知識と価値判断はどこで学ぶか

大事なことは、人を育てるには、価値判断がすごく大切になりますね。子どもを叱るにしても。この価値判断の力って、実はどこから来るかっていうふうに考えたらなかなか難しいものがあります。振り返ってみると、子育てをやってきて、その時に役に立った知識として、高校、大学で学んだものは、僕の場合は何一つありません。人間が育つのに大事な知識は学校教育にはなかったなというのが僕の実感です。例えば、近年は学習障害が大きな問題になっています。人間がものを見る力っていうのは、脳の中に色々なものが組み合わさって動くんですね。右方向に回る、左方向に回るとか、斜めとか、そういうのを見る細胞があって、それがネットワークになって、色々なものを

認識する。ところが、何かの理由でうまくつながらないと、斜め方向のものが見えないという子どもがいる。これはテストが簡単で、市販のものがあります。ドットでもって、ふってあるものがあって、斜めに線を引けるかって引かせてみると引けない。小学校に上がる前にトレーニングをすれば、細胞同士のネットワークができて、読めるようになる。こういうことは学校では教わらなかったし、先ほどのアトピーのこともそうです。結婚とは何か、家庭とは何か、どうすればうまく家庭が運営できるか、人間が生きて結婚し、子育てをすることに必要なものは大学や高校にはない。

人間育成を目指さない日本の大学

僕は学校教育って、人間が育つのには非常に中途半端だなと思います。家庭科の中とか、大学の教養教育の中には一部そういう要素はありますけれども、大学全体は専門の知識を身につけさせようとするけれど、立派な親や人間になることを目指さない。しかし、欧米の大学はそれが中核に座っている。それはなぜかと考えたら、日本の大学とヨーロッパの大学ってもともと目的が違うんですね。欧米の大学は例えばパリ大学であれば聖職者を養成するためにある。聖職者って人間のモデルですから、どうやったらいい人間になるかっていうことが色々な形でもって織り込まれている。イギリスの場合は、これは19世紀後半からは、ジェントリの養成が目的になってくる。アメリカは市民の育成。これは要するに、知識だけじゃなくて立派な人間を育てることである。これが織り込まれているので、価値判断が重視されます。

だけど日本の大学、後進国型の日本の大学というのは、専門知識を持った官僚や学者を育成するということを目的に設立されたんですね。だから、実は極端に言えば、立派な人間になるということは大学の目的ではないというのが、日本の国立大学の特徴になっています。そういう点では、明治期に東京大学が嫌で、同志社に移った学生がいるんですね。東大出身の先生方すいません。その学生（山崎為徳）が明治10年代の東大を批判しています。「この学校においては知を基にし、徳を末にし、知を尊み徳を卑しむなり」。徳よりも、知識だけを中心にしているという批判です。戦後、大学教育には、確かに人間形成を育成するということが盛り込まれたけれども、目的はどうしても専門の知識を身に付けることが目標になりがちである。

人間の成長に必要な知識体系と学問の体系は違う

ところが、人間の成長に必要な知識の体系と学問の体系とは同じではないです。例えば人間の発達や家族とか生活に関する知識は、理学部や医学部では生命科学の中にある。心がどう発達するかは心理学でやっている。家族がどうあるかというのは社会学でやっている。だから、全部バラバラになって、学問単位で分散されているから、人間個人が成長して大人になって、結婚して子育てをして、親を看取るとか、どの専攻分野でもそれは修得できないんですね。

例えば今、僕は親の話も入れ込みましたけれども、子育ての話は同時に親を看取るということも僕らの課題になってくる。どういうふうな形で親と関わっているかというのは、これは学問だけではなくて、宗教の問題も含みますね。そういうところが、日本の大学の今の大きな一番課題だろうと思います。幸いなことに僕は高等教育を研究しているので、そういう学問の在り方ではいけないよということも研究から出てくるので、多少はやれているかと思うんですけれども。従って、教養教育院の立派な先輩の先生方がいらっしゃる中で恐縮ですが、先生方は専門の学問が身に付きながら立派な人間だと思いますけれども、立派な専門の学問が身に付いても、立派な人間だと限りませ

んよ。これは学生の皆さんへの警告ですね。大学に入ったら専門をやりたいとおっしゃる方もいる。でもその道を走って行って、ドクターまで行って終わっても、それが必ずしも立派な人間になるとは限らない。どうしましょうということですね。これはもし、討論の中でやれたらありがたいことです。どうも、ちょっと時間が過ぎて申し訳ございません。以上で話を終わります。

（拍手）

司会（座小田）：どうもありがとうございました。学生の皆さんには、まだ先の話だろうとは思いますけれども、私も実は子育てが終わって、今孫育ての方に移ってきているので、羽田先生のお話を色々と参考になるかなというふうに思っておりますが、専門を修めたからと言って、立派な人間になれるとは限らない、これは私も自分自身で実感しているところですけれども、皆さん方にもこれから、子育てを通して立派な人間になっていくという、ひとつの方向性を羽田先生から示していただいたと受け止めてもらえればいいのではないかと思います。それでは最後になりますが、山口先生の方から、「愛と生命：生物学および社会的帰結」というちょっと深刻な話を。

講義「愛と生命：生物学および社会的帰結」

山口 隆美

山口：教養教育院の、自分ではリサイクル教授と呼んでいるんですけれども、総長特命教授をやらせていただいている山口です［スライド1］。どこかに書いておきましたけれども、工学研究科が私の最後の現役の仕事場で、そのなかでは、長年、機械科におりました。機械科にはいたんですけれども、私は、もとは医者の出です。医者は若い時に止めまして、だんだんと、基礎医学の研究をしているうちに機械工学の教員になってしまったわけです。おふたりの先生方から、とても真面目なお話をいただいたのですが、どうも、私は真面目な話を聞くと、直ちに真面目ではない話をしたくなるという悪い癖があります。そういうわけで、あまり真面目ではないようには聞こえない話をさせて頂きます。只今、司会の座小田先生もおっしゃいましたけれども、私も子育てはとっくの昔に終わりまして、うまくいったかどうか知らないんですが、40いくつになった娘がいます。その娘、つまり、孫は高校生になって、諸君と2-3歳しか違わないという状況です。そういう経験を振り返ってみまして、どうだったかなということをちょっと考えてみたいと思います。ところで、先ほどお話し頂いた田中先生も羽田先生も、一番多分皆さんが聞きたいことを言わなかったように思います。それは、どうして結婚したのか。結婚して良かったのか。それとも結婚しない方が良かったのか。もちろん、それぞれ、旦那さんや奥さんがおられますから、口が裂けても、しない方が良かったとは言えないから、そういうふうには言わないという事情はあります。しかし、私は、どうやったら結婚できるのか、あるいは結婚してしまうのかという話をちょっとしようと思っています。ま、すでに決まったお付き合いのある人が居る方々には余計なお世話という話になります。私は機械系といっても生物学がベースなので、まず、生物学からお話をはじめます。［スライド2］レジュメにも書きましたけれども、我々は、とにかく、両性生殖する生き物なんですね。地球上の生き物の大部分は両性生殖をするのですが、とにかく、雄と雌、あるいは、ヒトで言えば、男と女は、何らかの形で生物学的に関係することに決まっているわけです。いい人が見つかるかなというお話がありましたけれども、とにかく、良いか悪いか

知らないけれども、私に言わせれば、生物学的には、人は恋に落ちるものだというのが、まず、大前提にあるわけです。何か、レジュメなどにも、いかにもそれらしく書いてありますけれども、私も恋をしたのは50年前になるわけです。50年前はさすがに大昔で、具体的なところは覚えてないけれども、言えることは、若い人は、フェロモンが出ているんですよ。男性諸君は女性の匂いを嗅いで、女性諸君は男性の匂いを嗅いで、ふらふらっとなるものなのです。ならなきゃ嘘なわけです。それで、そうなったらどうするかという話をこれからしようと思います。つまり、どういう理由があろうと、人は恋することになっている。俺は、そういうものはしないという人もいて、それはそれでいいんですけれども、しかし、大概は、そういうことになっていて、それをどういうふうに決着を付けるかっていうのが、言ってみれば、私が今日お話をすることの全てです。どうして男と女が恋をするかっていうのは、有名なこの漫画がありまして[スライド3]。この原典のプラトンの『饗宴』っていう本を高校の時に読んで、私は大いに感心したわけです。昔の人間は球だったとプラトン（饗宴のなかではアリストパネス）は言う。本来球だった人を、神様が、半分にぽんと断ち切ったので、どうしてもくっつきたいんだというのです。でも、これは、話がおかしいんだよね。両側に顔を向いたのをぱちんと切ったらば、どう考えたってくっつかないじゃない。背中合わせにするのかという話になるんだけれども、それもここに書いている、引用を忘れましたけれども、引用するインターネット上の動画のページを見ると、それがちゃんと首をくるっとまわして、くっつくようになっている。それはさておき、このスライドの上には、キューピッドの絵が描いてあります。皆さんも知っているように、キューピッドは恋の神様で、いつも目隠しをしている。恋は盲目なんだと言うわけです。もうひとつの別な絵は、キューピッドが本を踏んづけている。学問なんかは、恋の前にはなんぼのもんでもないというふうに言われていて、昔からそうなっているのです。ここに書いてある言葉は、仏教の中でも、いわゆる密教、ご宗旨で言えば真言宗っていうのでは、毎日お寺で読んでいるお経なんです。このお経は、般若理趣経って言うんだけれども、何が書いてあるかというと、「男女交合の妙なる恍惚は、清浄なる菩薩の境地である。」って書いてある。菩薩になるというのは悟るということですね。悟るためには、やっぱり男女交合、つまり、まぐわう必要がある。つまり、セックスすると、全てに自由、全ての主になって、天にも登る心持ちになって悟ることができると書いてある。この中にも、もちろん、日常的にセックスしている諸君もいるかもしれません。ま、今のところは、大概はそうじゃないだろうと思うが、人は必ずセックスしたくなる。これが、「男女の愛の清浄なる菩薩の境地」で、これはもうとにかく、人間というのは、そういうふうにできているんだとしか言いようがない。私も、18歳の時に大学に入ってきまして、実を言うと18歳の時に1回振られて、20歳の時に、まだ学部の学生だった時に結婚して、子どもが21歳の時にできました。その当時は、大学に保育所なんてもちろんなかったので、しょうがないから、抱っこして、近くのベビーホームっていうのに連れて行きながら育てて、ふたりで卒業して、その子が40いくつになったわけです。

何しろ、そもそも、我がヤマトの国は、男女のまぐわいでできた国なんですね。皆さん知っているように、古事記にちゃんとそう書いてある［スライド4］。イザナミノミコトが「私の身体はむくむくと生まれたけれども、足りないところが

残ってしまったの」と言ったらば、イザナギノミコトは自分には「成り余れる処あり」って言って、成り余れる処を成り足らざるところに差し込んだら、日本ができちゃった。そういうものなんですね。それをどういう形に持っていくかというのが、つまり人生を選ぶということだというふうに私は思うんです。なんせ、私、元が医者なもんですから、こういうとんでもない絵を公衆の面前に持ってきますけれども［スライド5］、成り余っているものがありますね。普通は、だらんとぶら下がっているけれども、あいつがこうビンと立つわけだ。そうすると、成り足らざるところにそれをどうしても迎えたいと。こういう欲望が生まれると。これが人類の最も基本的な欲求であるというふうに私は思っているわけです。その結果として、田中先生と羽田先生がお話になった、ああいう人生訓というものが出てくるのだと思うわけです。そういうわけで、人はセックスしたい。したくなるはずだと、私は、単純明快に信じているのです。

そこで、セックスしたくなった時にどうするかというので、［スライド6］いくつかの考えておかないといけない事情があるわけです。日本国憲法には第24条っていうのがあって、それには、結婚は両性の合意に基くと書いてあります。これは結婚することは、人権の基本中の基本であるという意味だと思う。もちろん今LGBTっていう人たちも少なからずおられるので、必ずしも両性っていうのを、違う性の結合に限ると考えないで、同性も両性に含むと考えて、そういう関係の存在も認めれば、世の中で横行する、つまらん議論はいらない。

さて、そのような関係の基礎にある愛というのは何なのかという問題がある。余談になるが、この間、iPhoneのSiriにね、愛って何だって聞いたんですよ。聞いてみたことある人いますか？今度聞いてみてください。そうするとね、その答えに、私は大いに感激した。「愛とは、理解の別名です」って言うんですよ。なるほどね、理解するっていうことは愛することなんだなあと思った。理解にも、色々理解があるわけです。あからさまに言っちゃうと、愛し合っているふたりがセックスをするというのは、お互いにお互いをまさぐりあって、こうするといい、ああするといいというのをお互いに共同で見出すと。こういうことを愛というのだと思うわけです。だから、相手が嫌がることをしちゃ駄目なのね。強制わいせつ罪とか、強姦罪とかってちゃんとあるのは、相手が嫌がることをしちゃ駄目で、やっぱりお互いにいいことをしなくちゃいけない。こういうふうに法律にも書いてあるし、我々が信じている道徳というのも、そういうふうに言っているわけです。

その結果どういうことが起こるかというと［スライド7］、田中先生のケースでも、羽田先生のケースでも妊娠したわけです。これは、セックスしたら妊娠するのは当たり前なのです。健康な男女がセックスすると、85％が妊娠するんです。これは生物学的事実です。これについては、次にお話しますが、あとそのもうひとつの帰結として注意しなくてはいけないのは、いわゆる性感染症っていうのが起こる。これもパートナーを一生懸命取っかえひっかえしない限りは、あまりならないということになっているけれども、一応、生物学的にというか医学的には注意して仲良くするようにしなくてはいけない。

しかし、まあ若いうちには、妊娠するのを、とりあえずは先延ばしにしたいと思うことも多いかも知れない。［スライド8］その場合は、何らかの形で避妊をしなくてはいけない。避妊が、これがまた難しい。難しいっていうのは、さっき言ったように何もしないでセックスしたら85％一発

で妊娠しますから、それでは困るので、色々な方法があるんだけれども、これはある生理学の教科書に書いてあったものなんだけれども、どの方法も、100％っていうことはないんだ。絶対にね。なんせ、人間っていうものは妊娠するようになっているから、子どもを作るようになっているので、どの避妊法も究極的には失敗する運命にある。一応ここに絵を描いておきましたけれども、産婦人科の医者が言うには、低用量のピルが一番安全かつ確実だと。これでも0.3％失敗するけどね。この頃は、我々が若い時と違って、コンビニにもコンドーム売っているから、とても簡単です。妊娠したくなかったら、コンドームぐらい買ってね、ちゃんと避妊しなきゃ駄目だということになります。それでも失敗率はすごく高いけど、何もしないと一発で85％妊娠しますから、今妊娠したくないというカップルはそのことを、気を付けなくてはいけないわけです。

東北大にもジェンダーの講義をしている先生がいらして、そこでどういう話をするか今度いっぺん聞きに行ってみたいと思っているんだけれども、九大には、婚学っていう、結婚学というのを教えていらっしゃる先生がいて、その本が何冊も出ています［スライド9］。その中で「結婚して得るもの」と、それから「結婚して失うもの」というのをリストにあげています。結婚して得るのは子ども、孫、安心、生きる意味、エトセトラときて、もちろん、失うものもあります。田中先生がおっしゃったように、子どもはとにかく年中熱を出す。子どもというのは熱を出してピーピー言うのが商売みたいなものだからしょうがない。でもその中で、やはり、いいことっていうものもいっぱいある。まあ、とりあえず初めは妊娠しない方向で楽しく暮らそうという話になるんだけれども、妊娠したらば、私は結婚することを勧めたい。

結婚することには、実質的な利益がある。［スライド10］どういう利益があるかというと、結婚している学生は、ほぼ確実に授業料が全額免除になる。これは大きいよ、最近、大学の授業料すごく高いからね。僕らの頃は1年12,000円だったけど、今60万円でしょう。ふたりして、授業料全免になると年間120万円のお得です。これは、十分子どもを育てられる費用をまかなえちゃう。しかも子どもを産んで育てるのは早ければ早いほどいいと思う。先ほど田中先生が言ったように、今は、学内にすごく立派な保育所があります。さらに増設する予定もあります。私が子育てをした40年前にはそういうものは想像できなかった。東北大では、男女共同参画の先生方が一生懸命やっておられるし、それからその他にも色々な補助、援助がある。それに、大学は、多分、一般社会よりは、マタハラとか、コソダテハラとか少ないと思う。私たちのケースでは、私の場合残念ながら60過ぎてから離婚しちゃったんだけれども、子育てした時には、妻の指導教員の先生が、全部実験やってくれた。子育てがありますって言って、帰っちゃったりしたんだけれども、ちゃんと実験の後片付けまでやってもらって、卒論も下手すると大部分書いてくれたりして、本当にみんな優しかった。それから、大企業で管理職をして就職の選考をしてた方に聞きますと、子どもがいたからといって、就職が不利になるってことは絶対ないそうです。きちんと君たちが勉強して、ちゃんとした学生になっておったならば、そのことで就職が不利になったりすることはない。むしろ、就職しちゃってから子どもができちゃうと、やっぱり育児の問題で辞めたりしなくてはいけないということが、特に女性の場合にあり得るから、ぜひ、学生のうちに子どもを産んで育てた方がいいと思う。

大体昔から、こういうものは、やってみると何

とかなるということになっている。もちろんそれは色々な問題はあるんだけれども、これはやっぱり人生のひとつのポイントですよ。どうせ通らなきゃいけないんだったら、さっさとやってしまった方がいいというふうに考えるべきだと思う。[スライド 11] 脅かすわけではないけれども、高齢出産っていうのは結構大変で、若い内には何でもないことが、先に延ばすと、医学的に言えばリスクが高くなるわけです。別にそれは、それでもいい、大部分は大丈夫ということも言えないことはないんだけれども、やっぱり、なんせ 18 歳、19 歳の若い時の方が、健康で、かつ体力もあるわけですから、なるべく若いうちに産んだ方が絶対にいいと思います。

いい人を見つけなくちゃいけないって田中先生がおっしゃいました。でもね、とりわけ、女性諸君に言っておくけれども、いい人は見つけるんじゃないの。あれは育てるの。捕まえて、きちんと育てると、ちゃんとそうなるの。だから、そういうものは根性の問題なんですよ。[スライド 12] 京大には、学生のパパ・ママのサークルっていうのがあって、京大学生パパ、学生ママサークル、めんどり学部という名前です、これのホームページを見ると、みんな計画的に子どもを産んでいるようです。大学でいわゆるできちゃった婚の場合もあるけど、前向きにとらえている。学生って言っても学部の学生とは限らないけれども、学生のうちに計画的に出産しちゃうっていうのも人生の非常に正しい選択のひとつだと私は思うわけです。その理由の最大のものは、何て言ったって、子どもはかわいいんです。子どもは、すぐビービー泣きます。腹減ったらビービー言いますけれども、やっぱりかわいい。それをかわいいと思うから、自分も生きていて良かったと思うし、それから親に育ててもらってありがたかったと本当に思う。京大のそのサークルの記事に、地球の未来のために、子どもの未来のために、地球に優しくしようと思うようになったと書いてありますけれども、本当にそうだと思うんです。

グダグダしゃべって、時間があまりなくなったから、まとめなければならないので、一言言うと、「見る前に跳べ」って昔は言ったんです。出会いがないとか、そういうことをグダグダ文句言ったらあかんの。その辺にいっぱい出会いはある筈なんですよ。学生諸君、今日も、周りを見てご覧なさい。昨今の大学は、僕らの学生の頃と全然違うよ。僕らが学生だった頃は、工学部には女子学生が一人しかいなかったんだ。2 千何百人の学生のうちにですよ。今、工学部には、女性の教授までちゃんとおられる。男女同数はまだ相当先だが、女性の比率はどんどん上がっている。だからというわけでもないが、男性諸君、「見る前に跳べ」。まず頑張って、告ってみる。駄目だったらまた巻き直す。振られたら、どっかその辺にセンチメンタルジャーニーにでも行ってちょっと気分を直して、またやり直す。こういう積極性をぜひ獲得していただきたいというふうに思います。私も、もうすでに 40 年前の思い出を引きずっているだけのおじいさんになってしまったけれど、学生諸君に、恋をすることを心から勧めるという話をして、私の話にします。どうもありがとうございました。

（拍手）

司会（座小田）：どうもありがとうございました。時間がちょっとオーバーしておりますので、10 分ほど休憩というふうに予定を取っておりましたが、5 分ぐらいよろしいでしょうか。40 分から討論を開始したいと思います。それから、質問・コメントシートを回収しますので、提出してください。よろしくお願いします。

愛と生命：
生物学および社会的帰結

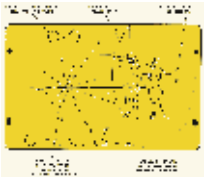
総長特命教授
（医工学研究科特任教授）
山口隆美

1

[スライド 1]

恋の予感の生物学

- 両性生殖
- ホルモンとフェロモン
- 性的成熟の生理学的機構と男女



パイオニア10号、11号のメッセージ

2

[スライド 2]

恋の成就とSEX

- Plato: Symposia(饗宴)
- 理趣経
  1.男女交合の妙なる恍惚は、清浄なる菩薩の境地である。
  2.欲望が矢の飛ぶように速く激しく働くのも、清浄なる菩薩の境地である。
  3.男女の触れ合いも、清浄なる菩薩の境地である。
  4.異性を愛し、かたく抱き合うのも、清浄なる菩薩の境地である。
  5.男女が抱き合って満足し、すべてに自由、すべての主、天にも登るような心持ちになるのも、清浄なる菩薩の境地である。
  6.欲心を持って異性を見ることも、清浄なる菩薩の境地である。
  7.男女交合して、悦なる快感を味わうことも、清浄なる菩薩の境地である。
  8.男女の愛も、清浄なる菩薩の境地である。
  …

3

[スライド 3]

古事記

イザナミは「私の身体はむくむくと生まれたけれど、でも足りないところが残ってしまったの」と答えた。
それを聞いて、イザナキが言うには―「俺の身体もむくむくと生まれて、生まれ過ぎて余ったところが一箇所ある。きみの足りないところに俺の余ったところを差し込んで、国を生むというのはどうだろう」と言うと、
イザナミは、「それはよい考えね」と答えた。

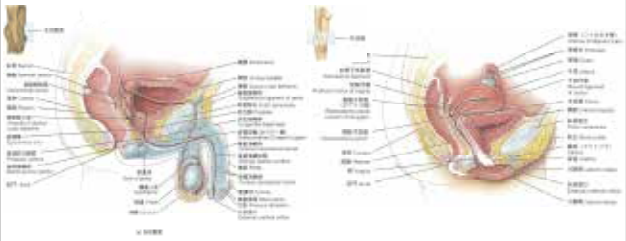
- 池澤夏樹訳　池澤夏樹＝個人編集　日本文学全集　第1巻

http://blog.livedoor.jp/torajiro0421/archives/52389928.html

4

[スライド 4]

ヒトの生殖器と周辺構造



♂　　♀

5

[スライド 5]

SEX を巡るいろいろな事情

- 法律
  - 日本国憲法24条
  - 刑法 176条（強制わいせつ罪）、177条（強姦罪）
  - 民法731条（婚姻の年齢制限）
  - 優生保護法
- “道徳”
- 性的多様性：LGBT

[スライド 6]

恋の成就の生物学的帰結

- 妊娠
- 性感染症(STD- Sexually Transmitted Diseases)
  - 梅毒
  - 淋病
  - クラミジア感染症
  - B型肝炎、C型肝炎
  - エイズ(HIV)
  - …

7

[スライド 7]

避妊法の失敗率

方法	失敗率*（%） 完全に行使†	通常行使
完全な禁欲	0	0
外科的不妊手術		
精管結紮術	0.10	0.15
卵管結紮術	0.5	0.5
ホルモン療法		
経口避妊薬		
混合ピル	0.3	1～2
Seasonale®	0.3	1～2
ミニピル	0.5	2
非経口避妊薬		
皮膚パッチ	0.3	1～2
膣リング	0.1	1～2
緊急避妊	25	28
ホルモン注射	0.3	1～2
子宮内リング（copper T 380 A®）	0.6	0.8
障壁避妊（単独使用）		
殺精法		
（男性の）コンドーム	2	15
膣パウチ	5	21
ペッサリー（殺精子剤と併用）	6	18
子宮頸部ペッサリー（殺精子剤と併用）	9	16
計画的禁欲		
リズム法	9	25
体温法	2	20
無避妊	85	85

[スライド 8]

結婚することの得失

結婚して得るもの

子ども、孫、安心、生きる意味、幸せ、楽しみ、支え、お金、責任、役割、社会的信頼、にぎやかさ、濃密な時間、信頼できる相手、「おかえり」、「いってらっしゃい」という言葉、夕飯、手料理、家事の分担、病気のときの看病、老後、一軒家、戸籍、国籍、親権、名字、結婚式、結婚指輪、ご祝儀、死んだときに覚えていてくれる人、お墓、親の喜ぶ顔、ママ友、家族旅行、人妻という称号、義理のお父さん・お母さん、安定的な性欲解消のパートナー、落ち着いた生活、等々

結婚して失うもの

お金、一人の時間、自分の生活リズム、自由、恋人、恋愛、キャバクラ、ホスト、趣味、遊び、夜遊び、飲み会、友達の付き合い、異性の友人、名字、初婚、戸籍、テレビの自由度、おしゃれ、等々

大学で大人気の先生が語る＜恋愛＞と＜結婚＞の人間学　佐藤剛史（著）岩波ジュニア新書

9

[スライド 9]

学生時代に妊娠・出産する

- 利点(Pros)
  - 結婚(入籍)していると、ほぼ確実に授業料全額免除になる。
  - 学内に保育所がある（学生OK)。
  - マタハラ、コソダテハラが（多分、少)ない。
  - 就職してから出産・育児するよりはるかに社会的に楽（と、言われている）
- 欠点(Cons)
  - 遊び足りなくなるかも知れない。

10

[スライド 10]

高齢出産のリスク

- 流産
  - 全妊娠　10～15%
    - 35~39歳　2倍
    - 40歳以上　2.4倍
- 妊娠高血圧(妊娠中毒症）20代の1.8倍
- ダウン症：母親の年齢に依存
  - 30歳：1/900
  - 40歳：9/1000（ラーセン人体発生学）

11

[スライド 11]

学生パパ・学生ママの実態

- 在学中にいわゆる"出来ちゃった婚”
- 卒業後結婚・出産を経験して、再び学ぼうと学校に入った
- 卒業後の出産・育児が年齢的社会的に難しいので
  医学部や大学院の博士課程在籍中に、計画的に出産した
- パートナーが働いている

共通するのは「子供が可愛い！」ということでしょうか。

- 子供を産んで良かった
- 使える時間が限られる分、前よりも研究に集中するようになった
- 一日のメリハリがついた
- 親のありがたみが分かった
- 子供の未来のために地球に優しくしよう！と思うようになった…？！

京大学生パパ・学生ママサークル★めんどり学部
http://mendorigakubu.blog102.fc2.com/

12

[スライド 12]

司会（座小田）：それでは、討論に入りたいと思います。今、質問・コメントのペーパーを選り分けながら、どれに対して答えればいいかということをお三方の先生方に見ていただいております。その前に、今日は講義に参加しておりませんけれども、パネリストとして壇に登っておられます教養教育院総長特命教授の先生方から何かお話、コメント等々がございましたら、付け足していただければと思いますが、いかがでしょうか。特にないですか。では、私がちょっと先に言わせていただきますと、最後の山口先生が「見る前に跳べ」とおっしゃっていましたけれども、確かにそういうフレーズも、私が学生の時にもあって、寺山修司でしたか、私たちもまずやってみようとか、そういう心持ちにならないわけではありませんでしたが。私、それから野家先生は文学研究科で哲学を研究して来たわけですけれども、哲学っていうのは、「跳ぶ前に見ろ」というんですね。見ることから始めろというのが哲学の基本、theōria の基本だというふうに言われておりまして、そんなことをやっていると跳ぶこともできないんじゃないかという話になるかもしれませんけれども、十分考える必要があるだろうということは、当然あろうかと思います。跳ぶにしても、何らかの形での思案、思考というのが必要ではないかなという気がしますので、その辺のところはあまりそそのかされて、逸脱しないような、軽々に跳ばない方がいいかと思いますが。踏み外して、奈落に落ちるっていうことのないわけではありませんので、その辺のところを、十分気を付けていただければと思います。いかがでしょうか。大体質問事項が受け止められることができるような質問がございましたでしょうか。では、羽田先生から何か。

討論「愛と生命（いのち）の教養教育 ―恋の予感から子育てまで―」

羽田：色々な質問をいただいてありがとうございました。全部じゃなくて、ふたつかみっつぐらいでいいんですよね。まず、

> **A：子育てに関して何を伝えたらいいのか。価値判断が必要とおっしゃっていたが、先生ご自身の子育ての際に何を大事にしたか。**

という、こういう質問。これはすごく大事、ちょっと言えなかったんだけれども、僕の子ども達が高校進学をする時は、ふたつ選択肢があって、地域の県立高校でそれなりに進学力のある高校。国立大学に 100 人ぐらい送るところ。それから、すぐ近くで私立のもう少し偏差値的に高いふたつあって、両方受けさせたんだけれども、僕は県立高校に行けと言ったんですね。それはなぜかと言ったら、進学だけで、少しでも点数をあげていい大学に入るということだけに、高校生活を送ってほしくない。県立の方は色々な子どもがいる。良くない子どももいるけれども、社会ってそんなもんなんですよね。その中で勉強だけで、高校生活を過ごしたり、それを大事と思うことを考える人間になってほしくない。僕が最初福島大学にいた時に、現場の先生方の集まりでこんな話が出ました。ある小学校の先生が、6 年生の子どもに宿題を出した。宿題をやってこない女の子がひとりいる。先生が呼び出して聞いてみると、その家が自営業で、うちに帰ったらお手伝い、茶碗洗いとか小さい子どもの面倒を見るというのがあるんですね。忙しくて宿題できないと言ったら、その先生はどう反応したかというと、親を呼び出して、宿題させないとはけしからん、子どもに手伝いをさせないでくださいというふうに言ったと聞きました。何でお手伝いをして、家を支えている子どもを褒めて

あげないのでしょうか。宿題を出さなくても済むように、先生がきちんと学校でもって補講してやるとか、色々とカバーしてやればいいのに、学校の中で勉強だけしていることが立派と思っていることがとてもけしからん。というのが、これはその研究会の場でも話になったところなんです。だから、そういう点で、子ども達には絶えず学校の成績だけを大事にするなということは、大事にしていました。それが、一番子どもを見る上で大事だというふうに思っております。あともうひとつ、具体的に大事な質問は、

B：自分は家計の管理は全部嫁さんに頼みたいと思うが、そういうのは公平ではないのか。

と。平等に関するもの。今、女房は専業主婦になったので、家計は全部渡して、私はお小遣いを貰っております。時々、飲みに行くのでもう少し、とお願いをしていただいて。共稼ぎだから平等である。どちらか働いて家計は奥さんということもあるでしょう。大事なのは、お互いに助け合う、普通の人間関係ということですよね。夫であり、僕が年上だけれども、男だから女だからとか、夫だからとかいうことは関係なく、フラットに付き合える。弱みも強みも一緒に見せるというのが、そういう平等の中から出てきた人間関係ではないかと夫婦の人間関係も作れるという点では、僕は良かったなと思っています。

司会（座小田）：それじゃあ、田中先生お願いします。

田中：たくさん質問、コメントいただきありがとうございます。じゃあ、私の。

C：自分にとって良い人だと感じる、見極めるコツは何かあるのでしょうか？

というのがあったんですけれども、私の中でポイントは、笑いのツボが一緒というところですかね。そこが結構、嬉しいとかそういうツボが一緒だと、やっぱりいいかなと、非常に思います。お互い一緒に楽しく居れますし、そこが重要かなと。夫のことをについて、そのようなことを考えて選んだわけではなかったのですが、今思えばそういうところかなと思います。あとは、さっき言った自分の中で何が譲れないかというところがあると思いますが、そこを妥協しあえる方。育てればいいというふうに山口先生に言われたんですけれども、私も実は長いこと付き合って育てようとしたことが何回かあったんですけれども、それはちょっとなかなか難しく、なかなか育たない。肝心なところは頑固だとも言われて、私の方がやっぱり研究者として東北大から離れたくないとか、そういう話とかになると、これは駄目だなと思って私から結局さようならというふうにしたんですけれども、育てるのもなかなか難しいなと思ったことが何度かあります。ちょっと話がそれましたが、結論として私が見極めるコツとしては、笑いのツボです。それで、もうひとつ、

D：自分の研究内容と家庭での悩み、（お子さんに関して）の内容が異なることで、苦しんだことや役に立ったことはありますか。

というような質問をいただいています。結構ギャップがあって、リフレッシュされているなというふうに感じることが多々あります。やっぱり、結構学校もハードで、疲れたと思って帰って、子どもと変な話とかしていて、馬鹿話ばっかりですけれども、馬鹿話とかして、気持ちが上向いて行ったりとかする時もありますし、やっぱり大変なこともあるのですが、非常にいいなと。それから私は一人暮らしで研究していた時は、ほとんど食生活も何も考えていなかったですけれども、子どもができてからは子どもの栄養を考えるようになって、ちゃんとご飯も作るようになって、非常に健

康的な生活を送れるようになったなと思います。実はこれはよく聞く話で、研究者の方は寝食を惜しんで研究をすると言うんですけれども、お子さんができると遅くても何時には帰ろうとか、人らしい生活になるということもあったり、人が人を育てられるような状況になっているかなと思います。色々ありますけれども、今言いましたような二つです。はい。

山口：いっぱいあるんですけれども、まず一番プラクティカルなところから答えますが、農学部のE君から。

E：なぜ学生結婚すると授業料免除なのですか。

って。これはね、結婚すると所帯が独立するんですよ。当然学生二人の所帯が独立すると収入がゼロになるわけです、名目的に。収入がゼロになると、無条件に授業料が免除なの。こういう理由になるんです。これは、他の大学もそうらしいです。実際、私の研究室の准教授の先生は、それで授業料を払わなかったと言ってました。それで、あといくつかあったのが、例えばこれはF君。

F：生物学的には確かに若いうちの妊娠は良いかもしれない。しかし世間の目は冷たい。どう周りの理解を得られるか。

G君は、

G：学生のうちに出産というのはリスクが高そうに感じる。その後の職が決まらないと人生計画が立てられない。

これがね、座小田先生に異を唱えるわけではないけれども、見る前に跳ばない話なんだよね。職が決まらないと人生の計画が立たなかったら、職が決まった時にはもう人生の計画は決まってしまってあとは消化試合かというわけですよ。さらに、そこで子どもができたらば、男はいいんだけれども、女性はそこで妊娠出産というのがあると、無茶苦茶ハンデがあるんですよ。やっぱり、就職する前に子どもがいた方が私は絶対良いと思う。それは跳べという話なんだけどね。

H：学生は勉強することが大事だと思います。

と、これはH君。これも素晴らしい意見だけれども、恋人がいる。同棲する。結婚する。子どもがいるっていうことは、勉強することと反することではありませんよ。むしろ、私のスライドのどこかで言ったけれども、安定したセックスのパートナーがいるっていう方が、勉強には絶対いいと思う。私の経験から言ってもそう思う。それについて、もうひとつ。

I：学生の時に妊娠が発覚した時に、不安はなかったのか。

と。大体その妊娠が発覚するっていう言い方が悪い。さっき言ったように、健康な若い男女がセックスしたらば、妊娠するのが当たり前なわけです。健康な若い男女がお互い好きだと思ったらセックスするのが当たり前だと思うわけです。だとすると、発覚するもへチマもなくて、それをどうするかというのが全ての問題であって、ああでもないこうでもないって考えたら、人生何もできないです。結局私が言いたかったのは。

J：18歳なんて、まだ結婚を考える時間じゃないと思います。

って、これはJ君か。それはね、君が恋をしたことがないからだよ。はっきり言って悲しい。やっぱり好きな子と一緒にいたいって思うのが当然であって、それがリスクが高そうだとか何だとかって、そういうことを言ってちゃ若くないなと思いました。

司会（座小田）：どうもありがとうございます。ちょっと司会者として今日の3人のお話をお聞き

して、私はあらかじめレジュメも読んで、山口先生のパワーポイントもあらかじめ見させていただいていたんですけれども、「恋の予感から子育てまで」というのは副題で、タイトルは「愛と生命の教養教育」なんですね。話が、愛が全然出てこないって、一体どういうことかっていう。今のはフェロモンと恋と予感だけで全てがおしまいで、だからみんな18歳で子どもができちゃってどうするんだって、どうなるんだって不安を覚える。愛っていうのは全然議論されていなかった気がするんですけれども、その「愛と生命」について特に山口先生いかがでしょう。山口先生と羽田先生にちょっと、司会者の方から質問として。

羽田：アメリカでの大学の退学の大きな1番目か2番目は、子どものできちゃった婚なんです。子どもができたことで続けられない。まあアメリカは日本よりはるかに保育制度が充実していない。個人責任ですのでね。それもあって、退学してしまうというのが圧倒的に多い。ですから、ちょっとこの話をあまり引きずりたくはないんだけれども、頭に置いておくべきは、大人の条件は、社会的に見て共通理解があるんですね。ひとつは経済的に自立する。次にパートナーを見つける。愛する対象を見つける。で、家族を作る。子育てするっていうことで、大体ヨーロッパなんかでも大人の三条件とみられている。問題は、大学を出ても就職できないとか、ある意味では遅れているんですけれども、その点で言うと、経済的自立がないところで愛だ、恋だと言っても始まらないって言ったら変ですけれども、特に性の問題で家族と言っても全然始まらない。僕は、これはあまりリーズナブルではないと思いますね。

それで愛の話。山口先生のお話は、性と愛を結びつけているけれども、実はこのふたつが結びつくっていうのは、近代の産物なんですね。これは皆さん、プラトンの話を聞いていると思うけれども、そもそもその愛とかいうのは、自分にとってかけがえのない存在を、人間として互いに認め合う関係が、それが愛の根源的な形態で、これは性を越えて同性的な愛もある。これは美しい意味でプラトニックラブというのにそういうのがあると思うけど、実は愛と性とはある時期は直接関係がないんですね。だけど、愛と性が結びつくことで、家族ができて強力になるので、近代では結びついている。だけど、今性同一性障害とか色々な問題があるときに、愛の問題と性の問題は、切り離せるんですね。異性ではなくても別に愛し合う。これはやっぱり社会的に認める関係にあるというところで言うと、あまり性から愛へ、結婚へ、出産へという話では考えてはならないと思います。愛は色々な形があるので、別に結婚しなくても異性同士付き合って、そして本当に家族を作っていくっていうことが見える段階までは、色々な練習とかいうのがあるだろうから、実際に僕の友人とか若い世代でも事実婚で、いわゆる結婚していない。子育てもしていない、たくさんいます。それもひとつの愛の形だしね。山口先生の個人的な経験で今のストーリーを作っているけれども、僕はまず性の前に愛だろうと。性というのは、逆に言えば相手を傷付けない形っていうことがひとつにはあるしということだと思いますね。子育てについてある質問が、

K：子どもがいて良かったこと

ということを質問している方がいるんですけれども、僕は子育てして良かったと思うのは、素直に人を愛するということは、子育ての中で初めて見えるものだと思います。なぜかというと、異性同士好きだと言っても嫌われたらいやだというので素直に愛せなかったり、それから付き合っている

時にいいことばかりじゃないですね。だけど、子どもって本当に無防備で、親がちょっと気を変えたら死んでしまう。そういう存在ですね。無垢に、子どもに対して愛情を注がないと生きていけない。純粋な愛の対象として、子どもが存在するという。言ってしまえば、子育てをするってことは、愛の感情を育てることでもある。これは動物でも同じですよ。犬を育てることで、実は私たちは犬を育てるだけではなくて、犬を愛することで、自分に愛する感情を育てる。愛も育てなければ存在しない。そういう点ではやっぱり結婚とか自分のパートナーを見つける、子どもを育てるというのは、自分自身に愛する心を育てるという点では、かけがえのない経験だと思います。それは、恋とは違うだろうと思いますね。恋は憧れの感情ね。愛というのは、もっと相手に対して自分を認めてもらったり、自分を相手のために尽くすというそういうものを含んでいるので。僕は恋と愛とは違うと思うんだけれども、英語では同じくラブっていうので、イギリス人は同じに考えているかもしれません。僕は、憧れの感情としての恋と、相手を大事にして、ずっと一緒に生きて行くというのが違うことなので、愛と恋は区別できるし、性とも区別できる。性は愛の出発点ではないというふうに思っています。

司会（座小田）：山口先生、それについてはいかがでしょうか。

山口：すみません、私はそういう話を聞くと、またへそが曲がって、そうでなくとも、もともと曲がっているので言いたくなるんだけれども、私に言わせれば性のない愛なんて、ほんとにあるんだろうかと思う。ここで、性っていうのは必ずしも男性と女性だけではないですよ。男と男だって、女と女だって愛と性はある。私の話の一番最初に言ったように、性は、生きているものとしての我々の最も根本的な欲望なのに、それを飼い慣らしたのは確かに近代、現代の文明だったかも知れない。しかし、飼い慣らしたことが、本当に我々にとって良かったかということを、ちょっと反省してみる必要があるんじゃないかと思うわけです。いずれにせよ我々は道徳と法律と、社会の規範に縛られているから、そう滅茶苦茶なことはできないんだけれども、だけど基本的には、私は愛と性と、正確に順番から言うと、恋と愛と性と、この３つは全く切り離すことができないものだと思っています。

司会（座小田）：今日の討論の主役は皆さん方だということですので、そろそろ皆さん方にマイクを回したいと思います。今の話についてでもいいですし、またもうすでに自分が書いた質問をぜひ取り上げてほしいというのでもいいんですけれども、皆さんの方で質問がありましたら、積極的に手をあげていただければ。特に、どなたに質問したいかということがありましたら、それも指名していただければ助かります。じゃあぜひ、よろしくどうぞ。あげ辛い。何か言われそうだもんね、すぐに。根性が足りないとか、すぐにね。

山口：そんなことないです。それはやっぱり60年の経験がいるんですよ。

司会（座小田）：60年の経験がいるそうです。皆さんにはちょっと早いね。どうでしょうか。難しいですか。羽田先生が、愛の形についていくつかご紹介してくださいましたけれども、私はさっきもちょっと言いましたけれども哲学をやっていますので、愛というのは古代以来、色々なモチーフになってきています。山口先生が背中でスパッと切った絵を画面に出してくれましたよね。プラトンの『饗宴』という本の中に出てくる話なんですけれども、あれは、何でスパッと切るかというと、かつて男男だったものは男を求め、かつて男

女だったものはお互いに異性を求めると、そういう話の神話的なお話なんですよね。かつて、人間は男と女、あるいは男と男、女と女と一体だったと。それが、切り離されることによって男男だったものは男を求め、女男だったものは異性を求め、女女だったものは女性を求めるという、そういうような神話のお話があって、それを基本的には erōs という形で語っていくわけですね、性愛。性的な愛という形で語っていくんですけれども、これが山口先生の基本になっているのかなというふうに思いますけれども。ただ、世の中はもちろんその愛っていうのはそれだけではなくて、色々な愛の形があると考えられてきていますから、その辺のことも考えておかなければならないというのは羽田先生の考え方ですね。例えば子どもを見て、子どもに対する無償の感情、無償の愛情っていうものを自らの内に芽生えさせていって、それを愛の基本に考えていくという。そういう形も当然ありうるわけだから、それはある意味では誰に対してもそういう愛が開けるかどうかという、大きな課題として私たちに課せられてくるようなものになっていくかと思いますけれども、私が色々しゃべり続けてもしょうがないので、何でもどうぞ。質問がありましたら。先生方の中でいかがですか。

吉野：吉野です。ここに座っている以上、何か言わなくてはいけないかなと思っていました。私はいわゆる専門馬鹿という方に属しておりまして、今日の話題は不得意科目のひとつですが、少しだけコメントします。個人的なことですが、30 歳の時に東京で結婚し、3 月の末でしたが、4 月 1 日に東北大学に赴任しました。1 年後と 3 年後に子どもが生まれました。結婚直後にこちらに来てふたりの生活が始まりましたが、今考えますと、子どもの世話、家事は殆どすべて家内に任せていたと思います。土曜日、日曜日は大学に行っていて、羽田先生の話を聞きますと本当に頭が下がると同時に、家内には申し訳ないような気がしてきました。今は、子どもが手を離れたので、今までの借りを返しているつもりであっちこっち旅行に誘っています。ところで、高校の青春時代には、今日のテーマである恋とか愛とか、性とかについてずいぶん色々と考えたことがあります。その時にある作家の本を読んで刺激を受けたのでその話をしますが、その作家の名前は、倉田百三で、評論家、思想家として大正から昭和にかけて活躍した人です。最も有名だった本の名前は、『愛と認識との出発』ですが、自分の悩みとそれに対する解説を時間を追ってまとめたものですが、ある時点で素晴らしい恋愛をして、セックスも大切な要因だと述べていながら、その後、彼女に振られてしまった後は、全く逆の考えになって、恋愛とセックスは全く違うということを論じています。そのことが今でも印象に残っていますが是非ともこのような本を読んでいただき、色々と考えていただければ幸いです。倉田百三はその他に『出家とその弟子』とか、『超克』とか、あるいは『絶対的生活』とか、結構難解な本を書いていましたが、その頃は必死になって読んでおり、その頃のことがその後の人生を方向付けるひとつのきっかけになったと思っております。

司会（座小田）：どうもありがとうございます。質問、難しいですか。今の吉野先生のお話は、皆さんは今青春まっただ中なわけですけれども、その謳歌するということはもちろんあるでしょうけれども、今の山口先生のそそのかすような話によって、これからはますます懊悩を繰り返すという、苦しみを自ら味わうということが出てこないとも限りませんけれども。悩んだ先輩たちがいっぱいいるわけですよね、スパッと恋の予感と

フェロモンだけでは話は進まない。みんなは悩んで、悩み続けている人がいるわけで、その時に指針となるようなそういう先輩たちの明治以降の思想家、あるいは作家たちの本もたくさんあるわけですが、そういうものは皆さん多分手に取ってみれば参考になるものがたくさんあろうかと思います。いかがでしょう。羽田先生どうぞ。

羽田：今、2つ目でちょっと、どういう本がいいかっていうのを、僕もいくつかリストを今日配布しようかと思ったけど、自分たちで探すのが一番いいなと思ってやめました。僕が20年、30年も前の話をしてもいいんだけれども、自分で苦労して見つけるものでしょう。

L：反抗期どうですか

という質問があった時に、実はうちの娘と息子には反抗期がなかったんです。普通は親の作った秩序に反抗して大人になるプロセスだからというふうに言われていたけれど、いつまでも反抗期がない。25、6歳になった時に、なんでお前たちは反抗期がなかったんだって聞いたんです。僕も教育学をやっているので、本棚にたくさん発達心理学の本があるので、女房も大体反抗期ってギャング・エイジで、小学校4、5年で出てくるんですね。そういう子ども達の扱い方の本もある。共稼ぎなので娘が学校から帰ってきても、誰もいないので、女房の本とか読んで、そうか反抗期ってこういうものかと思ったらしい。私もいつか反抗期になるんだなというふうに思ったら、反抗する気がなくなったと言うんですね。

要するに、人間がどういうふうに成長していくかということを知ることが大事ではないか。皆さんの習う心理学は、大人になって終わるんだけれども、実はおじさんの立場になっても老年の悩みとか、中年期の行き詰まりとか、中年期の危機っていうんですね。青年期には自分が何で生きるか分からないので、社会で自分の職業が何かということで皆さん方は悩んで、今言った反応というか応答しながら職業を決めて、職業に入って、いったんここでアイデンティティの自己達成になっていくけど、実はこの問題って一生続くんですね。中年期になって、課長になった。だけどちょっと仕事忙しすぎてこれは本当に自分の仕事かとか。そういうものっていうのは、実は人生を生きていく上で非常に大事な見通しのものになる。ですから、悩むのも大事だけれども、なぜ人間は悩むかということを知ることの方が、もっと僕は大事だと思う。だから、生涯発達心理学の本とか、そういうのもぜひ、これはいい本がたくさんありますから、ぜひ読まれるといいと思う。それは人間がどうやって生きていくかということは人生1回ですから、分からない。その中で色々と、先人の知恵が文学という形で現れたり、それから心理学という形でもって定式化されたり、それを僕たちが一生、一回しか生きられない人生の中で、どういう選択をすることが正しいのか、どういう課題にぶつかるかということを示すものになる。それが分からないと、実は自分がなぜ悩んでいるかも分からない。なので、ぜひ心理学というのは、発達心理学はバイブルにもなるので、ぜひそれは明日でもすぐに生協に行って買ってみてください。波多野誼余夫さんの『生涯発達の心理学』とか素晴らしい本がいくつもあります。ぜひお読みいただけたらと思います。

司会（座小田）：どうもありがとうございます。どうでしょう、皆さんの方から何でも。質問・コメントシートに書いたものでも答えてほしいという何か、ありませんでしょうか。私たちの勝手な物言いだけを聞いていると、だんだん腹が立ってくるんじゃないかという気もするんだけれども、

どうですか。一番前にいるＭ君、質問したそうな顔をしているようだけれども。

羽田：おじさんたち、何言っているんだ、でもいいよ。

司会（座小田）：何でもいいです。

学生Ｍ：「見る前に跳べ」という話の時に、子どもを産む前に仕事につかないといけないとか、頭で考えることが先に出てしまうことは多いと思うんですけれども、その原因は何なのかなと。先に頭でウジウジ、グダグダ考えてしまって、行動につながらないのは、何故なのだろうかと思いました。

山口：誰でもね、グダグダ悩む。グダグダ悩む時に、教育心理学なんか読むと、またグダグダなことにはそれなりの理由があるって書いてある。ちょうどその質問プラス、ここにいくつか類した質問があるから、それを読みながらお話するけれども、これはＮ君が、

Ｎ：異性と付き合い始める際に、必ず相互的な「好き」の感情は必要だと思いますか。

という質問が間違っている。好きだから付き合うんだよ。好きにならなかったら付き合う必要がないんで、なんで好きでもないのに、お付き合いをしなくちゃいけないのかって、そこのところに根本的な間違いがある。それから同じ人だけど、

Ｏ：人のメカニズム的に付き合っているうちに、初めは好きではない人でも真剣に好きになるっていうこともあるかもしれません。

いや、もちろんあるかもしれませんが、嫌いなやつとはそもそも口を利くことはあり得ないと私は思っているのでね。それでＰ君っていうのは大変素晴らしい。

Ｐ：私も気になる人がいるので、積極的に話かけてみたいと思います。

とね。ぜひ、話かけてみたまえ。まずさ、話しかけてみないと始まらないんだよ。それで、駄目だったら駄目でまた考えればいいじゃない。若いうちは何度でも失敗できることがいいところなんだからさ。これが、40歳過ぎて50歳過ぎて、失敗したらどうしようかと、グダグダ悩むようになっちゃうとおしまいなので、グダグダ言う前に何かやってみないといけないと思います。あとは最後にＱ君かな、

Ｑ：彼女がいないのに聞いていて悲しくなりました。

これは、とにかく人を好きにならなくちゃいけない。なるのが生物なんだから、彼女がいないので聞いてて悲しくなったなんて、そういう情けないこと、メソメソしたこと言わないで、やっぱりその周りにいる彼女を探さなくちゃね。それで、言ってみなくちゃ。言ってみて駄目だったら、また探せばいいんだから、というふうに、私は思います。

田中：私の方にも同じような質問があって、

Ｒ：やはり好きな人と付き合うべきですか。

私も好きではない人とは付き合う必要は全くないと思うので、その恋とか愛とかになる時が、やはり好きだということが大前提で、そうじゃないと時間がもったいないかなと思います。そして、

Ｓ：「出会いが少ない」と学生に言われたということで、そのことについてどう考えますか。

という質問があったんですけれども、うちの研究室に今、外国人の方が何人かいて、スペイン人の男の子は、やっぱり彼女がすぐできていました。やっぱりさっき、山口先生が君は恋を知らないからそういうことを言うんだという話がありました

が、そのスペインの男の子を見ていて、やっぱり恋の素晴らしさを知っているからこういう行動が早いんだろうねと、スタッフの人達皆でちょうど言っていたところでした。さきほどの、やっぱり声をかけてみようかと思いましたっていうのは本当に非常にいいことだと思います、お話をすると。面と向かって話をする機会がちょっと減っているってすごく思うんですね。スマホがすごく私は悪いと思うんですけれども、Twitter とか LINE とかでしゃべった気になっているけど、あれはしゃべっていないんです。あんなのは媒介であって、顔を見ながら言うって勇気がいることだし、非常に重要なことで、声をかけてみるとかっていうのは本当に勇気のいることで、恋愛とかにつながることで、大事なことだなと思います。ということで、皆さんいっぱい本当にしゃべったりしてつながっていただければいいんじゃないかと思います。

羽田：悩むというのは、それは人間だから当たり前で、跳ぶ前に見るというのは、人類が作ってきたリスクマネジメントの一番本質的な思想なので、よくよく考えてから跳んだ方がいいと思いますね。それで、つまり１回も人生で失敗しないために色々と考えなければいけないことがある。愛は美しいが、計算のない愛はいつか滅びる。君たちが好きだ、嫌いだ何とかっていうのはロマンチックなんだけれども、実際に生きてきて、結婚し子どもを育てるっていうことであれば、やはり計算の土壌がないと、長続きしない。世の中にはどんな愛も必ず腐朽しますね。錆びていく。特に憧れで始まったものは。計算してそれが持続するという基盤がないと、家族は維持できない。あまり言いたくないけれども、僕の父親というのはあまり経済力がなくて、計算できない人だったんですね。この中にもよくよく考えてみると生活力の弱さとか、そういう課題を抱えた家族がいると思うんですね。結婚し子どもがいれば、責任を持つわけですから、相手方に責任を持つということは計算をする。それはいい意味での計算ね。きちんと戦略を考え、どうやって職業を得ていくか、どう子育てをするかということを考えなしに、人間っていうのは生きていくことができないものです。これは個人差がありますから、僕はそれが絶対とは言わないけれども、少なくとも、愛だけでは人間は生きて行けない。それを支える計算というか、戦略が必要で、それは今の学校教育の中では与えられていない。だから悩むのは当然だろうと思います。

若い時にすてきだと思っても、それが本当に一生を通じたその人の力かっていうとまたこれは別問題ですよね。色々なタイプの人間がいて、その人間の持っている本質というか、いい面が見える時期にその人と出会えるかどうか。それはお互い様でね。だから今いないって悲しんでいる人は、別に諦める必要はないと思います。いないというのが自分自身ではまだちょっと大学に来て１年生で、ぼーっとしているから自分の輝きが相手に見えないのかもしれない。でも、自分自身が成長していけば、色々な人間関係が広がっていって、素敵な人を見る目も変わっていく。若い時はどうしても顔とかスタイル、かわいさに目が行くでしょうね。でも、人間を見るという目が成長すれば、今自分が見えている素敵な人以外のものが自分の価値の中に入ってきて、その人が素敵に思える時期がある。今の自分たちの目線で、素敵かどうかということではなくて、自分自身が成長すれば、自分が素敵に思える人っていうのは見つかってくるだろうと思います。いないからって諦める必要はない。輝く時期は必ず来る。いわゆるモテ期っていうのは必ず来ると思います。その時、自分が

ちゃんと行動できるっていう勇気みたいなものもいるんだけどさ。そんなの別に今いないからって焦る必要もないし、もっと自分の課題というか、自分自身に向かってどう行動するかっていうことを考えていると、必ずいい結果になるんじゃないかなと思います。

司会（座小田）：だいぶ時間が押してきましたので、他の先生方、いかがですかね。では、野家先生。

野家：なかなか今日は、学生の皆さんから手が上がらないので、僕らが話してばかりで申し訳ないのだけれど、実は「愛と生命の教養教育―恋の予感から子育てまで―」というタイトルを考えたのは僕なので、その責任上、一言いっておいた方がいいかなと思います。先ほど山口先生のアジテーション、山口先生は昔からアジテーションの名人なので、それにのせられて、来年あたりできちゃった婚が増えて、授業料免除になる方が半数を超えると、東北大学は潰れてしまいますので、古代ローマの諺にあるように「ゆっくり急ぐ」ことも大切かなと思います。『見る前に跳べ』というのは、大江健三郎の小説のタイトルです。寺山修司は『書を捨てよ、町へ出よう』でしたね。大江健三郎の「見る前に跳べ」というフレーズはイギリスのオーデン（W.H. Auden）という詩人の詩の一節（Leap Before You Look）を取ったものだということを、ちょっと付け加えておきたい。それと「愛と生命の教養教育」で教養教育とは Bildung というドイツ語からきています。Bildung というのは人間形成というふうな意味です。だから、恋愛とか結婚も人間形成の一部だというふうに考えてほしい。そういう意味では学生時代に大いに恋愛をしてください。もともとこのタイトルが始まったのは、実は 4 月に教養教育特別セミナーというシンポジウムがあって、皆さん出ておられたかと思います。その時の打ち上げ会で講師の先生方が集まって酒を飲んでいたら、あそこに出ておられる副機構長の安藤先生が、自分は学生結婚だということをカミングアウトされました。そうしたら、山口先生も俺もそうだということになって、結局、その場にいた先生方の半分ぐらいは学生結婚だったわけですね。それで、近頃の学生はどうなのだろうという話になって、それじゃ、一度やっぱり学生結婚の意義について、レクチャーをする必要があるのではないかということから、こういうテーマになったわけです。ただ皆さんはまだ、青春真っただ中ですから、それは相手が見つからない人がいていいし、悶々と悩む人がいてもいいわけです。必ずしも山口先生のように生物学的に割り切れるものではないと思いますし、日本文学というのは大体恋愛は恋愛でも、成就しない恋愛が多いですね。あるいは人目を避けて包み隠す恋、それを忍ぶる恋と言います。あるいは我々のように年取ってからの老いらくの恋というのもあります。そういう必ずしも順調に恋愛、結婚、子育てと行かないような変則的な恋や恋愛が日本文学の伝統を形作ってきたので、決して皆さんも今相手がいないからと悩んだり、あるいはがっかりする必要はありません。最終的には我々の年代になっても老いらくの恋という可能性が残っていますので。それからもうひとつ、今日の話題の結婚とか子育てに結びつくのはギリシャ語では erōs ですね。ところが、ギリシャ語には philia という概念があって、これは子どもに対する愛とか、あるいはアリストテレスの『ニコマコス倫理学』という本の中では、これは友愛と訳されています。ですから当然男の友達、女の友達、あるいは異性でなくてもいいわけですね。またギリシャ語ではもうひとつ、agapē という神の愛、罪深い人間に対する神の自己犠牲的な愛というものもあります。逆に神に対する愛、修道院に入って尼さんになるとか、世間

の人間関係を捨てるというか、それは当然セックスも拒否するわけで、そういう禁欲生活という中に、初めて神への愛が目覚めるということもあります。色々な愛の形があるわけで、erōs だけではなくて philia や agapē という次元もある。だから、これから皆さんはそういう様々な体験を経て、別に修道院や出家をしろというわけではないのですが、愛には色々な形があるのだということを、これから皆さんの場合は4年間かけて、学んでいけばいいのではないかなと私は考えています。

司会（座小田）：どうもありがとうございます。工藤先生。先生も学生はたくさんいらっしゃる。

工藤：何となく愛とか恋とか、性とかって人生相談みたいな話になって、しかもこのテーマはさっき紹介があったように、我々の飲み会で出たテーマなので、これを明るい場所で語るのはなかなか難しいんだよね。皆さんもコミット（こじんまり）とした集まりで、愛とか恋とか性を語ることはあると思うんですが、今手をあげて何か言うのは、大変勇気がいるだろうと思います。老いらくの恋という話もあったし、痴人の愛なんていうようなこともありますからね。我々年寄りはもう、愛とか恋とか、性を語る資格はないと思っています。若い頃そういう予感もあったし、何となく考えたこともあったような気がするんですが、ほとんど覚えていません。今の女房とは学生結婚です。私も御多分に漏れず。何となく成り行きで今日まで来ました。途中で離婚の危機が3回か4回くらいあったと思うんですが。特に話し合って仲直りした記憶は全くない。成り行きで今日まで来て、そしてこの歳を迎えた。だから、愛や恋や性も成り行きで何とかなるのではないか。そんな気がしています。皆さんとは酒を飲む機会はまだ持てませんが、あと2年後ぐらいに飲み会ができるようになったら、工藤の愛とか性を聞いてみたいという人は電話をください。コミット（こじんまり）とした場所でやりましょう。

おわりに

教養教育院総長特命教授　森田 康夫

司会（座小田）：そうですね、時間もないので、閉会のあいさつも兼ねて森田先生一言お願いします。

森田：はい。山口先生からかなり積極的な話があったのですが、これはやっぱり人によると思います。人間にはすごく楽観的に考える人と、すごく悲観的に考える人がいて、私はどうも、とても悲観的に考える性格らしいのです。だから、常に先のことを考えるということをいつもやっています。例えば今は、「安倍さんのやっていることは本当に大丈夫なのかな？多分、あと2年ぐらいで駄目になるんじゃないかな」などと考えています。一方、自分の子どもを見てみると、必ずしもそうではなくて、私の子どもは女の子ばかり3人いるんですが、2番目がとても楽観的みたいなんですね。本人は医者をやっているんですが、アメリカに行っていた時に結婚したんですが、旦那さんは音楽家であって、旦那さんがどのくらい稼げるかって私もよく分からなかったので、「結婚したい」と言った時には、私は「旦那さんは本当にどれぐらい稼げるか分からないと。だから自分で稼いで、旦那さんを養っていくつもりでやっていけ」と、そういうことを言いました。その時言ったことは、「音楽家はとても儲かることもあるし、まるっきり儲からないこともある。どちらの場合でもやっていけるように、自分で頑張れ。そうするんだったら、結婚を認める」と私は言いました。今はどうも、あまりうまくいかない方にいっているみたいで、子どもがふたり産まれたんですが、その子どもを、アルバイトなんかもしながら、ず

いぶんお金を稼ぎながら家族を養っています。先のことを考えるととても難しい。私はそればっかりが目に付く性格なんですが、でも色々なことをやってみると何とかなるというところもあるかと思います。

今日本の現状を見てみると、子育てに関しては世界の中で冷たい社会になっていると思います。その結果、女性で仕事を持っていても、子どもができると6割ぐらいの人が辞める状態になっています。これは、みんなで努力して、改めなければいけないと思います。

今のようなことをやっていると、子どもの数がどんどん減っていって、日本人が本当になくなってしまいかねないような状態になっています。私は、そのような将来のことを心配する性格なので、こんなことを考えています。

結婚してうまくいくかどうかっていうことは、結果論になることも多いかと思うんですが、割合うまくいくことも多いと思います。しかし、かなりの割合の人が離婚しているんです。そういうこともあるかもしれないが、それでおしまいではないのですから、いろいろやり方があると思います。

これから世の中に出て行くと、色々なことがあるかと思いますが、学生でいる間は失敗しても構わないと思います。学生でいる間に色々失敗して、それから学んで社会に出て行って、活躍してほしいと私は思っております。みんなが活躍されることを期待して、私の締めくくりの言葉とさせていただきます。どうも今日はありがとうございました。

（拍手）

司会（座小田）：どうもありがとうございました。今の森田先生のお話で、この合同講義の全体的な閉会の挨拶も兼ねさせていただきました。長時間に渡って、皆さん方からあまり意見をいただけなかったのは残念でしたけれども、なかなか面白い話を聞くことができました。どうも今日はありがとうございました。3人の先生方に、もう一度拍手をお願いいたします。

（拍手）

それから、質問を書いてくださった皆さん方に対する回答というか、満足してもらえる回答になるかどうか分かりませんが、返事は教養教育院の先ほど言いましたホームページにアップして、先生方から回答を寄せていただきますので、ちょっと時間がかかるかと思いますが、必ず出しますので、楽しみに待っていてください。それでは、今日はこれで閉会といたします。

2.3 合同講義　受講生の質問・意見と教員からのコメント

合同講義を実のあるものとするため、次のような工夫をした。第一に、1 週間前の個別講義を利用して、参加予定学生にレジュメを配布した。第二に、前半の講義を踏まえた討論を活性化させるために、当日の配布資料に予め「質問･コメントシート」（80 ページ参照）を添付し、休憩時間に回収することとした。各受講生にはシートを 5 枚ずつ配付し（必要に応じて追加）、質問したい講師の名前をチェックし、1 件ごとに 1 枚のシートに記入するよう依頼した。受講者数 118 人からのシート提出数は 76 件であった（複数提出あり）。それぞれの講師に対するシートの提出数は下段の表のとおりである。

シートは前半・後半の間の休憩時間（15 分程度を予定）に回収し、質問対象とされた講師ごとに仕分けして渡し、それを踏まえて、各講師が順次コメントを行った。ただし、シートの数が多く時間的制約もあることから、すべての質問に逐一答えることは困難であり、代表的・特徴的な質問を各講師の判断で選んで回答した。

山口教授の「愛と生命:生物学および社会的帰結」に対しては､「学生結婚で大変だったことは？」や「学生結婚している人はどのぐらいいるのですか」など、学生結婚についての質問が多かったが、教授の回答は「案ずるより産むがやすし」というものであった。また「とても心に来る講義でした。私も気になる人がいるので、積極的に話しかけてみたいと思います」とか「こんなユーモアのあふれる講義を受けたのは初めてでした。皮肉とかではなく本当に面白かった」など学生には大いに刺激になったようである。もっとも山口教授からは「本人は結構まじめにやっているつもり」というレスポンスであった。

羽田教授の「学校で学ばなかったこと、子育てから教えられたこと」については、自分が生まれ育った家庭のことを念頭に「家事・家計の公平は分担・負担について・・・もっと聞きたい」という質問が複数寄せられたが、教授の回答は「両親にどう考えてきたかを聞く方がよいかも」というものであった。また「自身の子育てについてこんなに赤裸々に話すことのできる羽田教授に魅力を感じた」のように、教授の率直な人柄に魅せられたという感想が多くあった。それに対して羽田教授からは「私の話は、子育てはプライベートなものではなく､社会的なものであるという位置づけです」という回答が寄せられた。

話題提供者別質問・意見事項数（件）
※質問・コメントシート提出者ベース

田　中　先　生	23
羽　田　先　生	23
山　口　先　生	30
計	76

（複数提出あり）

出席者数：118 名

田中教授の「日々精一杯」に対しては、とくに女子学生から「大学（特に工学･理学系）では女性の教員･学生が少ないですが、その理由としてどのようなことが考えられるのか」という質問があり、教授からは「男の子や女の子で、何となく分かれている子供の時の遊びが大きく関係していると思います。また、理系文系に分かれるタイミングの問題もあるかと感じています」という回答があった。また、やはり女子学生から「女性研究者であってもきちんと研究と子育てを両立することができることを知り、将来への不安が少し薄れました」や「女性の恋から仕事から結婚･子育てまで、自分は難しいと思っていたけど、希望をもてました。ありがとうございました！」という積極的な感想が寄せられたことは、合同講義の意義と役割を考えると大変嬉しいことであった。

その後の自由討論では、工藤教授、安藤教授、野家教授らも交えて、学生結婚や子育て、山口教授が提起された「見る前に跳べ」の是非などをめぐって、活発な討論が展開された。

なお、回収されたすべての質問やコメントを開示し、それに対する教員からの回答をホームページで公開するとともに、本報告書の巻末に資料として掲載した。

質問・コメントシート見本［A5 カラー用紙］

東北大学教養教育院　総長特命教授合同講義

「愛と生命の教養教育―恋の予感から子育てまで―」

2015 年 7 月 28 日（火）16:20～18:30　マルチメディア教育研究棟 M206

質問・コメントシート

学籍番号		所属		氏名	
◇講義内容に関する質問・コメント（どの講義かチェックしてください） □ 山口　隆美　　□ 羽田　貴史　　□ 田中　真美					
（質問・コメント）					
◇講義内容以外の質問・コメント					
（質問・コメント）					

2.4 合同講義に対する学生の評価

合同講義に対する学生の評価を知り、今後の改善に役立てるためにアンケート調査を行った。方法として、教養教育院総長特命教授が担当する総合科目の履修生に渡す予備資料の最後のページに質問事項を記し、回答用紙としてミニットペーパーを配付し、講義終了後に出口で回収することとした。回答数は118名である。

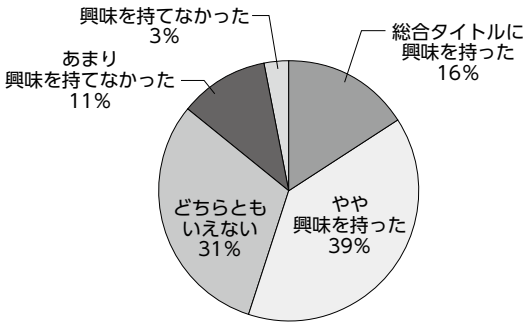
アンケート回答者の学部別構成は、下の表に見られるように、そのまま総合科目を履修する学生の学部別受講者数を反映している。受講者が圧倒的に多いのは農学部であり、75％と参加者のほぼ4分の3を占める（従来は工学部が最も多かったが、昨年度は農学部が79％を占めた）。参加者数は次いで文学部の7％であり、教育学部、経済学部がいずれも3％の順で続いている。昨年と同様に農学部が突出しているのが特徴である。また、各学部の在籍1年生数に対する提出者比率で見ても、農学部が55％とひときわ高く、続く文学部と教育学部の4％を大きく引き離している。それ以外は、1％程度であり、医学部の提出者は皆無であった。

アンケートは7つの質問から構成されている。総合タイトル（「愛と生命（いのち）の教養教育―恋の予感から子育てまで―」）に興味がもてたかという設問には、「興味をもてた」と「やや興味をもてた」を合わせると55％に上っており、否定的回答の合計14％を大幅に上回っている。テーマ自体は、身近な問題でもあるので興味をもって受け止められていたと判断できる。難易度については「どちらともいえない」が48％と5割に近く、「易しかった」（13％）、「やや易しかった」（25％）を加えると86％になる。面白さについては、「面白かった」と「やや面白かった」を合わせると72％に上り、学生からは肯定的に評価されている。また理解度について「理解できた」は30％であり。「少し理解できた」（40％）と合わせれば70％となり、例年よりもかなり高い数値を示している。関心増減度に関しては、「関心が増した」と「やや関心が増した」を合わせて78％と8割近くの学生が関心が増したと答えており、これは主催者にとっては非常に嬉しいことであった。

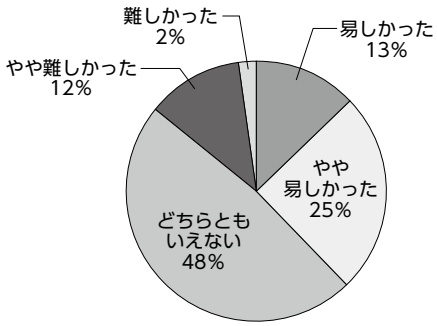
討論充実度については、「充実していた」と「やや充実していた」という肯定的回答が42％あったものの、否定的回答も15％ほど見られた。これについては、テーマが恋愛などプライベートな体験に関わるため、会場の学生からは手を上げにくかったという事情が関わっていると考えられる。ただ、アンケートの内容を見ると、議論はししにくかったものの、会場の学生たちはそれなりの刺激と示唆を受けているようであった。最後の継続希望については、「今後も続けてほしい」と「どちらかといえば続けてほしい」を合わせると50％であり、否定的回答の合計13％を大きく上っている。とりわけ、昨年18％であった「今後も続けてほしい」が、今回は25％と大幅にアップしていることは、学生たちが合同講義に興味と関心をもってくれたことの証左と言えるであろう。問題点の克服に留意しつつ、合同講義を継続する方向で来年度の計画立案を進めるのが、妥当な選択と考えられる。

学部別受講者数と東北大学1年生との対比

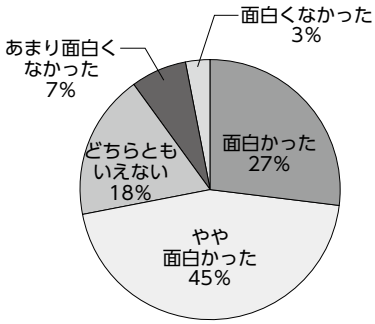
	受講者		東北大学1年生		対在籍者提出率
	実数	全体比	実数	全体比	
文学部	8	7%	216	8%	4%
教育学部	3	3%	74	3%	4%
法学部	2	2%	171	7%	1%
経済学部	3	3%	265	10%	1%
理学部	2	2%	349	14%	1%
医学部	1	1%	286	11%	0%
歯学部	1	1%	56	2%	2%
薬学部	1	1%	87	3%	1%
工学部	6	5%	902	35%	1%
農学部	89	75%	162	6%	55%
その他／未記入	2	2%	—	—	
計	118	100%	2,568	100%	5%



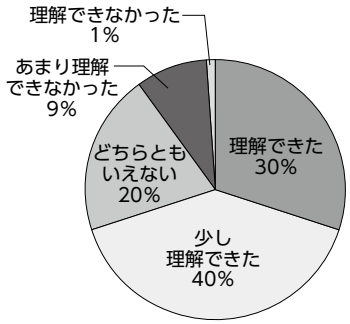
【質問 2】タイトルへの興味



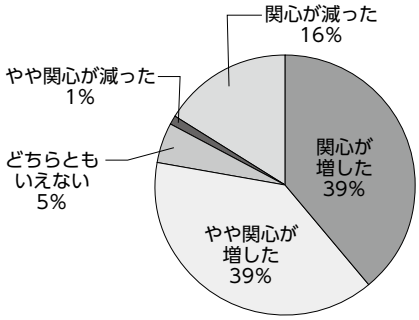
【質問 3】難易度



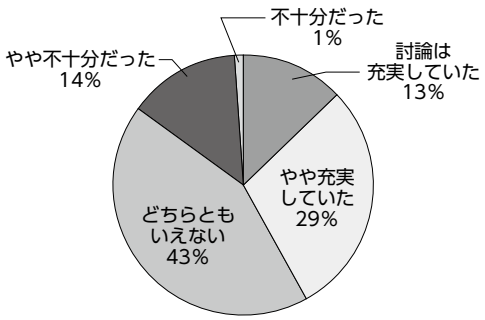
【質問 4】面白さ



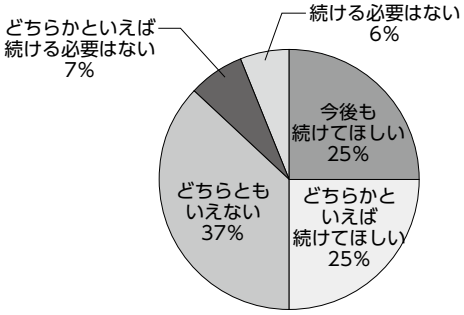
【質問 5】理解度



【質問 6】関心増減度



【質問 7】討論充実度



【質問 8】継続希望

総長特命教授合同講義

「愛と生命（いのち）の教養教育―恋の予感から子育てまで―」に対する評価

（注 1）この評価は、今回の合同講義に対する皆さんの率直な感想などをお聞きし、今後の教育改善に役立てようとするものです。**総合科目履修学生はこの提出をもって出席確認としますので、必ず提出してください。**上記履修学生以外の方は、無記名で結構です。回答は別紙のミニットペーパーにご記入のうえ、退場時に教室出入り口にある箱に入れてください。

（注 2）総合科目履修学生の今回の合同講義に関するレポート提出については、各担当教員の指示に従ってください。

【ミニットペーパーの表面の記入】

●総合科目履修学生

（学籍番号）（所属学部）（氏名）マークシート、記入式ともすべて記入してください。

●履修学生以外（学生、教職員、その他）

学生の場合は、マークシート、記入式とも（所属学部）を記入してください。

（学籍番号）と（氏名）は記入しないでけっこうです。

○共通

（提出月日）　　今日の日付（7 月 28 日）を記入してください。

【ミニットペーパーの裏面の記入】

〔質問 1〕	**あなたが受講している総合科目の担当者はだれですか。**以下の番号で答えて下さい。 1　森田　　2　工藤 3　総合科目は履修していない（学生、教職員、その他）

今回の合同講義を、次の各項目の観点から評価してください。（報告者による違いはあるかもしれませんが、全体を通しての印象を記入してください。）下記の表で**各質問の答となる 1 ～ 5 を選んで、ミニットペーパーの該当する箇所の○を塗りつぶしてください。**

〔質問 2〕興味	5	4	3	2	1
	総合タイトルに興味を持った	やや興味を持った	どちらともいえない	あまり興味を持てなかった	興味を持てなかった
〔質問 3〕難易度	5	4	3	2	1
	易しかった	やや易しかった	どちらともいえない	やや難しかった	難しかった
〔質問 4〕面白さ	5	4	3	2	1
	面白かった	やや面白かった	どちらともいえない	あまり面白くなかった	面白くなかった
〔質問 5〕理解度	5	4	3	2	1
	理解できた	少し理解できた	どちらともいえない	あまり理解できなかった	理解できなかった
〔質問 6〕関心増減度	5	4	3	2	1
	関心が増した	やや関心が増した	どちらともいえない	やや関心が減った	関心が減った
〔質問 7〕討論充実度	5	4	3	2	1
	討論は充実していた	やや充実していた	どちらともいえない	やや不十分だった	不十分だった
〔質問 8〕継続希望	5	4	3	2	1
	今後も続けてほしい	どちらかといえば続けてほしい	どちらともいえない	どちらかといえば続ける必要はない	続ける必要はない

その他、印象に残った点、改善すべき点などは、各担当教授宛のレポートに記入してください。
履修学生以外の方は、ミニットペーパーの裏表空白の場所のどこでも良いので記入して下さい。

■総合科目（火 5 講時）：教育と科学技術（森田）／時代の文脈から見た「食」と「農」（工藤）

あ と が き

東北大学総長特命教授が協力して行う催しとして、2010 年に合同講義を始め、2011 年には教養教育特別セミナーを始めた。

今年度はこれらの企画を継続発展させ、教養教育特別セミナー「地殻変動期の教養・教養教育―新入生とともに考える―」と総長特命教授合同講義「愛と生命(いのち)の教養教育―恋の予感から子育てまで―」を実施した。ただ、両企画とも教員の授業配置の関係から開催時期が前期に偏ってしまったが、この点は再検討の必要があると思われる。

今年度の教養教育特別セミナーは、昨年に引き続き萩ホールを使って行い、花輪理事に挨拶をお願いした。今年度も昨年度に引き続き工学部の協力があり、新入生の参加は 751 名となった。

本年度の教養教育特別セミナーと合同講義では、昨年度と同様に討論の時間を長く取り、また出席した学生の意見や質問を求めた。これら学生の意見のうち、教養教育とそこで身につけるべき力についての質問や意見からは、昨年度に引き続き、多くの学生が教養教育の重要性を認識していなかったことが分かり、本企画が有益であったことが確認された。「愛と生命(いのち)の教養教育―恋の予感から子育てまで―」に関しては、残念ながら参加した学生からほとんど質問が出なかった。

これらの企画を実施し報告書を作成するまでには、多くの方々の御支援とご理解が必要であった。教養教育院長の花輪公雄理事、ならびに高度教養教育・学生支援機構の安藤晃副機構長と羽田貴史副機構長には、多くのご指導とご協力をいただいた。高度教養教育・学生支援機構の事務関係者の方々には、財政面を含め、多大なご支援をいただいた。また、教養教育院秘書の鈴木かおるさんには、報告書作成の様々な場面で献身的なご協力をいただいた。これらの方々に改めて感謝するとともに、今後も、東北大学における教養教育の可能性を追求して行きたいと考えている。

2016 年 3 月

森田 康夫・野家 啓一・座小田 豊（合同講義コーディネイター）

資料　特別セミナー アンケートの主なコメント一覧

［質問６］あなたが今日のセミナー全体を通して最も興味深かったことは何ですか。
主なコメントのまとめ

パネルディスカッション

・いろいろな分野の先生から、一つの質問に対していくつも返答が出てくるので「こんな考え方もあるのか！」と思うことがたくさんあっておもしろかったです。
・学生の教育のために大人がこんなにも真剣に考えてくれていることが有難いことだと思う。ディスカッションの内容がとても興味深く、聞き入るほどであった。このようなレベルの高いディスカッションはもっとやってほしいし、自分も参加して、自分の教養を深めたいと思った。
・学生からの質問で、自分では思いつかなかったような質問がでてきて、様々な視点からの見方があることがおもしろかった。また、様々な立場からの答えが聞ける機会はあまり無いと思うので、良かったと思う。
・ディスカッションを通して今まで自分の中で考えたこともなかったことについて興味を抱くことができたこと。
・パネルディスカッションで、単純な質問から深い内容になっていったこと。
・パネルディスカッションで生徒の質問に対して教授が自分の専門分野の観点から深く答えていたこと。
・パネルディスカッションにおいて、講師の中でも意見が分かれていたこと
・おもしろい質問を思いつく同級生がたくさんいること、様々な角度から批評できることは素晴らしいと思った。
・客席もセミナーに参加できるディスカッション形式だったのが新鮮だった。

など、58 件

持続可能な発展

・経済衰退する地域もある。経済発展が続いていくことはないというところをどうすべきかを考えられたらよかった。また、そこに興味がわいた。
・持続可能な社会について、多くの人が、平等な社会を目指すことだと考えているのが興味深かった。それを目指すことは、より資源を早く食いつぶすことを言うのか、誰もが貧しい生活を送るということなのか、そのどちらでもないものがあるのか気になった。
・パネルディスカッションにおいて、持続可能な発展に対する意見では、5 人それぞれの意志が色濃く出ていて、一般論にとどまらない専門家としてのプライドが感じられたと思う。
・地球の development が早すぎる。そのために、地球が破壊に近づいているというのに新たな考えをもてました。現代も新たな発展が求められている場合が多いがそれだけではなく、持続性を保つためにはゆっくりといくのも一つの方法であるというのに別の知見が得られた。我々には何を求められているのかが大切！
・花輪教授の「死に急ぐ人類」という言葉がとても心に残りました。私は工学部で、より発展的なものづくりをするための教養をしていますが、まるで私たちが負の方向へ向かうために学んでしまっているのではないかと感じました。必ずしも発展が正しいとは限らないことがあるとわかって、これからの学問を学んだ後、いざ現場で地球全体としての利益を心に刻み研究していきたいと思いました。

など、20 件

想像力の大切さ

・朝日新聞の方の話で「想像から創造へ」という言葉が印象に残りました。ただ、人から教えられることをそのまま受け入れるのではなく、自分の頭で考えることで、色々な視点を持てると思いました。
・想像が直接創造につながっていくことを痛感した。これまでの義務教育では道具立てが不十分。自学自習によって補完しなければならないと感じた。
・辻さんの想像をはたらかせることについて、目に見えることだけでなく見えないことも見るということ。そして、想像力をめぐらせて、何をすべきか考えることが大事だということ。
・辻先生の「もし２つの震災が逆の時期に起こったら？」という考え方には非常に“はっと”させられた。物理学者であり、俳句家であった寺田寅彦が言うように、日本は四季があり、他国とはちがった独特の気候や風土をもっています。だから、震災を深く考え、次につなげる上で、「もしちがう時間に起こったら」という発想は、自分にとってとても新鮮だった。
・阪神淡路大震災と東日本大震災、御嶽山の噴火の日時を考えたのは、これからのために大切だと思いました。
・想像力を膨らませ感性を研ぎ澄ませ、自分から積極的に活動していくことが大切だとわかった（勉学も恋愛も）

など、16 件

これからの学びの姿勢

・自分が今後勉強していく上でどのような視点を持つべきかということをしっかりと考えていく必要があると感じた
・大学では、受け身な姿勢で講義を受けているのではだめだということ。今後、起こりうる事態を想像して、勉強していきたい。
・物事を学ぶ体系がいままでとはまったくちがうということ。
・社会に出てから役立つ教養教育についての話
・社会に必要な人材のイメージ
・大学外から見る大学について
・実社会の第一歩が大学であるということ

など、16 件

実際の講義の様子

・工藤先生の教養教育への取り組みの話。我々受講生からすると厄介なレポートやテストにそれぞれ期待される能力・目的があると分かり、形式的な成績をつけるための単なる手段ではないと思えるようになった。
・自分がとる基幹科目どんな内容になっているのか説明してくれたこと
・基礎ゼミの様子がほとんど分からなかったので、説明を聞くことができて楽しみになった。
・基礎ゼミで生徒の書くレポートの内容のレベルの高さ

など、18 件

文理選択

・パネルディスカッション中の質問「文理選択は教育にどんな害をもたらすか」への解答に興味を持った。自分は文理選択は専門性への深化のために必要と考えていた。しかし答弁よりどの分野でどの知識が必要かは分からないから文理選択は害になり得るという考えに驚いた。
・学生からの質問のコーナーが興味深かった。文理選択や学校によって選択できる科目が異なることは議論の余地があると思った。（私は高校で地理を学びたかったが選択できなかった）
・高校時の文理選択について否定的な考えをもつ人が多かったこと。これから文理選択がどうなってゆくのかが気になる
・文系と理系と分けることについてのディスカッションは奥が深く、興味が持てました。さらに掘り下げてみたいと思いました。
・文理選択することによって、教育の幅をせばめることになるのではないかという質問

など、20 件

男女別学とコミュニケーション能力

・男子校、女子校関わらずコミュニケーション能力は個々で育てていかなければならないこと。
・辻先生が何かの質問の返答で国公立大学にまだまだ女子が少ないとおっしゃっていました。「リケジョ」という言葉が社会に浸透したとはいえまだまだ理系の女子、さらに院まで進学する女子というのは少ないのではないでしょうか。私が東北大学に進学したいと決めた時も「どうせ結婚するじゃない」とか「女子でそこまで求めなくてもいいんじゃないか」という女子差別ともとれることを周りから言われました。男女平等の社会になったとはいえまだまだ社会の人々の意識の中に差別は残っているような気がします。そのあたりを議論してみたかったです。
・男女共学についての教授の方々の意見が面白かった。
・教授の学生結婚

など、13 件

教養の意義 / 重要性

・教育において「知る、見抜く、行う」の能力が必要だと言った点。
・教養教育というものは、変動する社会でこそ変わらない基盤となる常識や考え方の土壌であると思った。
・教育には、色々な思考の上で成り立っているプロセスがあり、それでもなお、改良が必要だということ。
・教養（全学）教育が始まったこの時期にその意義について知ることができたこと
・質問しそびれたことで、「ゆとり」でなく「詰め込み」でもなく「生きる力」とありましたが、いま社会に出る人はかなり若い人も多くなっていて、子どもの 6 人に 1 人が貧困といわれている中で全ての人が自分で考えて動けているような仕事ができているわけではないし、学校で教えてもらっても自分で考えて動くような仕事はごく少数の本当の上位の人しかできないため、確かに思考力を育てることは必要だと思いますが、世間の格差を広げるのではないかとも思いました。

など、27 件

教養と専門のバランス

・教養教育と専門教育のウェイトについて。スティーブ・ジョブズ氏の例を聞き、教養教育の重要性がわかった。一見関係のない学問でも、関連があることが分かった。また、技術は陳腐化するが教養はずっと保たれる、ということが印象に残った。
・スティーブ・ジョブズが大学に来てよかったことはデザインを学べたことだという例を通して、専門知識だけではメディアやデジタルの世界を牛耳ることができなかったこと、一見つまらなそうに見える教養科目が意外に役立つことがよくわかりました。また、地殻変動期に自分が何をして何を考えればよいか少し分かった気がします。
・ディスカッション中にあった専門と教養の問題について、技術革新には高い専門性だけでなく、幅広い教養の力が必要だということをとても興味深く感じた。新製品を開発しても売れない、ということがたびたび起こっているが、それは専門性が一人歩きして教養が不足しているから世の中で必要とされているものと乖離してしてしまっているからだろうかと感じた。基本的な教養をしっかりと積むことが大切だと感じた。
・専門と一般教養のバランスについての質問についての答えで、研究したければどうぞご自由にってかんじの答えがあったと思う。全くその通りだと思った。環境はあるんだから、やりたい人はやっているのだから教養教育と対比すべきものじゃないと思う。教養はあった方が良くて専門はやらなきゃいけないものじゃなくて…お前の熱意はそんなもんか‼やりたくて東北大きたのに待ってるだけだなんて
・今までは、大学とは専門的なことばかり学ぶところだと思っていたが、研究の内容（専門的なこと）を周りに知ってもらうためには教養教育が欠かせないということ。
・教養教育はただ単に専門教育を学ぶ上での基礎となるだけでははく、思考力、判断力、表現力などの「生きる力」の育成にもつながること。

など、26 件

教養を学ぶ時期

・「一生、教養教育は続く」というのはすごくいいことだと思う
・教養教育がいかに今後の人生と結びついているか
・教養とは一生かけて学ぶものだという考え方

など、5 件

地殻変動期

・いつの時代にも変化というものが絶え間なく起きている中で、この今現在のみを切り取るような形で地殻変動期という名を与えているところが興味深いと思った。これから起きるであろう「地殻変動」を考えることが大切なのであろうと思った。
・現在「地殻変動期」の中で教養教育の大切さを改めて知ることができた
・地震や火山活動の自然界における“地殻変動”と社会の構造の変革を関わり合わせて地殻変動期と呼んだ点。

など、7 件

その他

・日本人はリスクテイカーにならないということについて。実にその通りだと思うし、なぜそうなのかが気になった。
・安藤氏の講演で出された「しょうがない」と思って挑戦しないということをやめろという意見に深く共感した。自分の考えをどんどん出せる場に自分がいるということを実感し、勉強の意欲が湧いた。
・Something of everything を学ぶには自主的な行動がなければならないということ（新渡戸稲造の話）
・小惑星 Atsuko
・地球温暖化の原因は CO_2 であるという説が一番有力。
・読書量が足りないと思った

など、17 件

空欄 132 件

回答数計：375 件

［質問 7］あなたは東北大学の教育にどんなことを期待しますか。
主なコメントのまとめ

教養教育

・大学は「専門教育だけの機関」ではなく「教養などの総合的な学問を学ぶ機関」となるのはとてもいいことだと思う。自分自身、入学前は経済、経営にしか興味がなかったが、全学教育のシラバスを読んで他の分野にも興味がわいた。これからも教養教育を続けてほしいし、それによって経済、経営を勉強することの幅が広がると思う。
・これから先、60 年間教養を身につけ続けられるようにその基盤となる物の見方、考え方、知識の提供
・東北大学の教養教育に対する真剣さが、このセミナーの開催からも伝わり、この 1、2 年での教養の学び方と、今後とも続く教養の獲得の重要性を重んじる必要性を改めて理解した
・メディアなどをうのみにせず、情報の真偽や意見の妥当性を判断できる教養
・モラル教育。常識の教育。
・時代に合わせて柔軟に変化していける大学教育になってほしいと思います。

など、17 件

学生の視点に立った教育

・人間というものは皆興味のある事、ない事が必ずあると思う。興味のない事を無理矢理学ぼうとしても学習意欲など湧く訳がない。東北大の教育に期待することは、そのような内容でも学習意欲が湧くような、様々な切り口で学べるような講義をしてくれることである。
・学生の主体的な姿勢を尊重するような場を提供してくれること。
・学生の声に積極的に耳を傾け、取り入れていくことを期待します。
・メジャーな説や理論ばかりでなく、マイナーなものも紹介し、個人個人に考える機会を与える教育。
・学生の知的好奇心に適う内容の教育
・数多い専門や、総合大学であることを活かして、個人個人がそれぞれテーマを見つけられるような環境

など、21 件

社会に役立つ / 必要な教育

・社会的にも高い実用性のある知識を生徒が必修で学ぶことができればよりよいと思います。例えば、法学や基礎医学についてなどです。
・しっかりとした基礎教育を積んだうえで、高い専門性を身につけ、社会の様々な場で役立つことができるような教育
・社会に求められるような人になりたいので、その手助けとなってくれることを期待します。また、討論することが好きなので、その機会が多く与えられることを期待します。
・実際、社会において働いている人の生の声をききたい
・もっと、今の社会の形にそったものになるといいと思う。
・より現代の問題に関する科目を開講してほしい
・活躍の場を広げられるような教育
・世間に出て即戦力となる能力を身につけること
・高度な教養を身に付けることで、社会で起きている事柄を理解し、自らの意見を持つこと
・これからの社会で生きていくうえで、必要となる力をつけさせるような教育。
・将来役に立つようなことを学べるといいと思う。

など、33 件

思考力 / 想像力を養う教育

・「1 人で考えることができる」および「数人で議論することができる」物理的な場所と時間が存在すること。また、自分の考えに対して示唆的な発言を与えていただきたいです。
・今まで接してこなかった分野の授業をしてほしい。自分の思考力を養うためにも、敢えて完璧に解説することなく、疑問に思い、自らその問いの答えを探そうと思えるような講義にしてほしい。
・情報技術の発展により、さまざまなニュースが手に入るようになりました。しかし、今の世の中を知るにはまだまだ足りないと思います。世界の最先端技術や情勢、あるいは知っておいた方が良い歴史について知り、考える機会をつくっていただけることを期待します。
・答えあわせのない教育

など、8 件

課題解決力 / 発信力を養う教育

・自分で課題を見つけて、それを解決する力を養うこと。
・他者と協力して課題を解決する力、情報を適切に発信していく力を、無理なく身につけられるような教育
・コミュニケーション能力やプレゼン能力を向上させるための教育
・座学より、ディスカッションや発表などの能動的な活動をしてゆきたい。工学部であり、院に進む予定であるが、そのための発表などのスキルは不足していると感じているし、これからの専門課程ではそのようなスキルを身につける機会は少ない。なので1・2年時の全学過程でこのようなことをしてゆきたい。

など、7件

文理にこだわらない教育

・総合的な学問を学ぶ機会を提供すること（文理とわず幅広い知識を学べる機会）。もちろん専門教育の充実性も期待するのだが、研究内容の具体的な説明とかではなくて、研究プロセスとか課題発見の手法など、時代が変わっても変わらないものを教えてくれるような機会。
・文理に関わらず、自分の世界を広げられるような教育
・理系や文系の分野にとらわれない包括的な考え方や地球全体としての方向性などを考えられるような、大量の知識や経験を大学時代に教授や友人を介して吸収することを期待しています。
・学際的な人間にしてほしい

など、13件

専門教育 / 研究

・一般的な教養というのは大人になっても必要なもので、学びつづけるのが良いのではないかと思いますが、それは専門的な事を学ぶ中で学ぶものであるべきだと思いますから、もっと早く専門的な事をやるべきではないかと思う。高校の英語の先生がおっしゃっていたことだが、英語は必要になると覚える。必要になるからおぼえるのではなく、必要になってからおぼえる力が必要だ。
・各講義がこれから自分の研究などに活きていくものだと思えるような教育
・研究するための基礎を学ぶ機会を提供すること
・センモンセンスの向上の手助け
・専門分野を深く学び、将来研究者となったとき、実力をしっかりともっているようになれること

など、11件

グローバル / 語学教育

・グローバル社会で活躍できる学力、教養を得ること
・国際性を高めるプログラムをどんどん推進してほしい。外国人留学生とのコミュニケーションの場をもっと増やしてほしい。
・グローバルな視点からの教育
・国際的に通用する素養や語学力を身につける機会を存分に提供してくれること
・日本の思想・神道・特質を知った、グローバル社会の中でも母国をもとに、様々な見解、客観視のできる人材

など、18件

教養も専門も大切

・これからの社会を生き残っていくための基礎的な知識と未来を切りひらいていく専門的な知識をよりバランスよく提供すること。
・教養科目から専門科目まで、すべてに対して深い知識を得られる。
・専門に関わらず他の分野への興味も育てていけるような教育。

など、11件

幅広く学べること

・いろいろなことに興味をもたせる教育
・学科の勉強だけでなく、様々な分野に触れられる教育
・基礎～最新の学問や技術
・一生徒個人の力では体験できないような機会を提供してほしい

など、12件

広い視野

・教養教育を通して、自分1人では行えない「視野の拡大」ができるということを期待している。広く、多角的な視点は、この先の勉学、将来研究を行う時などにとても役立つと思っている。
・多角的な視野をやしなうことのできる教育。
・多く、自由意思をもって学べる場。広い視野を得られるような多角的教育。

など、8件

人材を育成する教育

・社会に出て活躍できるような人材の育成
・何事の問題にも論理的理由の言える人材（分数の掛け算が良い例）
・社会に貢献できる人材の育成
・変化し続けるこれからの未来を生き抜く力を学ばせてくれるような教育

など、8 件

人生を豊かにする教育

・人生を豊かにする素材や土台を提案すること
・将来、何かをするときの基盤、基礎をつくりあげるような教育を期待しています
・自分の可能性を広げられる教育

など、6 件

授業のありかたについて

・発信型の授業を徹底してほしい。授業は全て少人数ゼミ教室形式にし、活発なディスカッションが行えるようにしたい。
・一部の授業で、予習しても復習しても理解できるとは思えない授業もあるので、もっと分かりやすい授業、または理解して考える時間を授業の中で設けてほしい。
・学生自身の興味・関心のある分野について自由に学習・修得できる授業態勢
・次の講義が楽しみになるような、その日習ったことで頭がいっぱいになるような教育。
・明確な普遍的な達成目標をもうけてほしい。同科目でも教授によって合格基準がバラバラすぎる。
・能動的に参加していくような学習をしやすいような雰囲気づくり
・私が間違ったかもしれませんが、今の授業の中には家庭科や料理を教える授業がないみたいです。今後そんな授業を受講したいです。
・一般教養でも専門でも、自分よりワンランク上の内容を期待します。難しい事にはやりがいがもてる

など、16 件

教員への希望

・教授から熱意が伝わるような授業（TED みたいな）
・私たちも、未熟ながらも、能動的に、積極的に行動するので、その時その時、先生方が大切だと思っていることを伝えていってほしいと思います。
・教授が上から目線でないこと

など、7 件

履修について

・学生が学びたいことを自由に学べるような体制を整える（教職をとると単位の上限の関係で選択履修の授業がとれないところについて、検討してほしい）
・基礎ゼミをもっと自由にとれるようにしてほしいです。定員を増やしたり､1 人 2 講座とれるようにしたりしてほしいです。
・もっと自由に授業を履修させてほしい。

など、5 件

その他

・知りたいと思ったことを知り、自分が行動を起こしたいと思ったときに頼りにできる人脈をつくることができるような環境
・他学部との交流
・他国・他機関との広いつながり
・女子の導入増加
・学食設備の補充。人でこみすぎている！
・現状維持でよい

など、14 件

空欄：148 件

回答数計：363 件

その他、印象に残った点、改善すべき点などがありましたらお書きください。
主なコメントのまとめ

よかった

・討論が活発で考えが深まる機会となった。
・短時間でも様々な意見を持った学生が発言していたこと
・前半は少し退屈だったが後半のパネルディスカッションは他の生徒の考えを聞けてよい刺激になった
・生徒が聞くだけでなく、自発的に考え、聞くことだけに終始しないこの形式は非常に良いと思う。
・パネルディスカッションが面白かったので、来年以降も行ってほしい
・教養教育（様々な知識）なしではアイディアもでない。数式をいじっただけで iPhone はつくれないということに、教授方々と共感しました。
・教授の学生結婚

など、11 件

考えさせられた

・「研究室にさえ入ればいい」と私も少し勘違いしてたところがあった。いつになっても積極的な姿勢でものごとに臨みたい。
・環境問題が、自分が考えていた以上に深刻であること
・東北大も、学部学科ごとに入試をやるのではなく東大みたいにすればいいじゃないと思った
・IPCC・AR5 を読み返してみようと思った（過去に偽装作為を思わせるようなやりとりがあったけれども）

など、5 件

改善点

・パワーポイントの文章を読み上げるだけではつまらない。その方法であれば資料を配布して自宅で読んでもらえばよい。前半はもっとコンパクトにするべき。
・学生からの質問は興味深いものが次々と出てきたので、このコーナーをもっと増やすといいと思った
・質問のときに、大半の人が質問する意思を持っているのか疑わしかった。また質問を考える時間も短かったと思う。開催前から質問を用意させておくべきだと思う。
・質疑の会にするのも面白いと思います。事前に質問を記入し、質問を選びそれについて答える。またその場で思いついたものを後半に質疑で行うのが良いと思います。
・セミナーの名称に改善の余地あり。「地殻変動」というワードによってその内容への興味をもつ人が少なくなると思う。多くの新入生に来てもらうことを考えるならもう少し考えるべき。
・もっと分かりやすく、こちらも入っていけるようなものが良いと思う。今回のままだと教養教育にキョリを感じてしまう。
・これまで各種オリエンテーションに参加しましたが、一度として時間通りに終了したことがありません。終了予定時間を考慮してその後の予定を立てている人などには迷惑です。予定時間通りに進める努力をして下さい。無理なら、実情に合った時間設定を行って下さい。終了予定時間を書かないのは論外です。
・参加すべき講演会やオリエンテーションの日程を一冊の本にまとめるべき。複数に分けるとどうしても見逃してしまう。
・個別（個人）相談できる場が欲しい

など、23 件

不満

・教養教育自体があいまいにしか説明されず、各話し手はそれぞれ違うベクトルの話になっていて、ふとこれは何について言っているのかと疑問に思うことがある。
・結局、何が目的のセミナーなのか分からない。
・このセミナーはやる必要がないように思えた
・初めは地震などの地球環境についてのものだと思っていた。タイトルが分かりにくい。
・工学部のオリエンテーションの前にやるべきではないと思う。
・最初の講義、4 連続はキツかった。
・頭でっかちを作る教育はやめるべき

など、16 件

空欄：301 件

回答数計：356 件

資料　合同講義 受講生の質問・意見と教員からのコメント一覧

田中「日々精一杯」への質問・コメントと回答

講義内容について

S	「出会いが少ない」と学生に言われたと仰っていたがそのことについてどのようにお考えになっているか。
回答	本人次第で、趣味や色々な場面など、世界を広げていただける良いのかなと思います。
C	自分に取って良い人だと感じる（見きわめる）コツは何かあるのでしょうか？
回答	笑いのツボが一緒の人、また、何か自分の中で譲れないと思うものがあったらそれをクリアする人。
R	自分の立場に理解のある人と本当に好きな人が異なる場合でも、やはり理解のある人を選ぶべきなのか。必ずしもお付き合いの開始に相互の「好き」は必要なのか。
回答	おつきあいには「好き」は必要。それが無ければ時間がもったいないと思う。
コメント	いい相手を見つけたいです。
回答	頑張ってください。
質問	生後数か月ほどでお子さんを自分の手から放して預けるのは不安に感じたりはしませんでしたか。
回答	不安よりも、仕事に戻らないとという復帰への気持ちの方が大きかったです。保育園の先生は私よりもプロなので、適切なことを教えてもらうことが多かったです。
質問	子育て支援に関して今足りていないと考えることは何か。また、これから必要になってくると考えることは何か。
回答	保育園はどうしても必要だと思われますが、保育士の待遇が悪いのでもっと良くなることが大事だと思う。また、会議は９時５時の間に行う、や、週末には仕事が入らないなどとなっていると良いと思われる。
質問	私は保育園出身で、入る場所探しに苦労したと親に話されました。私が生まれた頃と先生のお子さんが生まれた頃ではどちらのほうが保育園探しが大変ですか。
回答	地域の問題が大きいです。現在でも北陸などでは、待機児童はゼロと言われています。都会は特に大変なようで、仙台市は、働く女性が多いため、非常に大変です。
D	自分の研究内容と、家庭での悩み（お子さんに関して）の内容が異なることには何か苦しんだこと、逆に役に立ったことはありますか。
回答	お迎えのときに強制的に思考が止められる、どちらも良くも悪くもです。研究の集中や作業が止まることもありますが、いい気晴らしになり、研究に戻ったときに良くなっているときもあります。
質問	私もやるなら研究に集中したいですが、やはり保育園や育児ヘルパーを利用して自分の手で育てるというのが難しそうです。自分の手で育てたいとは思いましたか？
回答	保育園やヘルパーなどを使っても、任せきりではなく、自分で育てることが重要と思います。子供の態度は非常に親や家族とのやりとり反映するので、子供に向き合う時間を大事にしています。
質問	研究をしながらの生活の中で第二子が欲しい、と思うことはないのですか。
回答	思います。しかし、残念ながら体力的に困難でした。
質問	大学（特に工学・理学系）では、女性の教員・学生が少ないですが、その理由としてどのようなことが考えられるのか、女性の立場から教えてほしいです。
回答	男の子や女の子で、なんとなく分かれている子供の時の遊びが大きく関係していると思います。また、理系文系に分かれるタイミングの問題もあるかと感じています。中学校や高校のような思春期でなく、大学まで理系文系を選択するタイミングが延びれば変わるのかなとも思います。

質問	（事前配布資料を読んで）女性教授が東北大学にいることを知ったとき、その教授のどのようなところ、魅力から田中教授の選択肢に「女性教授」が加わったのか。
回答	女性教員が会議の中心となって会議を取り仕切っていた。女性はサポートというイメージを私自身も持っていたが、そうではなく女性教員も大学で主動となることができるのだなと思った。
質問	田中先生が人生において重視する研究生活の魅力とは何ですか？
回答	未知への挑戦や発見ができること。
コメント	女性研究者であってもきちんと研究と子育てを両立することができることを知り、将来への不安が少し薄れました。
回答	私のが「きちんと」かどうかは、定かではないですが、大丈夫と感じていただけると嬉しいです。
コメント	女性の恋から仕事から結婚・子育てまで、自分は難しいと思っていたけど、希望を持てました。ありがとうございました！
回答	はい、大丈夫です！頑張りましょう！
コメント	今、結婚は働きたいと思う女性には難しいと思われがちだが、そんなことはないんだと思った。
回答	はい、大丈夫です！頑張りましょう！
コメント	子育ての大変さを知りました…
回答	日々勉強です。
質問	『TSUMUGU』を見たのは今日が初めてです。各研究室に１つは配るなどの工夫はされているのでしょうか？制度など、教員だけではなく院生にも通知はされないのでしょうか？
回答	はい、教員には全員に配っており、研究室にも配られているかと思います。来年度から新入生学部生に配ることを予定しています。
講義内容以外について	
コメント	お子さんのお誕生日おめでとうございます。
回答	ありがとうございます。
質問	子育てにおいて虐待問題がよく取り上げられることがあるが、その防止策として親に何らかの働きかけをする場合どのようなことが有効だと考えられるのですか？
回答	つらいのは自分だけではないということが分かる、あるいはつらいときにつらいと言える環境（保育園や職場など）があることが重要かと思います。

羽田「学校で学ばなかったこと、子育てから教えられたこと」への質問・コメントと回答	
講義内容について	
質問	大学の専門の学問が役に立たないならば学生時代に何から人生の教訓を学べば良いか？
回答	専門の学問だけでは不十分と自覚するときに、あるいは自分がどうありたいかを考えるときに、学ぶべきものが見えてくるはず
質問	頻繁に親せきの人々と会うことは子供にどのような良い影響を与えると思いますか。
回答	人間関係
コメント	ぼくの家族は家族旅行はありませんが、話をきくに、家族旅行はよいものだと思う。成長するにつれ、離れがちになる家族のきずなをつなぎとめる。
回答	お金がかかるよ
質問	子供が海外で学びたいと言ったときは、自分のもとから離れるということで寂しいと感じましたか。
回答	離れていけるだけ成長したと思うとうれしかった
A	子育てに関して、何をつたえるか、価値判断が必要と仰っていたが、先生ご自身の子育ての際に何を大事にしていたのか。
回答	質疑の中で回答済み
B	家計の管理等は全部嫁さんに頼みたいと私は思うんですが、そういう発想は“公平”とか“平等”とか、そういう概念に反することでしょうか。
回答	その代わりしっかり働くこと
質問	家事・家計の公平な分担・負担について具体的に感想や実感などをもっと聞きたいです。
回答	両親にどう考えてきたかを聞く方がよいかも
質問	羽田先生のような家庭での役割分担や大学や就活にも力をいれてくれる父親がよかったです。私の父は、お金をかせいでいるだけですべて家事は母まかせ。私はすこしでもやってほしいと思っていますが、父のお金があるから大学へいけているのであり、あまり言うことができません。父はきにいらないとすぐキレるからいやです。
回答	大人はそんなものです。親だから理想型であってほしいが現実は違うことがほとんどですから、ありのままの親を受け入れることも大事です
K	町内会など大人数をたばねていく方法。それに関して、子供がいてよかったこと。
回答	相手の話をしっかり聞くこと
コメント	僕も保護者会のリーダーを頼まれるような人になりたいです。
回答	がんばれ
質問	人生、一度で、自分の輝く時期があるとおっしゃっていましたが、それまで待つのは楽しいのでしょうか？人生で一番大切なのは人との出会い、付き合いだと思います。なので、待つというのは、人生を無駄にしているような気がしました。
回答	待たなくともよいが待ってもよい　待っているときに何をしているかが問題で　人生を自覚的に生きていれば無駄な時間などありません
質問	時間の都合上、話せなかったことを教えてください。
回答	忘れました
コメント	人として生きていくための道徳に関する授業は学校で行われているが、子育てや親の老後の世話については確かに具体的な指導は行われていないと気付くことができた。
	育休しても簡単に障害なく社会復帰できる環境で良いなと思った。
	高タンパク質なものを幼少のころから与えるとアトピーになるのには驚きました。また、羽田教授と北海道には強いつながりがあるようですね。私は北海道出身なのでうれしいです。
講義内容以外について	
L	反抗期の有無について教育的にどう思いますか？
回答	発達のプロセスとしては重要
質問	異性とおつき合いを始める際に必ず相互的な「好き」という感情は必要だと思いますか。
回答	好きでありかつ尊敬できることが何より重要かと
質問	日本の大学はどのようにして立派な人間の育成に貢献できると考えますか。
回答	世界に目を開かせることで
コメント	自身の子育てについてこんなにせきらに話すことのできる羽田教授に魅力を感じた。普通はこのようなプライベートなことは隠したがるものだから、羽田教授のふところの大きさが見れた気がする。
回答	私の話は、子育てはプライベートなものではなく、社会的なものであるという位置づけです。保育園や保母さんの存在なければ子育てはできなかった。学童保育なければ仕事を続けられなかった。社会によって子どもは育つのですから、堂々と語られるべきです。
コメント	下村文科相※の「社会に実用性のある方向性の学問以外は、国立大ではやめていく」的な発言、アタマおかしいですよね。学問とヒマつぶしの境目のあいまいさが、教養のステキなところだし、世界がどんどん複雑化していくのに、教養の軽視は大衆を単純化させていくようなものな気がします。

※平成 27 年 7 月当時

山口「愛と生命：生物学および社会的帰結」への質問・コメントと回答	
講義内容について	
コメント	「性交」という言葉に対し、恋が伴うという意識的なこと以外に、人間が子孫を残すために必然的に行うものだという生物学的な印象も受けた。
回答	その通りです。私に言わせれば、そのことについて、意識的に蓋をする、強い表現をすれば隠蔽する、というのが、近代の「道徳」なんだと思う。こういう、表面を取り繕う社会、典型的には、19 世紀から 20 世紀のイギリス社会（ビクトリア時代）の社会くらい、押し込められた性的なものが醜悪なリアクションを起こしていた社会はないと思います。それに比べたら、江戸時代の日本なんてのは、身分社会の桎梏は強かったが、人間の性をおおらかに許容する社会であったと思います。
コメント	イザナミ・イザナギの話を聞いて思ったのは、古来は下ネタという概念はなくて、今でいう下ネタは神聖なものだったのだなあと感心した。
回答	そうです。世界で、こういう種類の神話があるのは日本に限りません。私の生物学の講義でも、最初に取り上げることだが、生命体というものの定義で最も重要なものは生殖するということです。これくらい不思議なことはないし、また、神聖なものはないと思います。
質問	先生が結婚したときも得るもの、失うものがあると感じましたか。
回答	それは、その時はいろいろあると思いました。結婚していない連中は、しがらみがない分、比較的自由に遊んでいるしね。でも、結果的には、私はそういう選択をしたのですから、失ったものをあれこれあげつらっても仕方がないと思ってきました。
E	なぜ学生結婚すると授業料免除になるのですか。
回答	これについては、講義の質疑応答で答えました。
F	生物学的には確かに若いうちでの妊娠は良いかもしれない。しかし世間の目は冷たい。どう周りの理解を得られるか。
回答	結局、自分のやること、生きたい人生を、世間の目がどう思うかで決めるのかどうかということだよね。
G	学生のうちに出産というのはリスクが高そうに感じる。少なくとも職が決まらないと、人生計画が立てられない。
回答	この意見は、講演でも採り上げたけど、職が人生を決めるわけではないよ。逆に、女性の場合、職（もう少し詳しく言えば、企業、就職先）の選択のときに、このことを考えておかないと、出産して、子育てをするという機会を逃す可能性があるから、職か結婚かという二者択一で考えない方がいいと思います。
H	学生は勉強することが第一だと思います。
回答	勿論、勉強することは重要だがね、勉強することと、恋愛することは別に排他的なことではないと思います。講演でも言ったけれども、安定的な性のパートナーがいるというのは決して勉強を阻害することはないと思います。
I	学生の時に妊娠が発覚した時に不安はなかったのか？
回答	これも講演の質疑応答で取り上げたが、そもそも「発覚」という表現が悪い。なんか、犯罪でも犯したみたいじゃないか。妊娠は、実に自然な現象です。
質問	学生結婚で大変だったことは？
回答	それは、やはり、君たちが心配するように、子育てと、大学を卒業するための勉強を両立させることだったと思うが、でも、案ずるより産むが易しというのは事実だよ。
質問	学生結婚している人はどのくらいいるのですか。
回答	統計はよく知らないので、多数を占めるということではないかと思うけれども、講義のなかでも野家先生が言われたように、大学の先生たちのなかでも結構多いところをみると決して勉強の邪魔になるものでないことは確かだと思う。
質問	東北大学内に保育所があるのですか？
回答	現在、少なくとも 2 箇所あります。もうすぐ 3 箇所になります。基本は、職員のためのものだが、学生の子どもも受け入れています。
質問	東北大学自体は学生結婚に関して肯定的なのか、否定的なのか、どちらなのだろうか。
回答	大学は、結婚相談所じゃないんだから、肯定的も否定的もないと思う。しかし、保育所を作って、そこに当然のように学生の子どもを受け入れているんだから、良いとか悪いとかの価値判断を超えて、そういうものはある、と認めているのだと思います。

コメント	子どもがいつも就職に影響しないというのは意外だった。
回答	これは、最近まで、某一流上場企業の研究部門の部長をしていた人が言っていたので、事実と思います。世の中には、勿論、結婚していたり、子どもがいたりしたら、どうのこうのという企業もあるだろうとは思うが、そういう所は、どうせ、それ以外のところで、狭量であったり、組織が歪んでいたりする（と、いう風に考えて）のであるから、こちらから願い下げにしたらよろしいと思います。
J	18 才なんてまだ結婚を考える時間じゃないと思います。個人的に…
回答	ま、それは、個人的意見だから、別に無理してそうしろとは言わないよ。
O	人のメカニズム的に付き合っている内にはじめは恋愛的に好きでない人でも真剣に好きになるというのはあることなのでしょうか。
回答	講演でも言いましたが、恋愛的に好きでない人と「付き合わなければならない」（特に、君たちの日本語で言うところの、付き合い＝セックスする、という意味で）ということが理解できない。好きだから、付き合うんではないのだろうか。
質問	好きと愛の違いは何ですか？
回答	わかりません。講義のなかでも言ったように、もしかすると Siri が教えてくれたように、愛には、理解という要素、ついでに言えば、受容という要素があるのかも知れない。
質問	遺伝学的に遠い人を好きになるというが、遺伝学的近い人は好きになるのか逆にきらいになる事が多いのか？一番近いのは両親。親子げんかははげしい。なぜでしょう。
回答	親子げんかが激しいと言っても、ほんとの敵との闘いに比べたら、どうってことはないと思う。遺伝学と、人と人の争いは、関係ないと思うね。
P	とても心に来る講義でした。私も気になる人がいるので、積極的に話しかけてみたいと思います。
回答	そうです。頑張りなさい。それで、ダメだったら、頭を冷やして切り替えて、また好きになることが出来る人を見つけてください。チャレンジしない人生なんて、特に、若い内はつまらないです。
質問	肉食系になりたいです。けど嫌われるのが怖いです。対処法を教えて下さい。
回答	大体、肉食系だとか、草食系だとか、マスコミがおもしろおかしく言うのを真面目にとったらいけないよ。ヒトは雑食系で、肉も草も食べるのだよ。「嫌われるのが怖い」なんて言っていたら、いつまでも何もできません。嫌われるのが怖くて、何もしなかったら、好かれることもないわけですよ。何かして、だめだった、やり直せばいいんだよ。
Q	彼女がいないので聞いてて悲しくなりました。
回答	そんな、後ろ向きなことを言わないで、周りを見渡してみたまえ。
講義内容以外について	
N	異性とおつき合いを始める際に、必ず相互的な「好き」の感情は必要だと思いますか。
回答	それは、封建時代の家と家の結婚じゃないんだから、嫌いなやつとは、付き合う必要はない、というのが私の立場です。
質問	学生結婚を勧める 1 番の理由は何ですか？
回答	誤解があるようだが、結婚することを無前提に勧めているわけではない。好きなひとがいて、妊娠したら結婚して出産するべきだと言っている。
質問	先生は結婚、子育てを通して、どのようなことが一番強く心に残りましたか。
回答	振り返ってみて、やっぱり、パートナーが居るということくらい人生の助けになったことはないと思います。
質問	50 年たっても初恋の感覚はまだ覚えていますでしょうか。
回答	それは勿論そうだよ。講義でも触れたが、それは、頭で分かることではないね。胃のあたりにせり上がるものがあったと思う。
質問	人を好きになったり、きらいになったり、脳科学的にどこまで解明できているのでしょうか？
回答	そんなこと、いまどき流行の脳科学なんかで分かる訳がないでしょ。大体、今、そこらで面白おかしく言われている脳科学なんて、ほとんどが、デタラメだと私は思っている（学問的な意見を含めて）。東北大にもおるがね。
質問	こんなユーモアのあふれる講義をうけたのは初めてでした。皮肉とかではなく、ほんとにおもしろかった。
回答	どうもありがとう。本人は結構真面目にやっているつもりなんだがね。

複数の講義担当者に対する質問・コメントと回答	
講義内容について	
質問	子育てに関して、ご両親は何とアドバイスをなさっていましたか。
田中回答	アドバイスはあまりありませんが、私の親が体調が良かったころは（今は調子が悪く半分介護状態になってしまいましたが）子供の病気の時は飛んできてくれたり、また夫の親も遊びに行ったときは、私にゆっくりさせてくれます。
羽田回答	何のアドバイスもありませんでした（父はすでに他界）
山口回答	ま、快くかどうかは知らないが、そういものだと思って受け入れてくれたと思う。特に、アドバイスというのは覚えていない。
質問	研究か恋か、優先事項（バランス？）の取り方でアドバイスがあればお願いします。（期間も含めて）「一緒に暮らしてその地で仕事を探す」VS「離れていてでも、自分のやりたいことをする」
田中回答	人それぞれだと思うのですが、その人の恋愛や仕事次第だと思います。自分の気持ちに正直に、自問自答しながら対応するのが良いのかなと思います。
羽田回答	恋はどちらかを選択するのも当時者の間のことで、唯一の答えはない。人によって違います。しかし、愛するなら自分のためではなく、相手の希望をかなえるために自分が何を犠牲にできるかが大事でしょう。
講義以外について	
質問	なぜ近親相姦はタブーとされているのでしょうか。（近親相姦が禁じられる理由としてよく聞くのは「生物学的によくない」「子供の遺伝子に悪影響を及ぼす」というものですが、現代では医療技術・避妊技術が発達し人工的な手段により、かなり高い確率で妊娠を回避することができます。では、子供ができないことがほぼ確実に約束されるなら近親相姦は許されるのでしょうか。許されないとするなら、それはどうしてでしょうか。
羽田回答	ネットで調べればある程度の答えはあるのでしょう。家族間の性愛関係は、成人間のそれではなく、ほとんど多くの場合、支配と隷属、暴力を伴うものです。また、大人の恋愛関係を構築できず、成人になりきれない年長者が年少者を欲望の対象にするという面も、心理的に説明されています。妊娠の有無だけではなく、性愛関係として異常性欲に区分される理由かと思います。
山口回答	これは、すごく難しい質問だし、質問者が、こういうことを聞くのは多分非常に差し迫った事情があるのではないかと思うので、軽々しくは答えられない。しかし、結論から言えば、それはあり得ると思う。近親相姦がタブーであることは、野生の生物にも見られるという報告もあるが、そうではないという話もある。たとえば、ネコ科の動物では全くタブーでないらしい。ヒトの場合、歴史的にみれば、それは、社会によるという回答になる。たとえば、古代エジプトの王朝では、兄弟姉妹の結婚は全く当たり前であった。生物学的にひよわな子孫が生まれるというのも、近代以降の考古学者が、その固有の倫理観に基づいてあげつらっている側面も多いように思う。実際、我が国の法律では、従兄弟、従姉妹の結婚は適法であって、さらに突っ込んだことを言えば、それより以内の関係でも、役所に、婚姻届が受理されないということが全てであって、相姦することそれ自体は犯罪ではない。つまり、罰則はないと思う。勿論、ときどき、週刊誌ネタなどに取り上げられる、父娘間などの何らかの強制を伴う関係は、それこそ、憲法24条に言う、同意に基づくものでないから、憲法違反であるが、それでも関係それ自身は犯罪を構成するわけではないと思う。もし、そこに愛があるなら、生物学的には勧めるわけには行かないが、許容されてしかるべきだと言うのが私の回答です。

平成27年度　教養教育院セミナー報告

教養教育特別セミナー

地殻変動期の教養・教養教育 —新入生とともに考える—

総長特命教授合同講義

愛と生命（いのち）の教養教育 —恋の予感から子育てまで—

平成28年5月　発行

東北大学教養教育院 高度教養教育・学生支援機構
Institute of Liberal Arts and Sciences, Tohoku University

e-mail info@las.tohoku.ac.jp
http://www.las.tohoku.ac.jp

Waterless Printing. Naturally.
このパンフレットは環境に配慮した「水なし印刷」により印刷しております。

VEGETABLE OIL INK
環境にやさしい植物油インキ「VEGETABLE OIL INK」で印刷しております。